
海外技術協力叢書 II

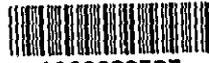
ネパール篇

ネパールの工業事情
ネパールの産業事情
ネパールの経済開発計画

海外技術協力事業団

217
9.0
K

JICA LIBRARY

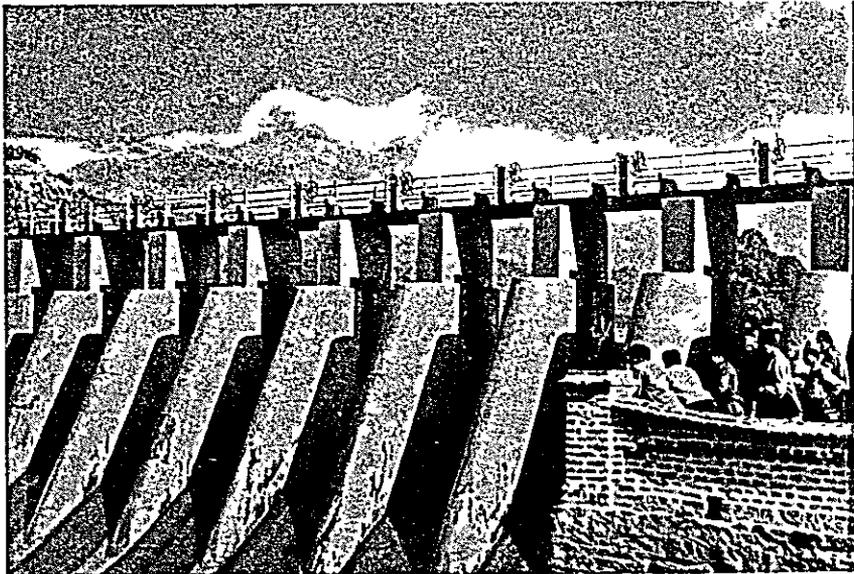


1060239[9]

国際協力事業団	
入館 52. 3. 28	217
登録No. 5336	9.0
	K

海外技術協力叢書 Ⅱ

ネパール篇



ポカラ多目的ダム
ヘワタール湖水を利用、インド
の援助で1961年に完成。
出力 1,000KW

海外技術協力事業団

国際協力事業団		
受入 月日	'84. 5. 24	116
		36
登録No.	07385	NP

目次

ネパールの工業事情	1
はじめに	3
1 歴史的背景とその特質	4
2 地理的条件とその特徴	11
3 社会的背景とその特殊性	20
4 交通事情とその比重	42
5 資源の現状とその開発	60
6 ネパールの工業の現状と将来	87
7 貿易とその動向	128

	ネパールの産業事情	155
1	気候	157
2	植物	158
3	森林	160
4	土地利用	162
5	農業	163
6	土地保有、税金	169
7	小作契約、負債	172
8	耕地の規模と家族制度の変化	173
9	土地改革	174
10	土地利用の改善	175

11	外国の援助	176
12	鉱物	178
13	動力資源	179
14	通商	181
15	財政	185
ネパールの経済開発計画		
1	はしがき	189
2	計画の目的と重点	190
3	開発資金と財源	192
4	事業計画	194
5	むすび	212

ネパールの工業事情
ネパールの工業の現状と将来 (上)

恵エ
下ヱ
湧イヌ
（通商調査所工業品検査所
検査部長）

はじめに

3 ネパールの工業事情

ネパール国が大きく発展し、国民が豊かな生活を送るようになるためには、工業の振興を計らなければならぬ。この計画をたてるにも、これを遂行してゆくにも、又、外国があたたかい援助の手をさしのべるにも、何らか、手がかりになる資料が欲しい。又、国民全体に工業の非常に遅れている現状を知らしめ、その問題点を指摘して、国民の意欲を高揚することも必要であろう。しかし現在、ネパールの工業の現状を知る資料は、ネパールの国自身にも、又世界のどの国にもまだないようである。このような意味で、この国の工業開発・援助に、少しでも役立てばと考へ、仕事の余暇をさいて、この資料を作ってみた。短期間で、その上、仕事の余暇なので、粗漏な点、書き足りない点が多い。それ故、これは単なる私のメモに過ぎない。今後更に調査・研究を重ねて、一層充実したもの、正確なものにしてゆきたい。一応、最初の試みとして、次のような点を取りあげてみた。

一 歴史的背景とその特質

明治維新を思わせるネパール

ネパールの歴史は他の国の歴史と同じように、古代・中世・近代の三つの時代に分けることができよう。この間、王朝はキラタス、リイチャビス、タクリス及びマアラス王朝の順で変わり、現在シャハ王朝時代である。シャハ王朝が出現するまでは、多数の小国が分立しており、これらの小国が常に相争っていたので、政治を改善し、社会の改革をする暇がなかった。しかし工芸の面だけは、宗教に関連して、華やかに栄えた。今なお、カトマンズ・バターン及びパートガオン等の都市には優れた石・粘土・金属・木材の工芸品が数多く残っており、当時の繁栄を物語っている。これがネパール人の工芸品に対する美の感覚、手先の器用さを養い、後にこの国の特産品である優れた土産品産業を生み出す原因をなしているのである。一七六三年、プリトビ・ナラヤン・シャハ王がシャハ王朝を樹立して、初めて国を統一したが、一八四六年、国王ラアジェンドラ・ビル・ビクラム・

シャハのとき、シャング・バアハドウルにより、いわゆるラナ幕府が樹立された。そして国王から、あらゆる政治権力を奪い、首相職を世襲的に独占し、軍司令官及び各閣僚、外交使節、高級軍人、裁判官にいたるまで、ラナー一族が独占した。このため、正統な国王も、正規の上下両院からなる議会制度も無視した独裁政治を行ない、嚴重な鎖国政策を取り、ラナ政権を維持するためのあらゆる政策を実施してきた。このため、ラナ幕府の独裁政治に反対し、民主国家を建設しようとする気運が国民の間に高まり、今から約十年前の一九五一年、国王トウリイバン・ビル・ビクラム・シャハの時、民主革命が起り、遂にムホン・シャム・セール・ラナは大政を国王に返還した。そして遂に一世紀以上にわたるラナ幕府は終りを告げ、初めて国を開き、いわゆる中世封建社会から近代社会への第一歩を力強く踏み出した。一九五五年、国王トウリイバン・ビル・ビクラム・シャハの死去により、長子マヘンドラ・ビル・ビクラム・シャハが新国王の地位につき、一九五〇年、待望の憲法を發布し、ネパール政治上最初の総選挙を実施し、ビー・ビー・コイララ党首の率いるネパール会議党が絶対多数を獲得して、一度はビー・ビー・コイララ党首を首班とする政党内閣の実現を見た。しかし一九六〇年十一月、日本の皇太子及び同妃殿下のネパール訪問帰国直後のクーデターにより、ビー・ビー・コイララ首相以下逮捕投獄、すべての政党も解散され、現在国

王の親政となっている。それ故、現在議会は停止され、戒嚴令下にあり、政府の主要建物には着剣の兵隊が立ち、夜十時以後の外出は禁止されている。しかしその後政党政治によらないパンキヤト制度を採択し、民主政治を樹立しようと懸命な努力を重ね、この程、この制度による選挙を実施した。ネパールは開国して初めて外国の実状に接し、政治・経済・文化等、あらゆる面で非常に立ち遅れているのに驚き、現在広く世界の知識を吸収し近代国家を建設しようと懸命の努力を払っているが、特に産業の開発に大童の状況である。現国王は御年四二歳、強健な体格の持主で、その若さと健康に物言わせて、自ら日本を初め、米・英・中・ソ等多数の国を歴訪し、海外の見聞を広め、挙国一致をもって、旧弊を打破し、諸政の一新に全力を傾けている。ネパールの現状は、丁度百年前に、日本の徳川幕府が、明治天皇に大政を奉還した明治維新のときに、よく似ている。

工業の発展をはばんだ鎖国政策

長い間、ラナ幕府がその政権を維持するためにとって来た色々の政策が現在、ネパールの産業開発の大きな障害の一つとなっている。そのうち、工業の開発に大きな支障になっていると思われるものを取り上げ、分析してみると次のような点が指摘出来よう。

(一) 武力的、思想的、経済的な勢力の侵入を恐れて、徳川幕府と同じように嚴重な鎖国政策を取り、外国人の入国を禁止し、ネパール人の出国を禁止した。それ故、外国の文物を取り入れる機会がなく、国民は外国の文物に対して、完全な盲となり、外国から立ち遅れる大きな原因となった。革命後は先進国の専門家を招聘、ネパール人を海外に派遣して、先進国の知識・諸制度を取り入れるために、懸命の努力を重ねている。従って今後工業開発のため、どの様に先進国の知識・諸制度を取り入れるかが、この国の発展の大きな「カギ」となるであろう。この国の工業開発には歴史の・地理的・社会的条件の最も良く似ている日本の知識・諸制度を研究の上、取り入れるのが、最も適当ではあるまいか。

(二) 完全な文盲政策・愚民政策を取り、学校を建てることを禁止し、「知らむべからず、倚らしむべし」の政治をした。これは徳川幕府よりも一層きびしく行われたように思える。それ故、ラナ幕府時代には、男九十九%、女九十九・九九%以上が文盲であったようだ。革命後、教育熱が盛んになり、教育施設も急激に増加したが、それでもなお、現在文盲率九十六%位と言われ、文盲の解消には相当時日と根氣を要するものと思われる。しかし、この国の発展、特に工業の開発については基本的条件の第一は何と言っても教育が基礎をなすであろう。それ故、第一にじっくり腰を落ち

つけて、辛抱強く教育に力を注ぐべきであろう。特にこの国には、工科の学校がないのが特徴であるが、工業開発のためには、多数の工科の学校が建設されるべきであろう。又、小学校から簡易な方法で科学教育がなされることも必要であろう。

(三) ヒンズー教を国教と定め、特にラナ薩府は、ヒンズー教徒の一切の慣習を厳守せしめ、宗教及びその慣習、特にカースト制度（バラモン・クシャトリア・バイシヤ・スウドラ）を政治の具に供し、封建制度を確立して、政治を容易にしようとした感がある。これは丁度徳川薩府が身分の違いを重んじて、社会の秩序を保つ事を説いた儒教、特に朱子学を奨励し、これを実践し、身分制度（士農工商）を中心として、封建社会の支えとした事に似かよっている。革命後、カースト制度は一応廃止され、人間平等・職業選択の自由が確立されたが、永い間につちかわれた伝統・慣習を急速に解消することは困難であり、現在も厳然として、カースト制度は残っている。それ故、職業選択の自由も充分でなく、上位のカーストである知識階級は働く意欲に欠け、下位のカーストと働くのを好まない傾向がある。この様な封建的なしきたりの解消に努力していかねばならないが、旧来の慣習を急激に打破することは危険を伴う場合もあろうから、国民感情を害しないように徐々

に改善するべきであらう。これには教育が大きな役目をなすことを忘れてはならない。

(例) 外敵の侵入を恐れて、道路や橋の建設を禁止した。これはあたかも江戸の防備のため、大井川などの大きな川に橋をかけなかった徳川幕府のやり方に似ている。それ故、ネパールの交通は極めて貧弱で資源の開発・工業の建設・交易の伸長等の一番大きな「ガン」となっている。交通施設、特に道路の建設は産業を開発するため、最も緊急を要する問題の一つであらう。革命後、外国の援助によって、道路その他の交通・通信施設が建設されているが、これには相当の経費と時日を費し、早急に完備されることは困難であらう。しかし、ネパールは東西両陣営の分岐点に立っているので、幹線のみは思ったより早く完成されるのではなからうか。

(因) 国及び国民の福利厚生に注意が払われずラナ一族と、これに奉仕する側近の私腹をこやしことのみに専念したようだ。それ故、現在ネパールはごく僅かの富裕階級と大多数の貧困者からなる。勤勉な大多数の貧困者は、借金に苦しみ、資本に事欠き初期的な工業資源（動植物資源）の開発、初期な工業（家内工業）の建設も容易でない。その反面、富裕階級は大多数の貧困者の上にあぐらをかいて、安逸をむさぼり、生産的な面への関心が薄く、その財貨の多くを彼らのきままな欲望をみたすために、非生産的な面に費消しているように思える。さらに交通は未発達で、永い間鎖

国のため、交易も充分でなく、特に外国貿易は貧弱であったので、商業資本もまだ充分に成長せず、手工業を支配する僅かの間屋制家内工業が形成されているに過ぎない。従って、ごく一部を除いては、未だマニファクチュア（工場制手工業）の段階に至らず、自ら資本制工場生産を生み出す力は認められない。しかし、現在幸いにも東西両陣営の経済援助によって、多額の外貨が導入され、工業建設がなされているが、一般的には資本が不足していると言えよう。富裕階級の工業開発・投資意欲が必要であろう。又、同時にネパール人による資本の蓄積も必要であろう。

(六) 封建色の強いラナ政権の永い圧政の下で、国民はその個性がくじけ、自主独立の精神を失い、無気力となっており、さらに国家より自己を保全しようとする気風が、自ずと強まってきているように見える。それ故、工業開発や国家建設の意欲に欠ける点がある様に見受けられる。他国に類を見ない国民指導省が新設され、国民の精神指導に当たっているのもこの為であろう。しかし、ネパール人の素質は優秀であり、勤勉で辛抱強く、特に手先の器用さは驚く程である。その上、豊富な資源をもち、気候にも、恵まれている。この優秀な国民の一人一人が工業開発・国家建設の意欲に燃える時が来たなら、東洋のスイスになるであろうことは確信して、疑いを入れないところである。

二 地理的条件とその特徴

東西の分岐点に立つヒマラヤの國

ネパールは北緯二十六度二十六分から三十度十分、東経八十度十五分から八十八度十五分の間に位し、日本の近くで言えば琉球列島の緯度にほぼ相当する。面積百四十・三三一平方キロメートルで、日本で言えば、北海道の約二倍、政治的或は地理的条件の似ているラオスの二倍、スイスの三倍に匹敵する。南北の幅は、最大二百四十キロメートル、最小百四十四キロメートルで、平均二百二十四キロメートル、東西の長さは八百八十キロメートルの細長い国である。そして北は世界の屋根ヒマラヤを境として、チベットに接し、(チベットは現在中共に占領され、共産圏内にある)南は人工的境界線、西はマハカリ川、東はシンガリラ山脈とメチ川を境として、三面インドに接している。従って日本のように、四面海に囲まれた国と異なり、四面陸に囲まれた国である。それ故共産圏を除いて考えると、インド領を通過しなければ、他国との輸出入が出来ない非常にむずかしい立場にあるが、その反面、現在東西の分岐点に立つ重要な国として、東西兩陣営から莫大な援助の

ある、恵まれた国となっている。次にネパールは地理的に大別すると、次の三つの地帯に分けることができる。

- (一) 小高い丘と平野からなるクライ地帯
 - (二) 多くの盆地を持つ中央地帯
 - (三) チベットに向って北に広がるヒマラヤ山系からなる高山地帯
- これらの各々の地帯について、その特長を述べてみると、

クライ地帯

この地区はネパールの南の国境線(インド側)に沿って、幅三十キロメートルから五〇キロメートルの細長い帯状の地帯で、平野と森林におおわれた丘陵からなり、高さは、千二百メートルまでの地帯である。気候は亜熱帯モンスーン気候で雨量は最も多く年二、三〇〇ミリから二、五〇〇ミリで夏季に多く冬季は少ない。特にモンスーン(六月～九月)の圧力は地勢の関係で大きい。また北のヒマラヤ山脈から来る冷たい風は、この地区までは届かないので、湿気が多く蒸し暑い。温度は四・五度から四十度までの間で、六月が最も高く、一月が最も低い。クライ地区は森林がよく繁茂

し、さらそうじゅ、パンヤ等の潤葉樹が豊富であり、また土地は肥沃で農耕に適し、米・マスタード、かんしょ、ジュート等を多く産する。

中央地帯又は盆地地帯

この地区はタライ地帯と高山地帯の間に位する高さ三千メートルまでの地帯で、ズムジャ、カトマンズ、プラング、ボクौरラ等多くの盆地があり、盆地地帯とも呼ばれる。これらの盆地は気候もよく、また大小の河川がこれらの盆地を湿し、農耕にも適するので、人口が最も多く集中し、それぞれの地方の中心をなす。また、これらの地方はネパール文化の発祥地であり、特にカトマンズ盆地は文化の最も栄えた処で、現在人口約六十万と言われ、首都カトマンズはこの盆地の中心にある。盆地の気候は夏季・高温多雨、冬季・低温乾燥の温帯モンスーン気候で、温度は高度(千〜千五百メートル)の関係で、タライ地帯よりも平均十度〜十五度C低い。一年中で一番寒い月は一月で三度C前後であり、一番暑い六月でも二十六度Cを越さぬ快適な地区で、東京地方の温度(三度〜二十六度C)に似ているが、空気が乾燥しているので日本より住みやすい。しかし、盆地を囲む周囲の山々の上は、亜高山帯の気候である。雨量は東端で年二千五百ミリ、西端で千ミリで、東から西

に進むにつれて少なくなる。丁度日本の南（最高二千五百ミリ）から北（最低千五百ミリ）に向って少なくなるのとよく似ている。カトマンズの雨量は、年約千九百ミリ（最高八月三百八十ミリ、最少十二月三十ミリ）であり、東京（千五百ミリ）よりも少ない。森林は広葉樹と針葉樹との混合林であり、農耕は盆地、溪谷、及び山の斜面を耕して作った段々畑で行なわれ、米、小麦、大豆、とうもろこし、煙草等を多く産する。

高山地帯

この地区は高さ三千メートル〜八千九百メートルに達する大ヒマラヤ山系からなる地帯で、世界の屋根といわれ、数多くの連峰が屏風のように林立し、その雄大な景観は、世界中のあこがれの的である。毎年三月になると日本を初め世界各国の登山隊がどっと押しよせる。今、七千メートル（富士山の約二倍）以上のものを拾ってみても、次の様にその数の多いのに驚ろかされる。

高さ(メートル)	数
七千〜七五〇〇	二六
七五〇〇〜七八〇〇	十二

15 ネパールの工業事情

もちろん、この中には世界的に有名な山々が数多く含まれ、日本人に親しまれているものも多い。その主なものをあげてみると、次のようなものである。

名 称	高 さ(メートル)
(一) エベレスト	八八八二
(二) カンチェンジンガ	八六〇九
(三) マカルー	八四八九
(四) ダウラギリ	八一〇七
(五) マナスル	七九九七
(六) ゴザインタン	七九四七
(七) アンナプルナ	七九一七
(八) ヒマルチュリー	七七四〇
(九) ガウリシャンカール	七〇三七

(一) 七八〇〇〜八一〇〇
 (二) 八一〇〇〜八四〇〇
 (三) 八四〇〇〜八七〇〇
 (四) 八七〇〇以上

一 二 三 七

それ故、この地帯はほとんど雪におおわれている部分が多く、温度は一般的に低く、高山気候をなすので、人口は、最も稀薄である。しかし、この地帯の氷雪がとけて、多くの河に流れ、タライ地

区を通って、膨大なヒンダスタン平原を湿している。また温度は高さにより零度以下から二十一度Cまで変化し、雨量も年千ミリである。森林限界は四千二百メートルで、それまでは森林におおわれ、主として針葉樹と小さなしゃくなげ属の植物からなっている。又到る処、良質の草原がある。従って、農業も行なわれているが、牧畜が主で移牧の形態である。このように、水雪におおわれたヒマラヤ山系を有するネパールは、自然氷雪がとけて、数多くの河川を形作っている。そしてこれらの河川は何れも北から南に流れてインドに入る。東部にはサアプタ・コシ川があり、これは七つのコシとも言われ、上流はインドラパティ、サン・コシ、タマ・コシ、リク、ダット・スシ、アールン、タマアルの川に分かれている。中央部にはグレイト・ガンダッキ川があり、上流はナラヤニ、カリガンダッキと呼ばれ、更に上流はトリスリ・プーリ、ガンダッキ、ダラウンディ、セティ、マディ・カリ、アウディの七つの支流を持ち、又西部にはカルナリ川があり、上流は分かれて、セティ、ベエリの二つの川となっている。そしてこれらの河が更に網の目のように各地を湿している。この外、重要な川にラプティ、バグマティの二つの川があり、バクマティ川はカトマンズに源を発して、インドのガンジス川に流れており、上流には多数の盆地がある。一般的にネパールの山は急峻で谷が深く、川は急流で水量の変化が割合少い。

東洋のスイスに脱皮する日を

以上述べたネパールの地理的条件とその特徴を工業の開発の面から検討してみると、次の点が指摘されるであろう。

(一) この国のほとんどは山が占めている。この山には豊富な森林資源と鉱物資源を包蔵している。森林資源は現在国家の最大収入の一つであるが、まだ極く一部を利用するのみで、ほとんどが未開発の状況である。鉱物資源は未だ完全な調査がなされていないが、現在判明しているものだけでも、種々の貴重な鉱物を多量に埋蔵している。しかし、一部の調査のみで判明したものも未開発、未利用の状態である。日本からも一九六二年マイカ調査団が来訪して短期間に貴重な鉱物を発見している。

(二) この国は山国であるから多くの河を有し、豊富で良質な工業用水、灌漑用水を提供している。特に水力資源については、水量・落差等良好な立地条件を具備し、将来電力国として、発展の可能性が充分ある。日本からも一九六〇、一九六二年に水力電気開発調査団が来訪したが、この点については折紙をつけている。

(三) しかし反面、山や河が多いことは道路の建設、橋梁の架設を困難ならしめ、現在自動車の利用出来る道路は極めて少なく、資源の開発、工業の振興、交易の伸長に大きな障害となっている。それ故、この豊富な資源を開発して、工業の振興を計り、交易を伸長するためには前提条件として、先ず第一に、国民一人一人がこの点を自覚し、協力一致して、すべての困難を打破し、道路の建設を強力に推進しなければならない。しかし、これには莫大な経費と時日を必要とするであろう。

(四) それ故、道路建設・鉱物資源・電力資源の開発等の長期的恒久策と並行して、少ない経費で短期間に、工業開発の可能な次のような応急策も取られるべきであろう。

A この国は動植物資源の開発利用が非常に遅れているが、この国の地勢・気候条件が非常に変化に富んでいるので、初期工業に必要なあらゆる動植物資源が開発可能であり、これを研究し、経費が少なく、早期に実現可能なものから、開発の手が打たれなければならない。

B 動力の利用については、現在ほとんどすべてが人力である。電力が開発されるまでは畜力・風力・水力の利用をもっと研究して、これらを大いに活用すべきであろう。これは少ない経費で、短期的に動力を得る最も手近な道である。特に多数の河川を有するこの国は、初期段階として、水車を利用することが最も賢明な策であろう。これならどんな山間へき地といえども、直

ぐに利用可能であろう。又、小水力発電及び小馬力の発動機の利用も考慮さるべきであろう。

C 運搬については、現在ほとんどすべてが、人の肩、頭などを利用する担夫運搬であるが、自動車道路が開発されるまでは、人力・畜力による車をもつと利用すべきであろう。担夫交通によるよりも、はるかに能率的である。これがためには、地方民が道路の維持に積極的に協力する心掛けが必要になってくるであろう。

(四) この国は地形の関係上分離性が強く、多数の孤立的社会を形作り、種々の民族を作りあげている。そして各々の民族が異なった風俗・習慣をもち、異なった方言を使っている。その上、進んだ文化から隔離され、新しい知識を取り入れる機会に恵まれず、そのため教育程度は極めて低く、国家統一は勿論、工業開発及びその指導の大きな困難の一つとなっている。これらの対策をいかにするかも大きな問題であろう。

(六) 四面陸で、海を持たないこの国は北は急峻なヒマラヤがあり、南に港を求めなければならぬが、これとてもインドの国土を通過しなければならぬので、自然インド以外の国との貿易は困難となり、工業発展のブレーキとなっている。しかし反面、東西の分岐点にある重要な国となっているので、両陣営の経済援助競争ははげしく、国家予算を上廻る莫大な援助資金が流入しており、

しかもその額は年々著るしく増加している。当面これを充分活用して適格な工業開発計画を樹立し、これを強力に実現して行くことが必要であろうが、将来自力で自國を開発して行く意慾を忘れてはならない。

(七) しかし、ネパールは、世界最高峰のヒマラヤ、これによって生まれた美しい河や湖のほかに、異國情緒をそそる固有の文化等、豊富な観光資源を持っている。しかも氣候に恵まれている。これら他國にはない自然美、自然的条件文化財を充分活用して、東南アジアのみならず、世界の観光地・避暑地となすべきであろう。これは取りもおさず、外貨を獲得するもっと手近な方法であろう。ネパールが農業國から工業國、觀光國に脱皮して、美しい豊かな國になることを期待してやまない。

三 社会的背景とその特殊性

人口は日本の十分の一

ネパールの全人口は、八四七万三四七八人で、東京の人口よりやや少ない。この内、家庭にあるものは、八二五万六六二五人、六カ月以上家庭を離れているものは、二二万六八五三人である。家

(第1表)

国名	入数	比率(%)
India	157,323	80
Malaya	6,621	3
Burma	1,824	1
China	442	
Pakistan	153	
Other countries	31,709	16
Total	198,120	100

を離れているものの内、外国に行っているものが一九万八二〇人、国内にあるものは、一万八七六六人である。外国の内、主な国及びその人数は第一表のようである。インドが圧倒的に多く次いでマラヤである。これはほとんどがインド及び英国に雇用せられている兵隊で、その勇名を世界にとどろかしたグルカ兵である。ネパールは面白いことに、これらのグルカ兵が貿易外の収入として多額の外貨をかせき、外貨獲得に一役買っている。

ネパールの人口密度は一五二人、平方マイルで、日本の約四分の一に相当するが、カトマンズ・バレーは二八八五人、平方マイルで、その密度は非常に高い。これは気候が温暖で農産物がよく実り、物資の集散地であるばかりでなく、政治経済文化の中心地であるからだろう。これはあたかも東京に人口が過度に集中している日本とよく似ている。

次いで Eastern Tarai 三五三人、平方マイル、Mid-Western Tarai 二六六人、平方マイル順となっている。Tarai 地区は肥沃な土地が多く、農耕にも適し、その上インドと国境を接

(第 2 表)

地区名	人口 (6カ月以上の 不在者を除く)	配分比率 (%)	面積 (平方マ イル)	密度 人/平方 マイル
Nepal	9,256,625	100	54,362	152
Hill Regions	5,867,208	71.1	45,097	130
Eastern Hills	1,768,816	20.7	10,114	169
Western Hills	3,229,228	39.1	29,777	108
Kathmandu Valley	410,995	5.0	218	1,885
Eastern Inner Tarai	189,228	2.3	1,829	193
Center Inner Tarai	239,677	2.9	2,445	98
Western Inner Tarai	89,315	1.1	714	125
Tarai Regions	2,389,417	28.9	9,265	258
Eastern Tarai	1,806,049	21.9	5,155	353
Mid Western Tarai	384,179	4.2	1,307	266
Far Western Tarai	235,189	2.8	2,843	83

して、工業も比較的發展しており、また物資の集散地も多く、交通も比較的便利であるから、人口もかなり集中している。そして北の山間部に行くに従って人口密度は減少する。また東部から西部に進むにつれても人口密度は減少している。その状況は第二表の通りである。

工業への就業人口は僅か二%

次に就業の状況を見ると、人口八二五万六六二五人の内、仕事に従事しているもの、四一五万三四五五人で、男が一四六万四九二人、女が一六九万二九六三人となっており、女が高い比率を示し、女がよく働くことを意

(第 3 表)

業種別	就業人口	比率 (%)
農業	3,882,610	93
サービス業	95,891	2.3
工業	80,570	2.0
商業	51,849	1.2
交通関係	19,614	1.5
開発関係	7,855	
その他	8,947	
計	4,153,455	100.0

味している。これを職業別に見ると、農業が三八八万二一六二人で、その比率は約九三%で圧倒的な数字を示し、ほとんどが農業に従事して生計をたてている農業国といえる。次いで、サービス業（主として政府の役人）、工業、商業の順となっており、その比率は僅少で、それぞれ二・三%、二%、一・二%となっており、その後進性を物語っている。その状況は第三表の通りである。

農業は殆んどが小作農で、封建大地主の手で支配され、その収穫は五〇%、五〇%が多い。その上、工業が未発達であるから、国民所得は年三〇〇ルピー（二三、五〇〇円）位だと言われ、極めて低く、インドのそれにやや近いが、それよりも低い。これが国内需要の開拓を困難にし、市場を狭めて工業の発展にブレーキをかけ、又豊富で低廉な労働力が新技術の導入、生産の機械化を困難にし、手工業から工場制工業への発展をはばむ原因になっていることは明治維新以後の日本に似ているようだ。しかし工業を振興し、相当数の人口を工業に吸収しなければ現在の生活水準を

げることには困難で、何時までたっても、貧困から抜け切ることには出来ないであろう。

人口増加率は日本の倍、平均寿命は半分

一般的にネパールは衛生思想が極めて低く、衛生状態は悪い。その上医療施設も貧弱で、ドクタ一人当りの平均人口は、六万四、五〇〇人位である。しかも、医者は主として、カトマンズに集中しているので、地方のこの比率は更に高く、誠にひどい状態である。主な病氣はマラリヤ・腸チフス・コレラ・肺結核・天然痘・寄生虫・甲状腺腫・象皮病等であり、特にマラリヤは U.P.E. 地区および高さ一、二〇〇メートルまでの土地に多く、マラリヤのみでも毎年三万五、〇〇〇人の尊い命を奪っている。従って平均寿命は三七歳位と言われ極めて低い。それ故、国連の世界保健機構、その他機関から、カトマンズその他の地区に多数の医師が派遣され、マラリヤその他の予防撲滅に当っておる。日本からも国連の世界保健機構を通して、医師一名（京大）、キリスト教医療協会を通して医師一名（鳥取大）及び看護婦二名（東大・阪大病院）が派遣されている。また医療施設についても第一次五年計画に相当額の経費を計上して設備しつつある。現在の医療設備の状況は第四表の通りである。

(第4表)

医療施設	政府関係	政府関係以外	計
General Hospital	35	11	46
Maternity Hospital	1	—	1
Infectious Diseases Hospital	1	—	1
T. B. Sanatorium	1	—	1
Health Center	95	—	95
Dispensaries	—	15	15
(Independent Hospital)	—	—	—
Mobile Health Unit	16	—	16
Chest Clinic	1	1	2
Leprosy Clinic	1	1	2
Leprosarium	2	6	2
Doctors	82	46	128
Dentists	2	—	2
Kabriraj	133	7	140

(註) Kabrirajはネパール独自の医者で手術などは許されない。

しかし高い死亡率にもかかわらず、それをはるかに出生率が上回り、自然増加率は非常に高い。十年間に約三二〇万人の人口増加を見ているので、年間約二二万人の増加となり、日本と比較して、その人口増加率は約二倍に相当する。これは娯楽のないせいもあるが、最近ジョージ・デ・カストロ氏がしきりにとなえている貧困による蛋白質の欠乏と人口増加の関係を裏書きしているようでもある。またこの国の習慣である早婚・多妻、またこれらにより貧困を克服する手段として、一人でも多くの労働力をふやしたいという願望が、人口の増加を刺激しているかも知れない。人口の増加は工業を興こし、質の改善があれば貴重な労働資源となるが、工業の発展がなければ人口過剰の様相を呈し、尚更貧困に追いやられることであろう。

ネパールは種族の博物館

ネパールはまた人種・種族の博物館だと言われている。この国の人種を大きく分けると、モンゴリアン系とアリアン系に分けることが出来よう。モンゴリアン系は高さ約一二〇メートル以上の山間部のチベット側に多く、アリアン系は Terai 地区および高さ、約二四〇メートル以下の山間部のインド側に多い。これらが地勢の関係で多数の種族を作り上げ、北部と東部には Bhotias, Tamangs,

Limbus, Sherpas など、中央部に Newars, 西部および Mahabharat 山脈に沿って Magras Kiratas, Gurungs, Sunwars など、Tarai 地区には Dhimals, Tharus, Mechi, Danuwars がおり、これに加えて Thakuris Khas, Jaisis, Kshetriyas, Brahmins, Musalmas, Marwaris が、これらの種族といっしょに平和裡に生活している。そしてこれらの民族がそれぞれ異った方言を使い、異った風俗習慣を持っている。種族の多いこと、言語が異っていることは、国家統一はもらんのこと、工業開発の大きなブレーキとなるものである。革命後、まず政府は言語の統一に乗り出し、Nepali 語を制定し、これを学校の必須科目として普及を計り、また反面他国に類のない国民指導省 (National Guidance Ministry) を設けて国家意識の高揚、国家統一の実現に努力しているのもこのためであるが、これらを早急に解決することは困難である。

近代化をはばむ宗教的慣習

この国の宗教にはヒンズー教と仏教の二大宗教があり、特にシャカが生誕地として日本とも浅からぬ因縁がある。この外に若干のモスリンがいる。その状況は第五表の通りである。

第五表を見ると、ヒンズー教徒八九%、仏教徒八・五%で、仏教徒はヒンズー教徒の約十分の一

(第 5 表)

	Hinduist	Buddhist	Moslem	Others	Total
人口	7,318,392	707,104	208,899	689	8,256,625
比率	89%	8.5%	2.5%	—	100%

にも足りないことになるが、仏教徒はヒンズーのお寺に行き、ヒンズーの神を礼拝し、ヒンズー教徒はブツダの聖地を訪れ、ブツダに参拝している。またブツダのお寺の境内にはヒンズーのお寺があり、種々の施設にも共通なものが多い。この国程ヒンズー教徒と仏教徒が平和的に共存し、調和の取れている国は他にあまりない。丁度日本の神仏混交時代を思わせるものがある。そしてこの国は長い間、ヒンズー教徒の一切の習慣を厳守させられてきた。それ故、お祭りの多い国で、一年の内三分の一が休みとなる（土曜日がこの国の休日であるが、これを含めて）。また、ヒンズー教には厳格なカースト制度がある。これを基本的に分けると、次のように四階級のカーストとなるが、それが更に細分されて多くのサブカーストを作っており、現在三〇〇を越えているようだ。

- 第一階級　　バラモン（僧族）
- 第二階級　　クシャトリア（士族）
- 第三階級　　バイシャ（平民）

第四階級 スードラ（奴隷）

このスードラの下には、更にバリヤと呼ばれる賤民階級がある。又工業関係では職業別のカーストがある。その例をあげると、

Curio の製作に従事する者は Vadha。Dying & Printing に従事する者は Ranajidhri。Ceramics の製作に従事する者は Kumbhals。Carpentry に従事する者は Nakarnis。Blacksmith に従事する者は Kainis。Tailoring に従事する者は Damals or Jogis。Shoemaking に従事する者は Sharkis 等があり、Shoemaking の Sharkis は賤民階級で Untouchable の種族である。カーストが違えば結婚も出来ないし、食事もしよに出来ない。また職業にも厳格な差別があり、しかもこの階級制度は世襲的で、人間平等職業選択などの自由もない。革命後は一応カースト制度は廃止せられ、人間平等・職業選択の自由も確立されたが、長い間に培われた伝統・習慣は一朝一夕に改められるものではない。これが工業の発展に大きなブレーキとなっていることは争われない事実だ。またこれと同時にこの国には、Joint family system があるが、これには利点もあるが工業発展のブレーキになっていることも見逃す訳にはいくまい。しかし今のネパールの現状ではこの制度も必要なかもしれない。

文盲の国からの脱皮へ

教育はラナ幕府の文盲政策により、男子九八%、女子九九・九九%が文盲であったと言われる。丁度、徳川幕府が「知らしむべからず、寄らしむべし」の政治をした当時とよく似ている。それゆえ、ラナ時代は女子の教育機関は皆無で、ごく少数の男子の学校があったに過ぎない。現在女子の学校はもちろん、男子の学校も増加しつつあり、教育熱は盛んであるが、それでも現在なお、どうか読み書きの出来るものは、わずか五%程度に過ぎず、いわんや学校を卒業したもの、また何かの免許状を持っているものは約〇・二五%のごく少数に限られ、その〇・二五%の内、男子が大部分を占め、女子はわずか約六%という顕微鏡的数字である。その状況は、少しでも読み書きの出来るものの合計が四〇万四二二一名、その内男子は三七万一一七一名、女子三万二九四〇名。学校を卒業したもの、または何かの免許状を持っているものの合計が一万九、六五二名、その内男子は一万八、三八九名、女子は一二六三名となっている。

一部の都会地では教育熱が盛んになっているが、山間部は依然教育の必要なことが分からず、教育には無関心である。したがって義務教育は実施されておらず、中・小学校はすべて私立学校。高

31 ネパールの工業事情

(第 6 表)

University	1
Colleges	28
Degree colleges (Arts & Science)	13
Intermediate colleges	3
Law college	1
Music college	1
College of Education	1
High schools	151
High schools	150
Sanskrit High schools	7
Middle schools	398
Middle schools	392
Sanskrit Middle schools	6
Primary schools	3,396
Primary schools	3,164
Sanskrit primary schools	232
Technical schools	2
Agriculture school	1
Monstessori school	1
Administrative Training school	1
Forest Training school	1
Nurses Training school	1
Adult schools	1,838
Libraries	190

等学校・カレッジもごく少数の官立学校を除いてほとんどがやはり私立学校である。一例をあげると一五七の高等学校の内、官立はただの三校に過ぎない。一九五九年、アメリカの援助で大学を設立、校舎を建設中であるが、カレッジ及び大学共に工科関係の部がないのが特色である。唯これらの中にあつて、工業学校が二校（繊維・鍛冶関係）あるが、いずれも内容は貧弱で、日本の工業高等学校の足元にもよれない。教育機関の一覽表は第六表の通りで、生徒数はまだ五万八六九七人に過ぎず、そのほとんどが革命後に設立されたものである。

しかし、教育は非常に盛んになってきているので、もっと教科内容を改善し、下級学校から工業の基礎教育をなせば、日本人と同様に手先は器用であるし、辛抱強く、勤勉であるから、立派な労力を生み出すことが出来ると思われる。

工業を阻む特徴的なもの

工業開発を阻害する社会的条件については以上述べた通りであるが、特に大きなブレーキとなっている特徴的なものに焦点を絞ってももう少し詳しく説明しておこう。

- (1) この国にはきびしいカーストの制度がある。このカースト制度が社会構造の根本的基礎をな

しているように思える。それはカースト制度がヒンズー教の所産であるからであろう。ネパールはもともと人間平等の思想に立つ仏教の発祥地でその名を知られているが、精神と宗教の世界に君臨するバラモン階級がその地位を維持するため、政治権力を掌握しているクシャトリア階級と相結んで、平等思想に立ち、カースト制度を否定しようとして立つた仏教をうまく融合して、ヒンズウ教を発展させ、カースト制度を維持することに成功したようだ。カースト制度の主な社会的機能ははっきりした職業の区分と世襲、結婚範囲の限定、異なるカーストの食事制限等であろう。これらによってバラモンやクシャトリア階級はその地位の安定と維持が保証されることになる。すなわち職業を撰択する自由が許されないので、生れた途端に才能があろうが、なかるうが、世襲的にバラモンの階級のもはバラモンとなり、クシャトリア階級は、クシャトリアとなって、指導者の位置に座るのである。反面、働く階層であるバイシヤ、スウドラ、アンタッチャブルはいかに優れた才能を持っていようが教育を受ける機会に恵れず、世襲的な職業に甘じて貧しい一生を送って行かなければならない。その上、昔の日本のように職業の貴賤には著しいものがある。

従ってバラモン、クシャトリアのように教育を受け、金もあり余っている指導者階級は自分以外の他の職業にはあまり興味を持たないようだ。仮に興味を持って、実技にたずさわることは一般

にさげすまれている。

ヒンズウ教団インドで聞いた面白い話であるが、クシヤトリヤのカーストの息子が大学の工科に入学して来た。ところが、その学生は講義には出てくるが、製図や実習などになると、働くカーストを連れて来て、実技は自分でやらないで、これらの人にやらせたことである。このような事では立派な技術者の養成は難しかろう。ネパールもこのような風潮がある。カトマンズには大学が五、六校あるが、全部文科系で工科系が一枚もないのはこの風潮が一因をなしていることであろう。

これもヒンズー教団インドの話であるが、日本の商社が市場開拓のため、機械を持って営業関係の人と技術者をインドに派遣した。ある村に招かれて指導方々機械の実演を实地にやってみせることになった。初日は招かれた客として立派な部屋に案内されて、異郷の手厚いもてなしを楽しんだが、翌日技術者は作業衣を着て、油にまみれながら、実技の指導をした許りに、営業マンは依然立派な部屋をあてがわれたが、技術者は昨日と打って違って、みすぼらしい部屋に通され、ひどい待遇をうけたという笑えない話がある。これらが実際には働かないで、ふところ手をして、富を得るものが偉いのだという昔の日本のような風潮を作り出しているように見受けられる。

だから、ヒンズー教団ネパールも同じようネパール人の指導者は議論好きで、議論に明け暮

れ、何だか国の中が空廻りしているような感じを受け期待した程開発は進んでいないように思う。

一方、働く階層であるバイシヤ、スウドラ、アンタンチャブルは人間生活ぎりぎりの赤貧で、金はなく、しかも文盲で、大古から伝わる陳腐な技術を親から見習って行くに過ぎない。そこに生産手段、技術の改善進歩などは夢想だにも及ばない。

その上、異なるカーストは一緒に働くことに色々の障害がある。これでは工業の開発しようにも遅々として進まないのは無理からぬことである。このカースト制度を打ち破ることが工業を開発するための社会的条件の第一となる。しかしこのカースト制度は容易に打破ることが出来ない位、一般の生活に根強く噛み入っている。それはヒンズー教が生活と共にあるからである。ヒンズー教の信条、思想は靈魂の不滅と輪廻（サンサーラ）であると云われる。靈魂は本質的に不滅であり、これに個人の運命、生活状態を決定する要素として業（カルマン）等が結合して、前世から現世、現世から来世へと、永遠に輪廻すると考えられている。この輪廻と業によって、個人の生活状態や社会的地位の差異、不平等が生じ、カースト制度は絶対的のものとして、その起源は神に帰せしめている。丁度日本の江戸時代、士農工商の身分制度が体系づけられたが、そのよりどころを儒教に求めたのに似通っている。

ヒンズー教典に面白い寓話がある。それによると、カースト制度の創始者は神ブラーマンであつて、ブラーマンが大地を創造し、人間を作ったとき、定められたものとされている。そしてパラモン階級は神の頭から、クシャトリヤは肩から、ワイシヤは服から、スウドラは足から出たものときとされている。即ちパラモンの頭は精神的指導者を意味し、クシャトリヤの肩は武人の刀を暗示している。バイシヤは服から生れたものであるから、衣食その他の生産にたずさわらなければならず、スウドラの足は苦役について勤勞せよと運命づけられている。

この四階級の外に、カーストの枠にも入れない「パリア」と呼ばれる不可触賤民階級がある。この階層に生れたものは社会から完全に締め出しを食ひ、牛や猿が神として崇められている世界に人間以下の身も心も劣等な種族として取扱われているようだ。体は勿論衣類にさわつただけでも、けがれたといつて大騒ぎする。パリアと食事することはもとより、パリアの作つた食べもの、汲んだ水さえ不潔だといつて遠ざける。

哀れな非人階級は町や村の共同井戸を使用することも禁ぜられ、わざわざ、遠い非人だけの井戸まで水を汲みに行くといわれる。

私はある日革靴を作つている部落を視察したことがある。皮革を取扱う業者は不可触賤民階級で

ある。従って彼等は町外れの不便な処にたむろして集团的に生活を営んでいた。入口があるだけで窓一つない泥で作られた小さな草ぶきの家に住み、その落部全体が靴を作りながら細々と暮らしていた。このような靴製作部落がカトマンズ盆地だけでも数カ所ある。私は政府の役人を三人程連れて、この部落を視察したが、皆初めてのものの許りであった。それもその筈、政府の役人はバラモンかクシャトリアの出身者である。日本では差しずめ、皮革工業の振興、集団中小企業の振興のため、政府が積極的に乗り出す処であろうが、この国では何一つ手が打たれていない。だからネパールは生皮の生産国でありながら、生皮のまま多量にインドに輸出しているが、鞣工場の一つもない。従って靴業者はインドから再び鞣皮を輸入して靴を作っているのである。このように、生皮の生産国でありながら、皮革工業が発展していないのは、矢張り、カースト制度がその大きな原因の一つになつてゐることがうなづけよう。

一九五〇年の民主革命後、長い鎖国から国を開き、幕府政治から立憲政治へと民主化の第一歩を踏出し、一九五六年憲法が公布され、人間の平等、職業選択の自由が保障されたが、現実的には長い伝統と習慣によつて、一般民衆の中に根強く噛み入っているこの宗教的な制度は容易に打崩れそうもない。しかも現在失業問題がこの制度を消極的ではあるが、維持させている面もある。このカ

カースト制度の堅い壁を打破るには宗教の問題、教育の問題等もあろうが、近代経済と機械工業を導入することこそが一番近道ではないだろうか。

(2) カースト制度がネパール社会構造の大きな特徴であるとすれば、共同家族制度（ジョイント・ファミリー）はネパールの家族構成の大きな特徴であろう。

ネパールでは赤練瓦で作った四階建の大きな家が多い。それらの家に招待されて行くと、これが父方の叔父、これが従兄、これが従弟の長女などと大勢の親類に紹介される。そしてこれらが一つの家に住んでいる。従って家族は日本のように祖父母、父母に夫婦と子供だけがいるのではなく、叔父叔母は勿論、兄弟とその妻子、従弟とその妻子等からなる大家族制度で、いわゆる共同家族制度と呼ばれている。私の訪れた家は二〇人前後の家族が多かったが、中には五〇―六〇人の家族を持った家に出会ったこともある。これは封建制を維持するための政治的、或いは祖先と子孫に通ずる一体観による司祭のための宗教的な面と生活のための経済的な面等が相交錯し結合して、根強く社会構造の中に形成されているように思える。この中でも経済的な面が大きく作用しているのではないだろうか。現在のネパールは生産様式が極めて幼稚で、人間労働に殆んどたよらなければならぬ状況で家族労働が労働力の基幹とならざるを得ないからであろう。そしてこの共同家族には家

父長権制度があり、その権力は実に強い。農業や商工業の経営はこの共同家族の共同経営の形で行われており、掛他ので閉ざされた結合関係を形成している。これが職業の世襲を助長し、カースト制度を温存する一因になっているように思える。またこの共同家族制度は家族員に経済的保障を与える特徴を持っており、職がなくて働かなくても、生活を保障してくれる利点があるが、この反面ネパール人に働く意欲に欠ける欠点を生み出している。カトマンズを歩いて、特に感ずることは、牛と一緒に何もしないでうようよ歩いている連中が街にあふれ、真ひる間から、茶店の前にむらがり、何かしらべちやくちや、しゃべりまくっている。これは明らかに人口の大部分が生産面に従っていないで、遊んでいることを示していることなるう。しかし、これは、決してネパール人が怠惰なためではなく、共同家族のため、働かなくてもまた失業しても食って行けるからである。

また、職業の分散によってこの共同家族が分離することは家族が家族労働の現在及び将来の要員である限り、家父長は家族労働力の維持の必要から家族の変更について強い発言権と最終的決定権を持っており、他の職業に働きに出る機会を阻まれ、労働力の豊富なネパールに面白い一面がある。これらを考え合せると、この共同家族制度には利害得失があり、過去の経済的、社会的条件の産物であるといえようが、現段階においてはこの制度が経済、社会の発展に大きな障害となっている。

ことは見逃してはなるまい。

共同家族制度もカースト制度と同様に宗教問題、教育問題としての解決方法もあるが、それは仲々困難な問題で近代経済と機械文明の導入によって、初めて容易にしかも速く瓦解して行くのではないだろうか。

(3) この国は豊富で低廉な労働力を持っているが、カースト制度や共同家族によって大きな制約を受けている。更に女性隔離の習慣が女子の職場への進出を阻んでいる。それでも働き手が要になると、職場の極めて少いネパールではぎりぎりの人間生活に苦む人々がわんざと押しかける。しかし文盲率の高いネパールではこれらの人々はすべてが文盲で、読み書き出来るものはいない。況んや技術的知識を持っている人などいよう筈がない。唯あるのはカースト制度による世襲的な職業で親から子に受つた原始的な技術のみで、新しい技術知識は皆無といつてよい。

これら豊富で低廉な労働力や技術知識の低さが新技術の導入、機械化等を遅らせている原因になっているようだ。カトマンズ盆地だけでも食器を作るカーストが数カ所で集団で生活し、食器を作る部落を形成している。バターンは特に有名で三〇〇軒位の家内工業的手工業者が朝から晩までガンガンとやかましい音を立てながら、金槌と石の床だけで、機械と名のつくものは一切使用せず、す

べて手で、複雑な水かめや鍋釜その他の什器を板金加工している。ここにはまだギルド制の面影が残っており、そのボスの存在で二十人以上の従業員を持つ親方にプレスという機械を使用すれば、安くて良い品が多量に生産出来ることをサジェストした処、

一 安い労働力がいくらでもあるから、そんな高い機械まで買って生産する必要がない。

二 その上、そんな機械を使ったら、沢山の失業者が出来る。

三 更に、市場が狭いから、余り多量に出来ても、売るのに困る

という。豊富低廉な労働力と技術知識の乏しかった日本の工業の発展段階の初期によく似ているように思えた。

技術教育、訓練等によって質的向上を計れば質量共に優れた労働力を提供して産業開発に大いに貢献することだろう。

(4) この国は極く少数の金持と大多数の貧困者からなり、その貧富の差は極めて大きく、貧困者の所得は極めて低く、生きて行くぎりぎりの生活をしている。「やっと二人を支えるだけの食料を三人が食い合っている」これは二十世紀のインドの農民の状況を現わした有名な言葉であるが、ネパールもこの言葉がピッタリ当てはまる。それ故、一般大衆の購買力は極めて低く、国内市場は極

めて狭い。その上地理的条件、交通事情等がこれに拍車をかけ、国内市場を狭めている。更に豊富低廉な労働力が圧力となつて、機械化を阻み、近代工業への脱皮を困難にしている。社会制度を改革し、大多数を占める農民の購買力を高め、質量共に優れた豊富で低廉な労働力を供給することによつて、近代工業を興し、原料輸出から製品輸出への転換を積極的に推進して慢性的な国際収支の大きな赤字を改善し、貧困と停滞から一日も早く脱するようにならなければならない。

(註)

この資料は一九五四年に行なわれた国勢調査によつたもので、少し古くて恐縮であるが、この国ではこれだけの資料を集めるにも一苦労である。新しい資料が手に入り次第改めて行きたい。だがこの資料でも、ネパールのすう勢だけは知ることが出来ると思われる。その上人口が、年々約二〇万位増加しているので、これを頭において、加減しながら読んでいただければ、ネパールの現状がスケッチ出来るのではないだろうか。

四 交通事情とその比重

世界中で、おそらくこの国ほど各地間の交通手段を持たない国も少なからう。このため各地方に住む人々は隔離切断され、経済の型は原始的な未発達の状態のまままで今なお残されていると言えよう。動植物資源の発育に適する気候条件の土地、或は豊富・有用な鉱物資源の埋蔵地、適当な電源



人の肩による山間部の担夫運搬

開発地点等が相当あっても、交通の不足がこれらの資源の開発利用をさまたげている。工業・商業の発達も非常に遅れているのも交通の未発達が大きな原因をなしているように思える。

それ故、将来この国は資源を開発し、工業を振興し、交易を伸展する上に交通が占める比重は極めて大きいと言えるであろう。

ネパール国の交通の現状を検討しながら、その問題点を探ってみることにしよう。

東西の援助競争は道路からか

ネパール国の主な道路は合計僅か七八〇kmと言われる。これらの道路は政治・経済の中心である首都カトマンズと、インドに接し平野と

小高い丘からなるタライ地区に集中している。そしてすべてが北から南に走り、インドに通ずる道路ばかりで、国内を東西に結ぶ道路はない。これらの道路の内、舗装された自動車道路はカトマンズ盆地、タライ地区それぞれ二八km、二五六kmである。これを合計すると四八四kmとなり、主な道路の半分以上は舗装されている。反面山間部は自動車道路はほとんどなく、ほとんどが小道で、特に踏分け道が多い。その形は不規則で、地勢に左右されて曲りくねり、人が通って踏みつけ、自然に出来た道があるのみである。従って運搬機関はタライ地区の平地では貨物の運搬に対して貨物自動車・牛車（バッファロー・ブロック）・象等を利用し人の輸送に対して乗用車（特にジープ）・馬車・力車・自転車の利用が多い。しかしモンスーン時期となると、道路はひどくぬかるみ、舗装道路以外は車の利用は困難となる。

山間部は貨物に対して小馬・羊・山羊・ヤクの背を利用し、また、人間の肩と頭による担夫運搬である。人の輸送は、専ら小馬の背を利用する以外に方法はなからう。

ここで最も輸送路の開けているカトマンズ盆地の模様を今少し詳しく述べて全般の輸送状況を類推して戴くことにしよう。首都カトマンズ及びその周辺は道路が立派に舗装されているので、自動車もかなりある。しかしまるで自動車の展覧会でも見ているようで、最新式の自動車から博物館に

でも入れておきたいような旧式な自動車まで色とりどりのものが走っているが、特に最近ではジープ・自転車の利用が多くなり、現在は自転車時代といえよう。しかしこれとても一部の金持階級に限られ一般大衆の輸送に役立つまでには至っていない。日本の車であるが、先ず自動車では、筆者が持参したT会社製の自動車がただ一台、しかし評判は非常によく、ちよつと街に買物に出掛けても、黒山の人だかりで、ネパール人の金持やネパールに来てゐる外国人から問い合わせがしきり。自動車の修理工場を経営するドイツ人は、代理店をやりたいからと大した気の入力方であった。自動車はRスクーターが一五台、これまた評判がよく、私の友人であるドイツ人も一台持っている。ほめちぎっていた。しかし、修理部品の調達に弱っていた。自動車は日本登山隊の残したものが数台、インド製品に比べてとても品質が良く、しかもスマートで安く、評判は実に良く、ネパール人は何とかして手に入れたがっている。積極的に働きかければ輸出も可能であろう。

カトマンズで面白いことは人力・畜力による荷車がないことである。車輪のあるものは飛行機と自動車以外はお祭りのときのみ使用する、丁度京都の祇園祭に出ている「ホコ」の車に似た生仏の乗る車しかない。それ故、カトマンズ盆地で生産されている家内工業の商品はほとんど人の肩にかついで運ばれる。

次に重要な意味を持つインド及びチベットに通ずる道は何のどのような状態にあるかを述べておこう。この内現在最も重要な意味を持つ道路は政治・経済の中心である首都カトマンズとインドを結ぶ自動車道路であろう。これは一九五六年に完成し、これによって初めて外国との自動車による地上交通が出来るようになった。この道路は、インドとアメリカの経済援助により、インドの工兵隊が突貫工事で完成し、舗装された立派な道路であるが、この道路は軍事上にも重要意味を持っているのである。か今なおこの維持修理はインドの手で行なわれていると言われる。この道路の名は、王政復古をなしたとげた前国王の名前を取ってトリブバン・ラジ・パスと呼ばれている。

この道路が完成されるまでは、自動車一台を運ぶにも何十人も人が交替にかつぎ、谷を縫い、日本アルプス位の高い山を越えて運んでいたと言われる。今はカルカッタその他の都市から、自動車で一直線にこの道路を通って、首都カトマンズに荷物を運ぶことが出来るようになった。このため現在ネパールの経済に果している役割は実に大きい。

それ故、大型トラックの往来がとてはげしい。筆者もカルカッタからカトマンズへの自動車による縦断を試みたが、道路がよく、実に快適な旅であった。

おそらく、この道を縦断した日本人は、筆者と日本オリンピック聖火トライアル・パーティーだ

けではなからうか。日本の登山隊およびその他増加しつつある日本人来訪者のために、概略を記して参考としておこう。カルカッタからカトマンズまで自動車でたつぷり三日間（日中のみ）はかかる。インド領内の大ヒンダスタン平原を走る自動車道路は一直線で立派に舗装され、両側の街路樹にはヤシ、マンゴその他名の知れない熱帯特有の大樹が植えてあり、その中を平均時速一〇〇km くらいの速度で矢のように自動車は突走る。窓外の景色は日本人にはとても想像のつかないほどの大平原、見渡す限り一面に広がる作物の波、その中に点散する森、動物の群、風俗習慣を異にする種族、その服装や、家屋、それらが南から北に行くにしたがって変わっていく。すべてが一幅の風物詩であり、異国情緒をそそるに十分である。この立派な道路は英国植民地時代の置土産であると聞くが、インドとしては大きな遺産であろう。

ネパールへ入国するには、途中必ずとてつもない大きなガンジス河を渡らなければならない。つい数年前までは、舟でこのガンジス河を渡らなければならない不便さがあった。今は立派な二階建ての鉄橋が架けられ二階は車道・人道で、一階は鉄道となっており、自動車を降りる必要もなく、またたくまにこの河を渡ることができる。この河を渡って間もない頃、日が落ち始め宿をさがさなければならなくなるが、日本人にはインドのホテルは食事その他の関係で宿泊が困難であろう。こ

んなときにはインド政府の経営するゲスト・ハウスを利用するとよい。このゲスト・ハウスはインドの重要都市には必ずあり、部屋もきれいで食事もよく、宿泊料も安い。私の泊ったゲスト・ハウスは大金持の別荘といった感じで広い芝生の庭に大きな樹木が何本も天高くそびえていた。電気がないのでへいこうしたが、にわ鳥一羽を蒸したものと米の御飯が出てとてもおいしかった。その上昼の暑さとうって変って夜は涼しくなり、とても気持がよい。翌朝早く立って又一走りすると国境に着く。国境の町ビルガンジとラクソールにネパールとインドの税関があり、ここで通関を受けねばネパールに入国出来ない。しかしネパール側は土曜日、インドは日曜日が休みである。この休日を計算に入れておかないと二日間無駄になるから注意を要する。通関を終えていわゆるタライ地区に入ると、この地区の自動車道路はなだらかなスロープで一直線に果てしなく続く。両側は見渡す限り果てしない平原、次いで潤葉樹の大自然林である。この辺りがいわゆる象に乗って勇壮な虎狩りをする名所である。

カトマンズに入るには日本アルプス級の山を一つ越えなければならない。その麓に來ると、急に勾配がきつくなり、曲りくねったS字型の道路となる。潤葉樹の原始林をくぐり抜け、溪谷に沿って幾つかの鉄橋を渡ると、やがて一番高い峠にたどりつく。これがいわゆる有名なシンパンジャン

である。ここからはエベレストを初め、雄大なヒマラヤ連峰をパノラマの様に見ることが出来る。この間の原始林溪谷の美、峠から見る眺望はとても筆舌の及ぶところではない。ここからまた曲りくねったS字型の坂を下って、カトマンズ盆地に入るのであるが、途中山肌を縫って走る。道の片側は深さの分らない断崖である。夏ならずとも冷汗をびっしょりかく。今カトマンズから国境の町ビルガンジまで定期便のバスが一日数回も走っている。所要時間約八時間、運賃は日本円にして約四〇〇円。このバスによる旅行も一度はおすすめしたい。

次にネパールと中共の占領下にあるチベットに通ずる道であるが、これは大ヒマラヤ山系を越さなければならぬので、すべてが小道で、その形は不規則で地形に左右され、自然に通路となつたいわゆる踏分け道がほとんどである。

従って、烽つたいの道、谷を縫った道、はては急流に沿って岩場に作られた危険な断崖の道や、又竹や蔦で作られた吊橋、ロープのみを簡単に取りつけた橋などがある。峠は大体五〇〇〇〜六〇〇〇mで冬の間は雪が深く、交通は困難となる。それ故、夏の間のみ交通が行なわれ、これが数百年も続いて、今日に至っている。このような道を原住民達は、約三〇kgの荷物を背負い、日に二〇〜三〇km進んで行く。又アッシュと呼ばれている小馬かヤクの背に、約六〇kgの荷物を乗せ

て、隊商を組みながら日に約四〇km位の道程を進んで行く。そしてこれらの小馬等の頭は真赤に染めた毛で飾り、首には大きい鈴をつけて夜のまだ明けやらぬ頃から、チャリンチャリンと美しい鈴の音を鳴らしながら山を越え、谷を縫い、やってくる。何ともいえない異国的旅情をそそる。これがネパールとチベットを結ぶ交易路なのである。しかし、一九六一年一月、ネパール国王が中共訪問の際、チベットの首都ラサからネパール首都カトマンズを結ぶ自動車道路を、中共の経済援助により建設する協定を締結して帰国した。ラサから国境までは舗装された立派な軍用道路が既に完成していると言われ、この協定が締結されたときは、東陣営特にインドの怒りは激しかった。中共から帰国直後国王がインドに近接したタライ地区を巡視されたとき、国王を暗殺するための爆弾事件があつたが、これに関連があると言われる。

この自動車道路は五年後に完成する予定で、既に路線調査が始まっている。ところがネパール国としてはこの外に国内の産業開発のため、どうしても東西線が欲しくてたまらない。これに目を付けたのがソ連である。ソ連の経済援助で東西線が建設されることになった。この東西線は建設が容易でありしかも産業開発の可能性の最も大きい、平坦なタライ地区を走ることになっており既に路線調査も全部終わっている。しかし、東西両陣営の微妙な関係からであろうか、既に調査を完了し

ていながら、着工が見送られている。

それ故、ネパール政府は東西線道路建設の国民運動を起こして、他国の援助がなければ、ネパール自身でこれを建設しようと意気込んでいる。筆者がカトマンズ滞在中も、政府役人全部が給料の中から道路建設基金として一定額を拠出し、国民に率先垂範し資金集めに大量の状態であった。

世界でも一番未発達の鉄道

鉄道は総計わずか約一一四kmでアムレクガンジとラクソール間約六一km、ジャユラゲルとジナクプール間約五三kmで共に国営である。この鉄道はライト・ナロウゲージ二六インチで、わずかに二線があるのみで、しかも、区間は短く、世界でも有数の鉄道未発達国であろう。この二線ともタライの平坦地区に建設され、北から南に走り、インドの鉄道と連絡している。現在の鉄道の内、アムレクガンジとラクソールを結ぶ線は、政治・経済の中心である首都カトマンズへの輸送路として重要である。現在アムレクガンジからカトマンズまでは、自動車又はロープウェイで輸送されている。この鉄道は一九二七年ネパール最初の鉄道として敷設されたが、インドの鉄道がメートル・ゲージであるため、国境で荷物の積換を余儀なくされている。しかも日一日と輸送量は増加してい

るので、ネパール側の鉄道をメーターゲージに変更し、輸送の合理化を計らなければならないのではなからうか。更に現在は鉄道の終点とロープウェイの終点はいまだ連結されておらず、やむなく自動車で運搬しているようであるが、どちらか延長して、鉄道とロープウェイが直結されるよう、考慮されなければならないであろう。

道路の場合と同じように鉄道においても、ネパールは東西線がないので、物質輸送はすべてネパールの国境線に沿って走っているインドの鉄道を利用しなければならない。それ故、ネパールの生産品を国内の生産地A地区から消費地B地区に運搬する場合コスト高となり、インドの生産品より割高で、インドの生産品と太刀打ち出来なくなっている。ネパールとしては鉄道敷設の比較的容易なしかも資源の開発、工業の振興、交易の伸長のため、東西線が欲しいところである。特に世界でも有数なタライ地区の森林資源開拓用として、東西線の敷設が特に要望されることだろう。しかしこれには莫大な資本が必要となるから、先ず道路の建設から始められるべきであろう。

貨物輸送にロープウェイがー役

スキー・リフトによく似たロープ・ウェイが谷を縫い、山を越えて、荷物をバスケットの中に一

杯積み込んで、間断なくインド側から首都カトマンズに運ばれている。これがカトマンズ盆地六〇万人の食料その他の物資の輸送に大きな役割を果たしている。そしてこれがこのような山国には最も安価な輸送方法であろう。このロープ・ウェイは国営で、一九二四年に七〇万ルピー（三一六〇万円）で建設され、カトマンズとダルシング間約二九kmを走っている。それ故、ラクソールからアムレクガンジまで、鉄道または自動車で荷物を運び、鉄道の場合は荷物をまた自動車に積み換え、それからダルシングまで運搬し、そこからロープ・ウェイを利用する。

最初、ロープ・ウェイの能力は一時間当たり八トンであったが、部品等が摩滅して能力が低下し、現在は一時間当たり五と六トン位になっていると言われている。現在は約一二時間位しか運転されていないので、一日当たり約六〇トン位しか運搬されていない勘定となる。現在インド側から首都カトマンズへ一日当たり約二二五トンの貨物が輸入されていると言われている。それ故、一日当たり一六五トンが自動車・飛行機で運搬されている勘定となる。その内、自動車が主で、トリブバン・ラジ道路の比重は極めて大きい。しかし、カトマンズへの貨物は増加する一方で、その増加率は、一年毎に一日当たり一〇トンと推定され、とてもこの増加する貨物を現在の施設だけで消化することがむずかしくなりつつある。それ故、アメリカの経済援助で、能力一時間当たり二〇トンの新しい

ロープ・ウェイが建設されており、既に八〇%以上完成されている。

神経をとがらす飛行場の設置

王政復古の一九五〇年に、天候の良い日だけ飛行出来る野っ原のカトマンズ飛行場が出来上った。そしてインド航空会社によって、DC3のプロペラ機を使用し、週一回カトマンズとインドのバトナ間の飛行が開始された。その後、順次飛行場を改善して、週六回に増加した。一九六〇年、飛行場の滑走路等のセメント舗装が完成して、モンスーン時期を除いては規則正しく飛行が続けられるようになった。その後、カトマンズ以外の国内飛行場が、アメリカ・インドの援助によって、シムラ・ピラトナガール・ポカラと順次建設された。そしてアメリカからDC3が三機がネパール政府に寄贈され、ローヤル・ネパール航空を設立して、国内線の飛行が開始されるに至った。更にラジビラジ、ジャナカプール、バハトプール、バイロワ、ダング、ネパールガンジ、ダハンガジにも飛行場を設立し、飛行を開始した。しかしこれらは何れも土地をならして作った野っ原の飛行場で、デコボコの多い芝生の滑走路を走り、飛んだり降りたりしている。又更に新しい飛行場が、アメリカの援助で開発されているラプティ渓谷に設置されつつある。ネパールの飛行場はポカラを

除いて、タライ地区に集中しているので、山間部の主要地に飛行場の建設が提案され、計画中のものはシムリングタール・ルムジャタール・ブラシングタール・ジャジェルマット・ムスタングである。

しかし、チベットの国境に近いムスタングの飛行場設置計画については、共産圏から強い異議が出て、現在保留となっている。この様に盛り沢山の計画を持っているが、資金をいかにして調達するかが問題であろう。現状としては両陣営からの援助がなければ到底この計画の実現は困難ではなからうか。

次に国外線についてはロイヤル・ネパール航空とインド航空によってカトマンズとパトナ間以外の次の二航路が開設された。

- (1) カトマンズとニューデリー
- (2) カトマンズとカルカッタ

最近、雄大なヒマラヤの景観や、中世紀の姿がまだそのまま残っているカトマンズの風物を一目見んものと、登山隊以外の日本人の来訪者がめっきりその数を増してきた。そこで航路・飛行日数・航空時間・運賃を参考までに記しておこう。

(1) カトマンズとニューデリー間はネパール航空が週二回で水・土。インド航空が週四回で火・水・木・日。所要時間約三時間。運賃二〇〇ルピー（一万五千元）である。

(2) カトマンズとカルカッタ間はネパール航空が週二回で火・木。インド航空が週六回で月・火・水・木・金・日。所要時間約三時間。運賃は一四〇ルピー（一万五百円）である。

なお、ヒマラヤの景観を満喫したい方はローヤル・ネパール航空を利用した方が便利であると思う。ネパールの飛行機は観光を兼ねて、ヒマラヤ連峰をすれすれに飛んでくれ、旅行者を楽しませてくれる。しかしモンソン時期はヒマラヤは見えないから注意が肝要である。ホテルは外国人向きのものが五つあるが、ローヤル・ホテル、コロネーション・ホテル、スノービュー・ホテルが適当であろう。宿泊料は大体、四〇〜六〇ルピー（三〇〇〜四五〇〇円）見当で、スノービュー・ホテルでは、おいしい支那料理を食べられる。

軍事につながる通信施設は急テンポ

(1) 有線及び無線施設

有線の施設については、首都カトマンズに四〇〇回線の電話局がある。この電話局は、(a)西部

地区Ⅱナウコット、ゴルカ、ポカラ、バルバ、バイロワ、(b)南部地区Ⅲチサパニ、バラ、バルサ
(c)東部地区Ⅳラウタハット、サアブタク、モラング、ダンクータ、バネバ、ドウリケルに接続さ
れている。又、無線施設についてはピラトナガール、ジャレスワール、バイロワ、ダンクータ、イ
ラム、ネパールガンジ、ドテイ、ダイレク、タアウリアワ等を含む二八カ所に設置され、更にこれ
がインドのデリーとバトナにも接続されている。

現在、ネパールはアメリカ・インドと三国協定を結び、アメリカ・インドの経済援助でカトマン
ズには一五〇〇回線の自動交換局が設置され、無線施設も二八カ所から五六カ所に増加され、イン
ドとの接続もバトナ、デリーの外にカルカッタとも増接されて、既に庁舎その他の施設はほとんど
完成されている。

(2) 郵便施設

組織的な郵便業務は一九世紀の終り頃から国内を対象として始められた。一九三六年インドと郵
便協定を結んで、ネパール郵便局はインドに対して郵便業務を開始した。しかしネパールのスタン
プはインドに対して普通郵便のみ有効で、書留・小包・その他インドを除く外国郵便はインドのス
タンプが必要であった。それ故、カトマンズにあるインド大使館の中にインドの郵便局が設置され、

これらを取扱った。一九五九年ネパールは万国郵便連盟に加入を許され、ネパールのスタンプは万国に通用するようになった。しかし郵便為替等の組織に欠けているので、今なおこれらは外国電報と共にインド大使館の中にある郵便局で取扱っている状況で、組織内容共まだ貧弱で改善すべき余地が大きい。参考までに日本までの郵便料金を示すと次の通りで、所要日数は約七日間を要する。

航空郵便

葉書	〇・六六ルピー（二九円七〇銭）
手紙	一・一二ルピー（五九円四〇銭）
印刷物	〇・五八ルピー（二六円一〇銭）

東西紛争の場とならないことを

以上、ネパールの交通の現状について項目別の概要を述べたが、この国は高峻な山が連なり、斜面が急で、谷が深い。そしてこれらの谷によって数多くの急流が形成されている。それ故道路の建設、橋梁の架設も容易でない。その上一世紀以上にわたるラナ幕府の政策として、外敵の侵入を恐れ、交通施設の建設をきびしく抑制したことが、交通施設の遅れた大きな原因をなしている。徳

川幕府も又ラナ幕府と似たような政策を取り、江戸の防備を堅めるため、大井川・天竜川等の大きな川に橋をかけなかったが、参勤交代制度を取ったので、東海道・中仙道・奥州街道などの五街道を中心とする道路交通が発達した。それ故ネパールの現状は日本の明治維新当時よりはるかに遅れているように思える。しかも四面陸のこの国は四面海の日本と比べて海上交通に恵まれず、交通の不便がひしひしと身に感ぜられる。ネパールもこの点を痛感し、第一次五カ年計画（一九五六～一九六一）にも、農業開発に次いで、道路を初めとする交通施設の建設に最も多くの予算を計上し、あらゆる困難を克服して、着々整備開発がなされつつある。しかしこれが建設には相当な日月と多額の経費が必要なので、その建設はなかなか容易でない。特に資金をいかにして調達するかが大きな問題となっている。

ところが、ネパールは東西両陣営の分岐点にあるので、東西両陣営とも特に交通施設に関心を持ち、その建設援助に力を注いでいる。それ故、日本の明治維新当時に比べて建設テンポは早く、政治的・経済的に重要な幹線のみは思ったより早く整備されつつあるようだ。しかし、交通施設特に幹線道路が整備された後、これが産業開発のために利用されないので、政治的・軍事的に利用され両陣営の紛争の場となり、この国の平和や国民の幸福が破壊されることのないよう切望してやまない。

五 資源の現状とその開発

ネパールの資源は豊富であると言われるが、殆どが未調査・未利用の状態で、判然としないものが多い。農産・畜産・林産・鉱産・水資源の順序で概要を述べてみたい。

バラエティに富む農産資源

耕地面積は約三百万ヘクタールで、総面積の二七%に当たると言われる。耕地面積の八〇%以上が小作農で、封建地主の支配下にある。又耕地面積の約四八%に当たる百五十万ヘクタールが米作地で、残りの約五二%に当たる百六十万ヘクタールに米以外の穀類及び菜種・砂糖きび・ジュート等の工業作物を作っている。これを地区別に見ると、タライ地区では米・大麦・とうもろこし・ポテト・マスタード・ゴマ・ナタネ・落花生・リンシード・さとうきび・煙草・ジュート等。中央地帯では米・小麦・大麦・とうもろこし・ポテト・マスタード・ナタネ・ゴマ・落花生・大豆・茶・綿等。高山地帯では大麦・小麦・とうもろこし・ポテト・豆類を産する。米はタライ地区と中

中央の盆地溪谷で水田耕作が行なわれ、山間部は、山肌を耕して段々畠を作り、陸稲を作っている。

ネパールでは山の頂上に家を建て、上から下へと耕して行く。日本と逆である。米はネパール人の主食である。米は自給自足出来るばかりでなく幾分余る。しかし交通が未発達のため余剰地区から不足地区への輸送困難で、ある地方では足りなくて、あの地方では相当余る。それ故インドに近接して交通の便利な米の産地タライ地区から多量の米がインドに輸出され、その一部がまた不足地に輸入されている。従ってインドに近接したタライ地区には、米を水に浸し、蒸気でふかして脱穀する、大きなライス・ミルの工場が多い。次に米の耕作方法は日本と同じなのに驚かされた。参考までに水田耕作の方法を記しておこう。その順序は a 苗代作り、b 株分け、c 水田への運搬、d 田植、e 田草取り、f 刈取り、g 稲こぎ、h もみすり、i 精白であるが、これを細かに見ると、日本のやり方とかなり異なる点もある。その点を次に挙げてみよう。

a 田植と田草取り

田植は女の受持ちで、一人の女が田植え唄をうたうと、他の女達はこれに声を合わせて田植を始める。実に楽しそうな田植風景だが植えた後を見ると、目茶苦茶である。それは、田植網その他の道具は一切使わないで、自分勝手にテンデンバラバラに植えるからである。だから植えられた苗は

日本のように横から見ても縦から見ても整然としていないので、田草をとる器具は、とても使用出来ない。それだから、昔日本でもやっていたように、田の中に四つんばいになって、手で田の草を取らなければならない。時々尖った稲の穂先で目をやられた女を見掛けることがあり気の毒でならぬのでちよつとサゼンションを与えた。それは藁縄や竹竿にぼろ切れの印をつけさせ、これを使って田植し、田の草取りには木製の手押し草取器を作らせて使用させたのである。一寸したことであるが、これだけでもこの国では大変な改善で大いに喜ばれた。この国では田植えが終ると田んぼの中でネパール・ロキシと称するネパール独得の地酒をくみかわし、田植えの終った労をねぎらい合う。だがこの酒はアルコールが八〇度以上であるのに驚いた。米で作ったものが多く日本の焼酎に似ているが、あまくておいしい。酒が回るとその余勢をかって、街中を太鼓を打ち鳴らしながら踊り狂って練り歩く。

b 刈取りと脱穀

刈取りはモンスーンの終る十月から始まり、日本の鎌に似た刃物を使用する。刈取るや否や、田んぼの中に用意してある四角な石板・堅木板の上で思い切りたくのである。これが所謂この国の脱穀方法である。それ故、たたけばすぐ落ちるもみ籾のよい籾をネパール人は好む。それだから、

刈り取った稲を運ぶ途中、もみがバラバラと田んぼの中にこぼれ落ち、田んぼの中はもみだらけになっている。だからもみの歩留めはとても悪い。しかしネパール人は何にも気にとめる気配はない。

c もみすり・精白

もみすり・精白には、昔日本にもあった足踏みウス、又は免の餅つきによく出てくるキネウスを使用する。足踏みウスは昔の日本あったと全く同じで郷愁にかられるが、若いネパール娘と老婦が路地の石だたみに木白を取り出して三本のキネで免の餅つきよろしく、もみすり・精白をやっている姿は異国情緒たっぷりである。

このように、農業技術は大変遅れており、しかも歩留は大変悪く五〇%内外ではないかと思われる。このような訳で農民が全人口の九三%もいるネパールでは農業開発に特に力を注ぎ第一次五年計画で農業関係に最も多くの予算を計上している。この国は文盲率が高いので、その農村開発の方法はモデル農村を作っここにあらゆる進んだ技術方法を取り入れこれらを実際に見せて他の農村の改善を計っている。或る日モデル農村を見学に行ったことがあるが、ここでは日本の種モミを取り寄せ、日本の農法を取り入れて、火を作っていた。日本のように小さい段々畝になった水田に、

見渡す限り黄金色の稲穂が美しく波打っていたが、そのモデル農村開発センターに日本製の足踏脱穀機が、わびしく壊れたままころがっていたのが特に筆者の目に印象的に映った。早速修理箇所を指導して使えるようにしておいた。又日本青年海外派遣団十八名が来訪したとき、農業試験場を案内したことがある。ここには世界各国からモミの種を取り寄せ、ネパールに最も適する稲の試作研究していた。その中で日本のモミの種で作った稲作が、一番貧弱で恥しい思いをした。派遣団の中には農村出身のものも数人いたが、これは改良前の古いモミの種で、とてもお話にならないものだとこぼしていた。場長にこの訳を話して改良された自慢のモミの種をこの派遣団を通して送ってもらうことを約した。そして場長と堅い握手をして別れた。世界の片隅にはこの様な断面もあり、日本人として、もったなくなにか打たなければならぬ手が残っているように思われた。

ネパールに言わせれば、日本のものはモミ離れが悪く、茎が短いから、ネパール人は好まないと言う。なる程、ネパール式の原始的な脱穀方法では困るであろうが、反面不必要な落モミの莫大な損失を考えれば、むしろ脱穀方法も改善し無駄な損失をなくするよう考慮すべきであろう。又、茎は飼料・肥料・燃料にするので貴重な材料である。長い方を好む傾向があるが、これにも限度があるであろう。これは単に一例を示しただけであるが、総体的に云って農業技術は大変におくれてい

ると云えよう。ネパールの地勢的・気候的・社会的条件等を考えると、日本の農業技術が最も適している様に思われる。今後、日本人農業技術者による指導が望まれよう。この外小麦・とうもろこし・豆類・ポテトは西部クライの山間部で多く産するが、いずれも技術は大変遅れているようである。次に工業の原料となる工芸作物のことであるが、ナタネ・マスタード・リンシード・煙草・ジュート・ヘンプ・フラクス・マオラン等はクライ地区の気候条件が最も適し、大規模のナタネ、マスタード等のさく油工場・砂糖工場・ジュート工場があり、ジュート工場の如きは三千人位の従業員を使用し、一昼夜三交替で操業している。更に砂糖工場については中共の援助で近代的な工場が計画されている。又、煙草はソ連の援助によって近代的な大工場が計画され、着々その準備を進めている。茶は、ヒマラヤの山腹中央地帯が最も栽培に適すると思われる。以前はかなり生産されていたが、現在余り生産されていない。今後近代的な技術を取入れて開発が考慮されるべきであろう。

紙の原料であるサバイグラスが西クライ地区で多量に生産され、原料のままにインドに輸出されている。中共の援助による製紙工場が計画され、工場設立の準備調査は既に完了している。今後土地の有効利用を考慮し栽培技術を改善すれば、工芸作物は増産の余地がまだまだあるように思われる。これらを指導奨励してもっと増産し、原料のままに輸出するのではなく、工業化して行くこと

がネパールの工業の初期段階において特に考慮されるべき問題であろう。この際日本の旅行者の為に一言つけ加えておきたい。米は東南アジアの内では日本米に一番近くて美味しい、又野菜類はじゃがいも・さつまいも・さといも・やまいも・大根・人参・キャベツ・ほうれんそう・カボチャ・トマト・きゅうり・なす・茎ねぎ・玉ねぎ・らっきょう・にんにく・にら・はす・たけのこ等、日本にあるものは大抵ある。特に日本よりもよく出来ていると思われるものは、きゅうり・なす・大根・さといも・やまいも等であり、貧弱なものは、トマト・人参・さつまいも・じゃがいも・玉ねぎ等である。この内特に大根は日本から種を取り寄せ、農事試験場で栽培し、日本でも見ごたえのあるような練馬尻細大根が出来ているのは驚いた。ここでは種を作って農家に配給している。切干大根は物々交換の材料として山間部では珍重される。少しでも技術を改善すれば立派なものを得られるものと思われる。このような状況であるから、日本人は調味料、特に醤油さえ持参すれば日本料理を結構満喫することができるだろう。

有望な畜産資源の開発

畜産資源としては家畜として牛・水牛・羊・山羊等、野生のものとしてジャコウ鹿・象・さい及

び虎・ひょう等の猛獣であろう。これらの動物から皮・乳・羊毛・ジャコウ・象牙・角・猛獣の毛皮等を得ている。しかし、ネパールでは牛は神様であり、街中到的所を歩き回り路上にゴロゴロ寝ころんでおり、教え切れない程で、おそらく世界中でも一番多い国の一つと言えよう。牛は神様だから自動車で街を通る時など、牛が寝ころんでいると、よけて通らなければならないし、時にはわざわざ自動車からおりて牛をのけるには一苦労することもしばしばある。又ネパール人の中には牛の小便を手を受けて飲んでいる人、子供の頭にふりかける人等を見掛けることもある。この様には神様であるから、これをいじめると法律で罰せられる。それ故工業資源としての価値は少ない。ネパール人は牛肉を食べることができず、我々外国人が牛糞を持っていてさえ変な顔をするくらいであるから、牛糞を作ることもし出来ない。しいて言えば雌牛から乳を取るのが関の山である。だから雌牛には持主があり、これらの牛から乳を集めてチーズやバターを作っている。特にカドマンズにはスイスの援助で近代的な工場も出来ている位である。しかし雄牛は神様の対象のみで持主もなく、唯街の中をブラブラしている。ところが長い間よく観察して見ると信仰の対象以外に一般の日常生活に大きな御利益を与えているのに気が付く。それは牛の糞である。先ず第一は燃料として使用する。糞と混ぜ合わせて饅頭形のものを作り、これを壁にはりつけて乾すと貴重な燃料が出来

る。これは女の仕事で、若い娘が平気な顔をして、ちかに手で粘っこい牛糞をかきませながら、燃料を作っている光景は我々日本人には、異様な感を与える。第二は食器を洗う時に使用する。ネパール食は何でも油でゴツタ煮にして食べる習慣がある。食器は大抵銅器で作られ、この食器にネツトリついた油を取るのに牛糞を使うと奇妙によく取れる。第三に煉瓦積又は壁を塗る際の接着剤として使用する。ネパールの家は煉瓦造りのものが多く、大抵四階建てが殆どである。この煉瓦は一本の鉄筋も使用しないで、煉瓦と煉瓦の間は泥と牛糞でねったものでバインドして、四階まで積み重ねられ、壁は土と牛糞を混ぜ、白や青、色とりどりの染料を入れて塗っているが、家はなかなか頑丈で壁ははげない。しかし地震の多い国ではひとたまりもなからう。筆者もネパールに来て初めて牛ふんのいろいろな効用を知ったが、仲々その用途も広く神（牛）様の御りやくは大したものだと感嘆した。神様の牛と反対に豚は不浄ものとされ、いやしまれている。若し何処かで豚にちよっとでも触れようものなら、直ちに河に行き、ベイジングをして体を清めなければならぬ。それ故、ネパールでは身分の一番低いカーストのみがこれを飼い、これを食しており、高い身分のカーストは食することが出来ない。誠に皮肉なことである。だからネパールでは豚の品質は悪く、日本のように食欲をそそるデンプリ肥えた豚はいなくて、黒いやせた野生の豚ばかりで、一般に肉を皮

ごと食べる習慣がある。だから工業資源としての価値は薄い。従って、工業用資源としての家畜は水牛・羊・山羊が主体をなすと言えよう。ネパール人は、食肉・乳の殆どを水牛から求める。それ故、各々の家には数頭の水牛を飼っており、めすの水牛から乳を取り、おすの水牛から肉を取る。だからめすの水牛は非常に可愛がられ大切にせられるが、おすに生まれたが最後、余り大きくならない内に殺される運命にあり、因果な生涯である。屠殺はカースト外の非可触賤民が当り、一カ所に住居し、ここで主として屠殺が行なわれるが、お祭などには各々の家庭で、あたかも日本で鶏でもしめるように街かどや田んぼ道など処かまわず屠殺が行なわれ、その屠殺方法は原始的でざん酷そのものである。

a 四、五人がかりで、先ず足をしばり上げ、ころがして動けないようにする。一方では大きな庖丁をゴシゴシといでいる。刃つけは伸々うまく、またたくまに身の毛もよだつような切れ味となる。黒山のような人だかりがこれをじっと見つめている。

b 一人の頑強な男が氷のようにとぎすました大きな庖丁を持って来て、素早く喉の血管を切る。血がどっとふき出すが、がんじがらめに足を縛られて、水牛は身動きが出来ない。一人の男が大きな桶を持って来て血を受取る。桶に血が段々とたまっていくのと反比例に、水牛は大きな断末

魔のうなりをあげて、息を引取って行く、のどの血管から血が抜き取られている間、相当の時間がかかるが、うらめしそうに、苦しい息の中から、救いを求めるかのように、じっと人の顔を見つめている。視線がからち合うと、残酷さが身にしみてじっとしてられないが、ネパール人は案外平気である。

c それを済むと、足の網をほどき、ワラをかぶせて焼く。時折、毛がきれいに取れているかどうかをチェックし、手がなくなるまで何回もワラをかぶせて、丁寧に焼く。

d 毛がなくなると、手なれた手つきでさっきの庖丁でうまい具合に首を落とし、腹を割って臓物を取り出す。これらの臓物はきれいに処理して、余すところなく食用に供する。

e それから、皮をはぐこともあるが、殆ど皮をはがないで、皮と肉とがいつしよになったまま手おので骨からはずす。大ざっぱで少し位の骨はついたままである。皮骨瓜等は工業原料に使用されていない。現在ネパール人は皮のついたままの肉を好んで食べているが、若し皮をはいでこれを利用する気なら、カトマンズ盆地だけでも、年百万頭位の水牛を食べていると言われているから、約百万頭分の原皮を生産することが出来る勘定となる。しかしこんな考え方でも皮は大量に生産され、輸出の大宗をなし、皮はなめす技術を知らないなので原皮のまま、殆どがインドに輸出されてい

る。又この外、国内到る処で乳を集めて、チーズ・バターをスイスの援助で生産しているが、まだ輸出する段階ではない。又西部山間部ではバターからギー称する食用油脂を原始的な方法で作り、インドへ多量に輸出している。ネパールガンジはこのギーの集散地として有名である。羊・山羊等についても以上のことがそのままではまるが、食肉・皮・乳等を供給する外に、多量の羊毛を供給する。特にヒマラヤ山麓の山羊から取った羊毛はカシミヤと称し、品質が良く、世界的にも有名である。海外では高級な婦人服やオーバーコートに使用せられ、人気がある。野生の動物では、ジャコウ鹿からジャコウを取り、ネパールが世界の需要の五〇%程度を供給して世界第一位である。この外、象牙・さいの角、ジャングルに住む虎・ひょう等の猛獣の毛皮もかなり生産されて有名である。しかし乱獲のため、その数が減少しつつあると言われ、これらの管理を充分考慮する必要がある。

国家の最大収入は林産資源

森林面積は六五〇万ヘクタールで総面積の四六%に当り、その内四五%が、サルを主体としてシマル、シイン・カルマ等の潤葉樹(熱帯)、四〇%が樅を主体としてクルミ・カエデ等の潤葉樹(暖

帯・温帯)残り一五%が杉・モミ等の針葉樹となつてゐるといわれる。タライ地区は亞熱帯モンソーン気候であるから、森林はよく繁茂し、見渡す限りサル・シマル・シソ・カルマ等の闊葉樹の自然林が続き、大木が密生して世界でも有数の森林国であることを物語つてゐる。

高度に従つて闊葉樹林から針葉樹林に変わり、中央地帯ではカシ・クルミ・カエデ・ポプラ・木レン等の闊葉樹と松の針葉樹の混合林となつており、高山地帯ではエゾマツ・モミ等の針葉樹とかん木が多い。又中央盆地地帯首都カトマンズには松・椿・桜等、日本にある木は殆どあり、松は樹皮は赤く日本のものより葉が長い。椿は一重咲きで淡いピンク色をしており、花好きなネパール娘の髪飾りとなる。桜は日本の大山桜に似ていて花が多く十二月が満開である。筆者の友人が丁度十二月に来訪、カカニの丘へヒマラヤを見に行つたとき桜が満開で、まさかネパールに来て、しかも十二月の、日本で言えば冬の真最中に、桜の花見が出来るとは予想もしなかつたと日本を懐しがり、桜の下で酒ならぬ紅茶を汲みかわし、故国を偲んだことがある。タライ地区に主として産するサルは堅い木で建築材、鉄道枕木等に、シマルは軟い木で、マツチの軸・プライウッド・製紙等に、またシソ・カルマは家具・ベニヤ板等に使用される。中央地帯以上に産する松・エゾ松・モミ・カシ・クルミ・カエデ等は運搬困難のため、地方民の燃料・農具・建具・その他建築材等に使用され

ている。しかしネパールでは極く少量が使用されているに過ぎず、殆どは原木のままにインドに輸出され、輸出額は年五十億円以上に達すると言われる。これとても、保有量に対しては微々たるもので、未だ未利用の状態だと言えるだろう。又この国には製材業もまだ充分発達しておらず、原木でインドに輸出し、板・角材等となって再び輸入されている。一言にして言えば、世界有数と言われる莫大な森林は、未利用のままに眠っているという状態で、開発の手を待っているところであろう。ネパールとしてはこの大きな資源をどのように利用するかがこの国発展の大きな鍵となるであろう。従ってこの資源をどのような面にどのように利用することが最も将来の工業開発に有利であるかを良く考え、開発を考慮することが肝要であろう。次に果物についても若干触れておこう。この国は温帯性のもの、熱帯性のもの等種々雑多な果物があり、しかも豊富である。熱帯性のものとしては、バナナ・パイナップル・パイヤ・マンゴ等であり、温帯性のものはミカン・レモン・その他かんきつ類、ナシ・モモ・カキ・クリ・ウメ・ブドウ・クルミ等日本にあるものは殆ど言ってもいい位なんでもある。熱帯性のものはバナナは各家の庭に数本ずつ植えてあり、街で買っても一ルピー四十五円も出せば十個以上もある大きな房がいくつでも買え、とてもおいしい。パイナップル・パイヤ・マンゴ等もバナナと同じ様に安い。特にマンゴは到る所に大樹の森が

あり特に安い。日本人にはとても羨ましい限りである。ボカラの農事試験場を訪れたとき、これら熱帯性果物の品質改善を行っていたが、立派なものが出来ており、これが普及すれば有望な輸出品になり得るであろう。温帯性のはミカン・レモン等のかんきつ類を除いては品質改善の余地が多分にある。ミカンは、日本のよりも少し大きい位で、とても甘くておいしい。しかし、種が多いのが欠点である。値段は一ルピー（四十五円）で約十個位あり、ボカラ・ダランの中央地帯が産地で、主として、インドに多量輸出されているが、貯蔵法を知らないで相当量を腐敗させているようである。又レモンも安く、毎日生地レモンを紅茶に入れて飲む味はとも忘れられない。その他ネパール独特の大型の円形や楕円形のかんきつ類があるが、味は淡白で、咽喉がかわいたとき濡すのに良い。ネパールには現在園芸試験場も設置されているので、今後大いに品質を改善し、將來、果物の缶詰、ジャム、ゼリー、果物酒・果実液等の製造を研究して、輸出に意を注ぐべきであろう。

開発の手を待つ鉱物資源

鉱物資源は豊富であると言われているが、現在未調査・未利用の段階であると言えよう。スイス

・アメリカ・インド等の地質学者によって初歩的な調査が行なわれたに過ぎないが、これらの調査で現在までに判明しているものは次のとおりである。

金 属		非 金 属	
△品名▽	△鉱区数▽	△品名▽	△鉱区数▽
鉄	一三	石 炭	八
銅	三〇	硫 黄	六
金	一二	甲 鉛	三
鉛	七	石 灰	二
亜 鉛	四	マイカ	二〇
ニッケル	七		
コバルト	六		

しかし品質・埋蔵量については、未だ十分な調査が行なわれていない。マイカなど、道端の到る所に小片から大片に到るまで多量にころがっていて、日本人にはすいえんおくにあたわずというところであろう。しかし、一般のネパール人は利用方法を知らないから、宝の持ちぐされで何ら関心

はない。日本ではエレクトロニクス産業にはなくてはならない重要物質で、殆ど輸入に依存している。若し安くて良質なものをネパールから入手出来るならと言うので一九六二年一月日本マイカ調査団を派遣し、調査にやってきた。ネパール側も若し日本が豊富なマイカを利用することが出来るなら、パートナー或はこの他の方法で日本から産業開発に必要な機械等を輸入し、日本の機械と技術でネパールの産業開発をやりたいと意気込んでいた。しかしマイカの良質のものはあるが、交通が未発達で、商業ベースにのるかどろかが今問題になっている。又石灰についてはビーセで、品質埋蔵量共、セメント工業を経営するに充分であることが判明したので、ソ連の援助で近代的なセメント工業が建設されることになっている。しかし鉱物資源の調査開発は一番遅れており、現在鉱物で作られた原材料は全部輸入に依存し、特に銅、鉄、セメント、油の輸入量は大きい。このような状態であるから先づこれら資源の調査開発態勢を整えるため、アメリカの援助によって、鉱山局とその実験室の立派な庁舎が建設されつつあり、又これらに必要な諸種の機械器具も続々と到着しており、鉱物資源の調査・開発が活発化しようとしている。

水資源は世界でも有数

世界の屋根と言われるヒマラヤ山系に源を發し、數多くの河川がネパール国内を網の目のように流れている。これらの河川が豊富な電力資源・工業用水・灌漑用水・飲料水を提供している。この内最も産業開発に関係の深い電力資源に中心をおいて述べてみよう。ネパールの地勢は、南部国境の海拔三〇〇mの、タライ地区から、僅か一六〇kmの間に北部国境の急峻な、海拔八、〇〇〇、九、〇〇〇mの、世界の最高峰ヒマラヤ山系になる。それ故、谷は深く、河川は急流で、しかもヒマラヤ山系の万年雪が第一次貯水池をなしているのである。比較的水量の年変化は少ないようである。

従って、電力資源として最も適しており、包蔵水力は膨大で、世界でも有数であると言われる。しかし、これらの水力は未だ殆どが開発されておらず、その調査すら充分には行なわれていない。これまでスイス・イギリス・インド・アメリカ・ソ連等の調査団が、数次にわたって調査を行なっている。雨量は勿論、水位・流量等、水力の開発計画樹立に必要な水利資料は皆無に等しく、又踏査に必要な地形図すらなく、その報告は概念的なものに止まっているが、ネパールの可能発電量は最小一、六〇〇万Kw以上だと言われる。この内スイス技師の調査したネパールの主要水系であるコシ、ガンダツキ、カルナリ川を中心とした報告書が参考になると考えるので紹介したい。しか

しこれとても勿論調査地点が限られており、充分とは言えない。

A コシ川水系

a サンコシ川に四つのダムを作って、水量調節をし、合計二三六万Kwの発電を行なうことが出来る。

b アルン川では勾配が急なため、貯水式発電の可能性がないので、水路式で二三六・五万Kwの発電が可能である。

c 他の五支流の内、タマール川は最も小さいので未調査、他の四支流から水路式の小水力発電二三万Kwの計画地点を挙げている。

B ガンダッキ川水系

a カリ川はマルシンディ川に合流する前で二・二万Kwの水力発電が可能であり、一九六〇年一九六二年とに日本水力開発調査団もこの地点を調査した。又リリ・バザンの屈曲部でもかなりの水力開発が可能である。

b セテ、マルシャンディ、ブリガンダッキ、及びトリスリ等の重要な支流に水力開発の可能性があり、それぞれ一万、五万、一万、一・八万Kwの発電可能開発地点を挙げている。いずれも水

路式である。

C カルナリ川水系

a カルナリの本流・支流のディラ川は急勾配で、中流部までは、数カ所、水路式の発電が可能である。

b カルナリ本流とセティ川合流点の下に、高さ一八〇mの高ダムを作れば、一六〇万Kwの莫大な発電を得ることができる。

c この放流を、さらにこの下流のベリイ川の合流点の下で、ダム式発電の可能地点を挙げている。

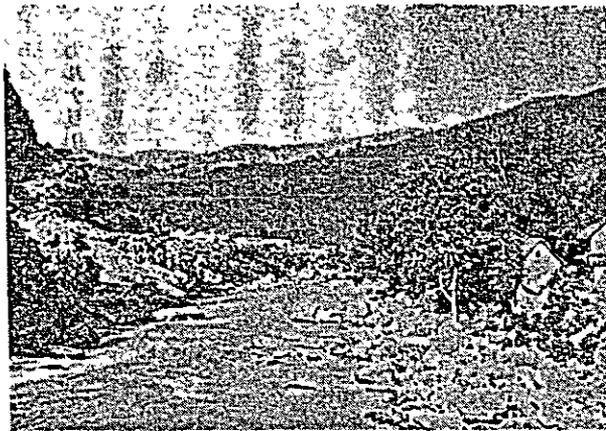
d スベリイ川はカルナリ本流と合流する前で、三〇〇平方キロメートルの流域があり、水力発電が可能であるが、資料がないため、包蔵水力は算定出来ない。

e 以上、現在算定出来る計画地点で、二七四・五万Kwの開発計画を提案している。

D ラプティ川、バグマテ川については水理資料や地形図等がないため、未調査である。

E 小水力

この国の到る所で考えられる小水力開発地点は、調査されたもののみで、二十九カ所、二万三、



トリスリ水力発電所道路建設工事（左岸）。トリスリ水力発電所は1965年に完成の予定である。カトマンズ～トリスリ間の道路は五カ年の歳月を費してやっとこの程完成した。出力18,000Kw。

八〇〇Kwとなっている。

しかし、これらの調査地点は極く限られた地点のみで、七四〇万Kwであり、これ以外にもまだまだ開発地点は多い。

現在のネパールは、これらを開発するための交通施設・開発資金・建設技術が充分でない。それ故、電源の開発の状況は極めて貧弱で、現在の電気があるのは首都カトマンズ、東部タライ地区の工業地帯ピラトナガール及びインドと首都カトマンズを結ぶ重要国境都市ビルガンジのみである。しかしその発電能力は極めて

小さく、需要をまかなうことは出来ない。その状況は次の通りである。

A カトマンズ地区		出力	型式	備考
a	水力発電	八〇〇Kw	ダム水路式	国営
		四〇〇Kw	水路式	"
b	内燃機発電	一、六〇〇Kw	ディーゼルエンジン四台	"
		五〇〇Kw	"	"
		二五〇Kw	"	"
B ピラトナガール地区				
a	水力発電	一、八〇〇Kw	ダム水路式	私営
b	内燃機発電	二、〇〇〇Kw	ディーゼルエンジン五台	"
C ビルガンジ地区				
a	水力発電	ナシ		
b	内燃機発電	二四〇Kw	ディーゼルエンジン四台	"

この内、国営のものは公益用に使用され、私営は自家用として産業用に使用される。公益用のものは首都カトマンズとその周辺地区しかなく、従って首都カトマンズを除いて、一般電灯用の電気がないので、ランプ・ロソク暮しである。しかし、首都カトマンズと言えども、約一五、〇〇〇戸に供給しているに過ぎないが、供給力が不足しており、ピーク時には電圧が著しく低下して、ロソクのあかり程度となる。それ故一一〇Vの電球と八〇Vの電球と二つ用意しておかなければならない。即ち市民が起きている需要の最も大きい九時頃までは電圧降下が著しいので八〇Vの電球をつけ、床に就いた九時以後は電圧が正常に復するので規定の一一〇Vにつけ変える。つけ変えないとすぐ中のヒラメントが飛んでしまう。初めの内はそのタイミングが分らず、電球代を随分使って無駄をした。参考までに国営の電気の電圧・サイクル・用途別を示すと次の通りである。

1 電圧及びサイクル

家庭用	一一〇V
	二二〇V
	二二〇V
産業用	二二〇V
	三三〇V
	五〇サイクル

2 用途別

家庭用 八〇%

産業用 一〇%

街灯その他 一〇%

3 電気料 1 kWh十円(この料金維持のため政府赤字保てん)

しかし、カトマンズ近くのトリスリ発電所一・八万wは、一九六五年に完成予定であり、これが完成すれば、カトマンズの需給状況は非常に良くなることだろう。しかしダム建設には道路から建設して行かなければならないから大変である。カトマンズ・トリスリ間の道路も五年越しでやっと完成したところである。ネパール政府は次の地区を工業地帯として開発する考えで次のように発電所を建設する計画を進めているようだ。

A カトマンズ地区

カトマンズの西に水仏で有名なバラジュの名所がある。付近にはビスヌマテイ川が流れていて、環境も良く工業地帯としては最適である。ここをカトマンズの工業地区と定め、既にスイスの援助で機械工場、ドイツの援助で家具工場を建設、更に皮のなめし工場を建設中である。今後計画中の

ものに印刷工場及び活字鋳造工場、陶磁器・合成樹脂の日用品、玩具工場、石けん工場、ビスケット工場等がある。これらについては、日本の機械と技術援助で建設したい意向で、筆者にも再三援助方について要請があった。

これに対する電力の供給計画は水力発電についてはインドの援助でトリスリの一八、〇〇〇Kw（ダム水路式）、ソ連の援助でペナウテイの二、〇〇〇Kw（ダム水路式）と内燃機発電についてはカトマンズにディゼルエンジン四台一、〇〇〇Kwの発電所を建設中で、既にペナウテイの水力発電所は完成し、工費百二〇ラック、一Kwh当り八〇・五円と言われる。日本に比較して三倍位の工費となり非常に高い。これは、道路の建設から初めなければならなかったためである。その他カトマンズとヒタウラ間に建設中の運搬用ロープウェイの原動力としてタロウ・コウラ計画があり、アメリカの援助で水力発電三六〇Kwを建設中である。

B ピラトナガル・ダラン地区

現在、東タライ地区にあるピラトナガルはネパールにおける工業の中心地でジュート、砂糖、綿紡織、さく油、ライス・ミル等の大工場がある。現在まだ具体的な計画はないが、この地区を大工業地帯に開発すべく、付近を流れているコシ川に、水力発電の建設を急いでいる。このダムはイ

インドとネパールとの協定に基づいて、インド政府が建設する多目的ダム（給水・灌漑・発電）で、最大出力は二〇、〇〇〇Kw、この内、一〇、〇〇〇Kwは無償でネパールに給与される。一九七〇年に完成する予定である。

C ポカラ地区

風光明媚なポカラ盆地を工業地帯とすべく、大きなヘワタール湖を利用して、出力一、〇〇〇Kwの水力発電をインドの技術援助でネパール政府が建設中であつたが、ダムは既に完成、ドイツに発注した発電機械が到着するのを待っている。このダムは、多目的ダムで発電と灌漑用に使用される。工費四十ラツク、一Kwh当り建設費六九・五円であると言われる。これも非常に高い。これはセメントその他の資材を、飛行機で運ばなければならなかつたからである。今インド国境のパイロワから、自動車道路を建設中である。

D ネパールガンジ地区

タライ地区西部の重要交易都市で、西ネパールから産出される原料と、インドで生産された製品との集散地である。

それ故、この地区を工業地帯にすべく、付近を流れるカルナリ川の水力発電計画を持っている。

しかしまだ建設には着手していない。

E ヒタウラ・ビルガンジ地区

タライ地区中央部の重要都市で、ヒタウラは米国の援助で大々的に開発されているラプティ・バレー計画の中心地であり、ビルガンジはカトマンズとインドを結ぶ道路の国境における重要都市である。それゆえ、ヒタウラに二、四〇〇Kw、ビルガンジに五〇〇Kwのディーゼル発電設備を建設しつつある。

以上がネパールの電源開発の現状であるが、これには長い年月と多額の経費を必要とするであろうから、これらの計画と並行して小水力発電が開発されるべきであろう。小水力発電について国内各所に好個の地点が数多くあるので、地方の需要に応じて適宜に開発されるべきであろう。この場合開発コストを安くするため、規格化した小水力ユニットの利用を考えることが賢明な策であろう。

また、水力を開発することにより、将来ネパールの国際収支を改善するために余剰電力をインド等に供給することも、一考に値するのではなからうか。しかし、これ等の解決には交通施設の開発・技術者の養成、開発資金の調達、資材の確保を如何にするかということが大きな問題であろう。困難な問題ではあるがこれらを解決することが先決問題である。

以上、資源の現状及び若干の問題点について述べたが、鉱物資源・電力資源の開発には、高度の技術・多額の経費・長い期間を要するので、長期的恒久対策としてこの開発計画を進め、これと並行して、少ない経費で短かい期間で開発の可能な動植物資源、小規模動力資源の開発計画を先ず応急対策として樹立すべきであろう。

特に鉱物資源は、採掘して行けばなくなってしまう、有限であるが動植物資源は再生産が可能で、無限であるばかりでなく、生産を増加することも可能である。そしてこれらの原料で生産を興し、輸出に向けて行くならば多くのネパール人に仕事の機会を与え、収入も増加し外貨を獲得する最も手近かな道となるであろう。しかしこれらも技術の導入・交通施設の開発がなければ、その効果を充分發揮することは困難であろう。

六 ネパールの工業の現状と将来

工業史家に好個の材料を提供

ラナ幕府は一九四六年から一九五一年まで約一世紀以上にわたる嚴重な鎖国政策をとってきた。このため国民は外国の文明から遮断され、新しい知識・技術を取り入れる機会がなかった。その上ラナ一族及びこれが奉仕者達は産業の振興民生の安定等は余りかえりみないで、私腹を肥やすことのみを専念した。このような訳で、工業は余り発達しなかった。一九五一年の民主革命によってラナ幕府が倒れ、王政復古が成しとげられて、初めて国を開き、外国の実状に接して、工業の余りにも立後れているのに驚いた。現在政府はネパール人を海外に派遣し、外国の専門家を招聘して、外国の知識技術を導入し、工業の開発に大童の状況で、丁度日本の明治維新当時に酷似している。しかし、このような環境の中にあつて美術工芸品のみはかなりの発展をとげている。即ち、ラナ幕府はその政權を維持するために、宗教を政治の具に供し、その習慣を嚴重に守らせたので、宗教文化は榮え、宗教具等の鋳造・彫刻及び寺院の建築等は非常に発達した。又ラナ一族及びこれが奉仕者達は貧困に苦しんでいる国民をよそに豪華な生活にふけり、勝手気ままな欲望を満たす為に、宝物・装身具等の製造、宮殿等の建築、これが裝飾品の製作等貴族的な奢侈品の生産が榮え、非生産的な面に貴重な財貨を費した。この為、しいたげられた一般大衆の苦しい生活の中にも、美に対する感覚、手先の器用さ、辛抱強さを作り上げ、華麗な芸術品その他を多く残しているが、しかしそ



ハンマーと金床だけで作った精巧な仏面
(銅製)

の反面生産的部門には見るべきものがない。そして、これらの製法は長い鎖国のために新しい技術を導入する機会がなく、極めて旧式で、太古時代のもをそのまま引き継いで来ており、新しい方式のものはほとんど見当たらない。これほど古い時代の製法がそのまま現在まで引継がれ、残っている

る国も少なからう。それ故、この方面の研究には好個の材料を豊富に提供してくれる興味深い国であると言えよう。その一端を生産様式・使用材料・動力・技術等の面から、その若干を瞥見してみよう。

銅器時代の感を抱かせる

先進国における生産様式の変遷を見ると、一つの物を（道具のみ使用して）一人で初めから終りまで仕上げていく太古に始まった手工業時代から、十六世紀頃、従業員が一定の作業場に集まり、まだ道具のみの手工業で、分業と協業により一つの物を作っていくマニファクチュア時代に移った。それから十八世紀の中頃に、英国が初めて動力として蒸気力を利用することに成功し、これに関連して諸種の産業機械の発明が相ついでなされて、生産力が飛躍的に増大し、いわゆる産業革命に発展した。これに刺激され、独逸・仏國・米國・日本・ソ連へと拡大し、相ついで産業革命が成し遂げられた。そして現在は工場制工業時代と言えるであろう。しかし、ネパールは未だマニファクチュアにも未だ充分発展しておらず、都会地に僅かを教えるのみで、ほとんどが原料の採取からその加工まで同一家族で行なわれ、物を作ることは農家の片手間仕事で、工業は農業と未だ完

全に分離せず、一般的にはいわゆる半農半工の家内工業的手工業時代と言えよう。都会地では工業は農業より不完全ながら分離独立し始め、独立した手工業も多くなりつつある。この中には間屋制手工業もある程度見受けられ、間屋から資本・原料を供給され、手工業者は値段をたたかれながら生産を続けている。これは日本の家内工業とよく似ているが、日本の場合より以上にたたかれていくように感ずる。一般的には生産は注文生産が多く、市場生産は少ない。又ラナ幕府時代には、都会地にギルド制度があつたようで、今でも親方は幅をきかしている。

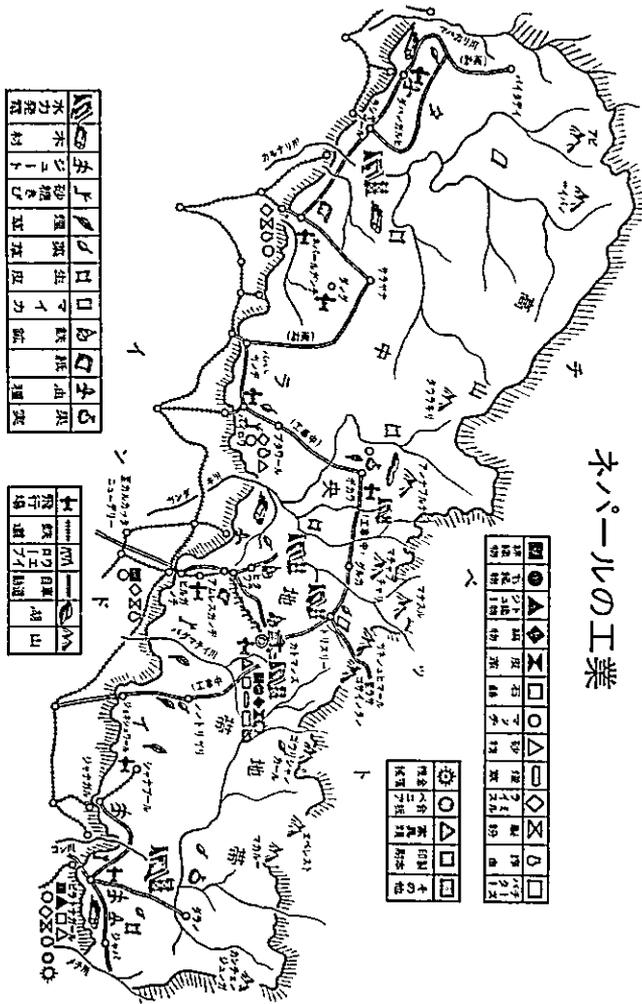
次に材料面から先進国の変遷の後を見ると、先ず石器時代から青銅器時代に移り、銅は太古から使用されていたが、十三世紀頃大規模製造が始まり、十六世紀頃、製煉に溶融法が採用されて、飛躍的發展をとげた。鉄も古くから使用されていたが、十四世紀頃から熔鉱炉を利用して、連続的に銑鉄を作るようになり、十九世紀の初め、熱風炉、十九世紀後半に、トーマス塩基性転炉法、シーメンス電気製鋼法等が相ついで發明され、真の意味の鉄器時代が来た。更に十九世紀後半、地殻中に最も多く存在するアルミの電気製煉法が完成し、第二次大戦中、航空機の発達につれて飛躍的な發展を遂げ、現在鉄器・アルミ器の華やかな時代と言えよう。しかし、ネパールでは日常生活に必要な食器・什器・道具等は今でも銅で作られたものがほとんどである。街に並んでいる菓子屋の菓

子入れ、パン屋（ネパールではパン木の葉に薬味をふりかけて売っている。これをネパール人は口の中に入れてグシャグシャ噛みながら楽しんでる。この国ではこれがチューインガムのようなものである。）の作業台、家庭を訪問したとき出てくる食器・什器等は皆銅製品で、ちよつとした町を歩いて見ても、どんな町にも多数の銅器製造業者はあふれている。カトマンズの近くにあるバタン市だけでも、三百軒ぐらいが軒を連ねていて、誠に壯観である。朝から晩までハンマーと金床だけでガンガンと鈍い音を響かせながら、色々な形の銅器造りをしている。じつとこれを見ていると、何時か遠い昔の銅器時代に飛び込んでしまったような錯覚に陥る。だからネパールでは何処に行っても、鉄やアルミで作ったものにお目見えすることはむずかしく、探すのに苦労する位で、ネパール全体が銅製品で埋まっているように思えてならなかった。こんなものを何故銅で作らねばならないかと、疑問さえ抱く位である。

筆者には、銅とその合金で作ったものが一番多く目に映って、銅器時代と言う感を抱かせたが、これは言い過ぎであろうか。

更に動力面では、人力時代から畜力・風力・水力時代を経て、初めて十八世紀蒸気力の利用によって動力革命が起り、次いで十九世紀更に発電力・石油力が利用されるに至った。そして現在原子

ネパールの工業



力時代に突入し、第二動力革命が行なわれようとしている。しかしネパールでは、畜力風力はもちろん、川の多いこの国でありながら水車も未だ余り利用されていない。機械器具を動かすのも人間の手や足による人力、物を運搬するのも人間の肩や頭による人力、基本的動力は専ら人間の肉体的力を利用している。一般的に言えば、未だネパールは人力時代であるという印象を強く受けた。

このような状況であるから、その製造技術・方法も極めて原始的であるが、次にその一端を紹介してみよう。

太古の製法がそのまま現存

(1) 織 物

紡績は全部手動で、先ず、弦を張ったりゆるめたりし、これに綿や毛を手ぎわよく当てていわゆるカーディングをやる。次に竹で作った櫛で繊維を揃え、いわゆるコーミングを行なう。それからいよいよ糸を紡ぐのであるが、これは日本の遠い昔にあった糸車と同じもので、コーミングした綿や毛を少しずつ手に持ち、片方の手で糸車を回しながらよりをかけて糸を紡ぐのである。家の形こそ違え、田舎の家庭で日なたぼっこをしながら、農婦達が糸を紡いでいる姿を見ると、ふと遠

い故国の昔が偲ばれて懐しくなる。だが紡いだ糸を見ると、あらくて太く、でこぼこの多い糸で、とても上等な織物は出来そうもない。

織布は先ず三十m位の間に四本の小さな棒を立て、二人の農婦が糸を巻いた棒を持って（整経木管に当る）行ったり来たり、何回も往復し、この四本の棒に糸を交互に捲きつけて、いわゆるワーピングする。それから、いよいよ織布が始まるが、四本の棒の内、一番端を先ず一方に取付け、他方の端は農婦の体にしばりつけて、中央の二本の棒を交互に上下させながら、シャトルではなくて、糸をまいた木管をそのままこの間に通して織って行く。

この原始的な方法は恐らく太古の時代に行なわれたのであろうが、能率は悪く、よほどの辛棒強さがなければ、とても出来る仕事ではない。しかし少し進歩したのも、日本の昔にあった足踏みの手ばたである。綜絢や篋を利用してあるだけは進歩である。

(2) 焼物

磁器・陶器に類するものの製造は行なわれておらず、専ら新石器時代におこった土器である。近くの田んぼから粘土を持ってきて、これに砂を適当に混ぜて、粘度を調節しながら、足で入念に練り、一昼夜位ねかせる。小さな食器類は原始的なロクロで、大きな水がめ・つぼ等は手で簡単な手

工具を使いながら成形してゆく。品物を焼くときは一切「カマ」は作らないで、庭に品物を積み上げ、その上に藁をかぶせて、いわゆる焼成が始まるのである。これは太古に行なわれていた野焼きである。太古時代の焼成方法が今もなおそのままに残っているのは恐らくこの国だけではなからうか。一昼夜位たつて取り出して見ると、焼成温度が低く、しかも一度焼きなので、素焼の状態である。その上土は鉄分が多く、出来上りは赤くて、筆者は日本の古墳時代にあった「埴輪」の焼物を連想した。

(3) 鋳物

鉄鋳物は全然製造設備がない。従つて鉄鋳造は行なわれていない。鋳物はほとんどすべてが銅か銅合金鋳物である。それ故、食器・什器類は銅及び銅合金の鋳物で作られたものが多い。その鋳型は全部仏像その他工芸品を作る場合に用いる、いわゆるインベストメント法で、どんな簡単なものでもこの方法で製造されている。

即ち型は全部密林に住む蜜蜂から取つたワックスで作り、木型その他の方法は知らない。先ず手で丁寧にワックスをこね回して一個ずつ形を作り、その上にこまかい砂を塗り、次に粗い砂、最後に粗がらと砂を混ぜたものを塗る。それから、これを日蔭で乾し、砂が乾いた頃これを熱して、中

の熔融したワックスを抜き取り、鋳型を作るのである。そして粘土で作ったひょうたん型のネパール独特のルツボを使い、木炭で銅地金を溶かし、その溶液をこの鋳型に流し込んで、品物を作るのである。

製品は一般に肉が厚い。それもその筈、銅及び銅合金の食器・什器類は家の財産で、金に困るとこれで金を借り、又はこれ売って金にかえる。この際、目方によって金額が決まる。それ故、肉の厚い程珍重される。

工業の経済的社会的地位は低い

次にこの国における工業の経済的社会的地位について少し考察してみたいが、工業の現状を知る資料はいくらさがしても業種別就業人口統計しか見当たらないので、これによって工場数工業生産額を推定する以外に方法がない。この統計によると、工業就業人口は約八万人で、総人口に対して一%弱、就業人口に対して約二%に相当し、その地位は極めて低く、就業人口の約九三%は農業に従事して生計を立てている農業国で、その後進性を如実に示している。

企業別に見ると、九九・九%までが家内工業及び小企業の手工業であり、大中企業は五〇工場に

満たない位である。家内工業及び小企業の従業員は一人十人まであるが家族従業者が主で、平均すると三人位になるであろう。賃金は極めて低く、ほとんどが出来高払いで、男子未経験者・女子・少年等は一日一ルピー（四五円）まで、中位の経験者で一日二ルピー（九〇円）、上位の経験者で一日三〜五ルピー（一三五〜二二五円）位で、一日五ルピーの収入を得る人は少ない。一カ月の稼働日数は、お祭りの多い国であるから極めて低く、しかも生産能力が低いので、従業員の月収は極めて少なくなる。その上農繁期となると、その期間中はほとんど休業に近い状態になるので、生産額も極めて低い。ここで一寸ネパール人の収入について一寸ふれ参考におこう。私の宿舎のメイドは、元王宮に勤めていた三十歳位の女であったが、月三〇ルピー（一、三五〇円）貰っていた。彼女には十歳位の子供があり、日本流に考えて余り安くて気の毒に思ったので、月収五十ルピーになる様にしてやったが、女の収入としてはこれでとても良い方だということだ。この収入で彼女は子供を学校に入れて教育し三人妻の一人（ネパールは一夫多妻である）であったので、主人に若干の金を（多分一〇ルピー以上だったと思う）差し出して、残りでひと月の生計を立てていた。又カトマンズに繊維関係の専門学校を作ろうということになり、筆者も委員となってネパール人と一緒に計画書を作成したときの話だが、計画書の中に盛られた人件費の部を見ると、校長三五〇

ルピー(一五、七五〇円)、教授二〇〇ルピー(九、〇〇〇円)、助教授一二五ルピー(五、七三五円)、事務長二二〇ルピー(五、四〇〇円)、会計係七五ルピー(三、三七五円)、事務係五五ルピー(二、四七五円)であった。これで果して生活が出来るだろうかといふかる向きもあるが、彼等は結構多数の家族を養って生活している。だから生活水準は極めて低い。しかし就業の機会が少ないこの国では、こんな安い賃金でも、いざ人を採用するとなるとワンサワンサと押しかけて来る。このような状態であるから、封建的なしきたりも仲々くずれそうもない。又今もって大家族制度が残っているが、その理由も分かるような気がする。そして現在ネパールでは豊富で低廉な労働力が新技術の採用をさまざまに工業の発展をはばんでいるが面白い現象である。

工業は簡単な軽工業のみ

工業の種類の主なるもの及びその現状を述べてみると、次のように重化学工業の範疇に入るものはほとんどなく、すべてが軽工業に類するものばかりで、この面でも典型的な後進性を示している。

(1) 繊維工業

綿・毛・ジュート関係の企業は少なく、生糸・化学繊維関係の企業はない。筆者のサゼクションで、最近日本から化学繊維を輸入して、靴下・シャツ等が生産され始めている。繊維関係の企業はほとんどが家内工業であるが、若干のマニファクチュアがあり、工場制工業としては中企業の綿紡織工場二（休止中）、毛紡績工場一、毛織布工場一（建設中）と、大企業のジュート紡織工場二があるのみである。

a 綿 紡 織 業

以前は綿の栽培が行なわれ、手紡によって糸を紡いでいたが、インドの機械紡績の発達につれて、品質・価格共にインド製品に太刀打出来ないで、ネパールの綿糸はインド製品に完全に征服された。現在綿の栽培・手紡は完全に衰微し、インドからヤーンを買って、足踏手ばたで織布のみ行なっている。しかもこれらの製品は粗布のみで、上等の綿布は全部インドから輸入されている。又粗布の生産数量も微々たるもので、相当数量が輸入され、總体的に言ってネパールの綿布需要の約八五%はインドに依存していると言われる。現状のままでは、この織布工業もやがて品質・価格の点で完全にインド製品に征服される日がくるのではないだろうか。既にインドに接し、交通の便利なタライ地区には、インド製品がはらんして、ネパール製品は見当らない。

インドも又、ヤーンの割高・綿布の割安政策を採って、ネパールを自国製品のはけ口にすべく努めているように思える。綿布輸入額は年約五〇億円と言われ、この対策はネパールにとって大きな問題の一つであろう。なお第二次大戦前までは、日本の繊維製品がネパールの市場を独占していた。

b 毛 紡 織 業

羊毛は豊富であるから、手紡車による原始的な手紡が行なわれ、足踏手動式の手ばたで毛織物が生産されている。これらはすべて家内工業及び小企業で、各地に多数散在している。しかし第一次五カ年計画によって、カトマンズに中規模の機械工場が、西独の援助で設立され、近代的な新しい機械が設備されていた。これに反し力織機工場も中規模の工場が建設されつつあるが、この力織機は全部日本製のあまりよくない中古機械が持ち込まれていた。現在毛織物の生産は極めて低く、製品も粗布の域を脱しておらず、羊毛の八五%位は原料のままにインドに輸出され、逆に製品はネパールの需要の九〇%位が輸入されていると言われる。その上インドの繊維工業の発展につれて、綿製品と同様に価格の安い比較的品质の良いインド製品がネパール市場に流入しつつあり、現状のままでは、ネパールの毛紡織工業もやがてインド製品によって征服される時が来るであろう、そし

て多くの人々が職を奪われてゆくことになるのではあるまいか。原料を持つ国として、とりわけ世界でも有名なカシミヤ羊毛の産地として、毛紡織工業の振興を計り、国内需要はもちろんのこと、輸出産業としても何らか強力な手が打たれなければなるまい。

日本では設備制限のため、休止中の余分な紡織機械がかなりあるように見受けられる。若しこれらの機械をスクラップにする位なら、この貧しい国の人々の幸福のために、事情の許す限り、これらの機械を少しでも与えてやりたいような衝動にかられた。

c ジュート紡織業

インドに近接するタライ地区は、ジュートの栽培に適し、豊富な原料を提供している。それ故東部タライのピラトナガルに大規模なジュート工場が二工場ある。従業員はそれぞれ三、〇〇〇人、一、五〇〇人であり、昼夜三交代で、ヘッサン・クロスやバッグを生産している。これらの製品は全部輸出に振り向けられ、ネパールにおける重要輸出品となっている。これらの工場の機械設備は保守管理が悪く、相当老朽化しており、生産管理も余り良くなく、生産性も低い。それでも相当利潤をあげているようだ。

ジュート産業は有利な立地条件を持っているので、今後共大いに奨励されるべきであろう。

d 染色業

以前は植物染料を使って染色していたが、現在はすべて化学染料をインドから輸入している。機械染色設備はなく、手動的器具を使って染色している。染色方法は主として丸染とスクリーン・プリンティングとブロック・プリンティングの捺染である。丸染は主として紡織業者の兼業が、スクリーン・プリンティング、ブロック・プリンティングは専業が多く、これらは全部家内工業及び小企業である。現在価格が安く品質のよい機械捺染による柄物のインド製品がネパールの市場に押寄せているので、この業界も衰微の一途をたどりつつある。若し近代的設備を持ち、生地だけを輸入して、ネパールで染色すれば、それだけでも莫大な外貨の節約になると考えられる。

e カーペット及びマット製造業

羊毛・綿・麻類を使ったカーペット及びマットの製造が、手ばたを使い、家内工業で行なわれている。ジユムラを初め山間部が主な生産地であるが、生産量も事業場も余り多くない。

製品は品質・デザインに共にベルシャ（イラン）やインドのものに比べて劣る。輸出品として格好な商品であるから、豊富で良質な羊毛を使い、品質・デザイン・製造方法を改善して、輸出産業として育成すべきであろう。

f ホゼリー製造業

靴下・マフラー・ショール・スエーター等のホゼリー製品を手動用の編機を使って生産している。編機はインド製で、その性能は日本製に比べるとはるかに劣るが、インド製編機のメリヤス針は全部日本製のものを使用している。又補修用のメリヤス針は西ドイツ・中共からも輸入していたが、使用してみて日本製品が一番良いので、今は全部日本から輸入している。この企業は最近普及したもので、生産地はカトマンズに限られ、企業規模は家内工業又は小企業である。原料は綿糸・毛糸・化学繊維糸を使用し、綿糸・毛糸はインドから、化学繊維糸は日本（T社）から輸入している。靴下は品質デザイン共もう一息というところであるが、カトマンズ盆地内は自給出来る程度になりつつある。マフラー・ショール・スエーター等は、品質・デザイン共まだまだ改善の余地があり、生産数量も少なく、需要のほとんどをインドから輸入している。手先が器用で辛抱強いネパール人に、日本の優秀な編機を使用させ、デザインを指導したら、優秀な製品を生産することも可能であろう。特に、ヒマラヤ山麓で飼育した山羊から取ったカシミアと称する羊毛で作った製品は、輸出品として世界の好評を博することになるだろう。

g 裁縫及び刺しゅう業

この国には裁縫業が実に多い。これは日本のように各家庭で衣類を作るようなことはしないで、裁縫師というカーストがあつて、そのカーストのやる職業となつてゐるからであらう。そしてこれらの裁縫業者はミシンを一台〜一〇台、平均すると二台位おいてゐる。それだから保有台数ははつきりつかめないが、かなり多いものと思われる。このミシンはほとんどがインドのウシヤ社製品で、この中に一部シンガー・ミシンがいくこんでゐる。そして両社の支店がカトマンズの目抜き通りにでんと店を構え、あらゆるサービスをしており、特にシンガー・ミシンがこの国まで進出しているのには驚いた。インド製のミシンは日本製のものに比べ、品質は劣り、逆に価格は高く、一・五倍位である。ネパール人は日本なら既にお払い箱になつてゐるような古いミシンを使って、手さばきも良く、仕立も仲々うまい。これは長い伝統と手先の器用によるものであらう。将来うまく指導して縫製品でも作らせれば、有望な輸出品となりそうである。又刺しゅうも手先が器用で辛抱強いネパール人に適し、立派なものを作つており、将来有望な輸出品となるであらう。現在このようなハンドクラフト的なものは大いに伸ばして行く必要があるであらう。刺しゅうは丸い輪に布をはめて、針一本で、昔日本でやつていたような旧式なやり方である。これにも日本の新しい刺しゅう用器具を紹介してやりたいものである。

家内工業中央訓練所に、ホゼリー科・裁縫科がある。ここに日本製の編機・ミシン及び刺しゅう器具を若干寄贈してやりたい。このことはささやかではあるが、ネパール人に与える効果は大きく日本の暖い贈物は深い感銘を与えることだろう。それと同時にこれがきっかけとなり、将来この国への輸出の突破口が出来るかもしれない。

(2) 窯 業

ガラス及びガラス製品製造業、セメント製造業等はなく、小企業・家内工業として煉瓦・瓦製造業・陶磁器（土器）製造業が全国各地に多数散在している程度であるが、近く中共の援助で、近代的なセメント工場が建設される予定である。

a 煉瓦・瓦製造業

家屋のほとんどが煉瓦作りである。又道路の舗装も、コンクリートになるまで、ほとんどが煉瓦でなされていた。四階建の煉瓦作りの家が立ち並び、真赤な煉瓦を敷きつめた裏道を歩いているとどこか西欧の中世のにおいがする。煉瓦・瓦作りは古い伝統を持っており、盛んで立派な技術を受けついでいる。煉瓦・瓦作りは、炉を粘土のある所に建設し、粘土がなくなると次々と場所を移動して行く。山間部は燃料として木材と亜炭しか利用出来ないで製品はもろいが、インドに近接し

たタライ地区は、燃料として石炭が利用出来るので、上等の煉瓦・瓦を作っている。

b 陶磁器製造業

陶磁器というよりも土器である。都会・農村を問わず、土器を製造するカーストが集団で住んでおり、半農半工の家内工業で製造が行なわれ、その数も多く、カトマンズの近くのテイミでは、約七〇〇軒の製陶屋がいる。そしてこれらは主として什器類を作っている。田んぼから取って来た粘土をロクロか手で直接成形し、「カマ」は作らないで、野原に製品を積み重ね、藁をかぶせて焼くいわゆる太古時代の野焼きが現在までそのまま伝えられてきているのである。燃料は藁で、焼成温度が低く、一度焼きであるので、出来上り品は一種の素焼状を呈し、たたけば濁音を発し、もろく、その上鉄分の多い粘土を使っているので、赤く、粗悪品である。それ故陶磁器は、すべてインドその他の国から輸入されている。日本の陶磁器もかなり店頭に陳列されているが、インド製品は安かろう悪かろう、日本製品は少し高いが品質はとも良いというのが通り相場になっている。この国の陶磁器工業を振興するためには、まず原料の研究、次いで成形、特に焼成の研究が必要であろう。日本の機械設備と技術援助で、陶磁器工場を作りたいと相談を受けたが、何といても、良質の原料があるかどうかのめどがつかなければ、手が出せないと思われる。

(2) 製紙業

原料は豊富である。木材以外の資源も豊富で、ほとんどがインドに輸出されている。ネパールには、機械製紙工場は一工場もなく、手漉紙を山間部の河のほとりで作っているのみで、その製法は日本の手漉和紙の製法と全く同じである。又、カトマンズでは、屑紙を回収して再生紙を作っている。しかし紙の生産量は極めて少なく、インドからほとんどが輸入されており、紙は貴重品である。それ故、包装紙などはほとんどを木の葉で代用し、幅広い大きな木の葉を山から売りに来て、市が立つ。開国後、教育熱が盛んになり、又文化も徐々に滲透しつつあり、紙の需要は急激に増加している。製紙業振興の必要に迫られている。中共の援助で、ネパールガンジに豊富な木材と、サバイ・グラスを原料とする近代工場が建設されることになり、その基礎調査は完了した、手漉紙の近代化と共に、機械製紙の振興を国内向け及び輸出産業として考慮すべきであろう。

(4) 皮革業

生皮は豊富であるが、原始的な鞣し方しか知らないで、靴の底革等の下級品のみしか鞣すことができず、ほとんどは生皮のままインドに輸出されている。そして鞣された革は、逆にインドから輸入し、主として靴を作っている。靴を作るカーストは非可触賤民で、多数が田舎に集団で居住し、

家内工業で収入も少なく、細々と暮している。加工方法は、靴の上皮だけマシン掛けし、後は全部手縫いであるが、製品は余りよくない。従って、インド製の機械加工による良い品質の靴が、安価でネパール市場に回っており、インド製品と競争できず、転業者が続出している。原皮の豊富な国であるから、まず近代的な鞣工場を建設し、靴製造業者を組織化し、製造機械を導入して、靴はもちろん、その他の革製品の製造を指導し、原料輸出から製品輸出に転換すべきであろう。

(5) 化学工業

化学工業の基本をなす酸・アルカリ製造業はもちろん、石油精製工場も、肥料製造工場もない。又、ゴム・樹脂・染料・塗料等の有機化学工業もなきに等しい程度で、中小規模の石鹼工場十二と、マッチ工場五があるのみである。

a 石鹼製造業

ネパールは、家屋の状況から衣類がよれ易く、又毎朝ベイジイングをする習慣があるので、石鹼はネパール人の生活必需品で、その需要は大きい。それ故、石鹼工場数はピラトナガルに五、ラリタプールに四、カトマンズに二、バクタプールに一がある。しかし中小企業で、生産能力は極めて低く、衣類の洗濯用石鹼の一部が、ココナット等の植物油を原料として製造されているに過ぎ

ない。それゆえ、化粧用石鹼は全部、洗濯用石鹼は85%以上をインド製品に依存している。原料油はかなり生産され、原料のまま輸出されているので、国内需要は自国生産でまかなえるよう、石鹼工業の振興を計るべきであろう。

b マッチ製造業

ビラトナガール、ビルガンジ、パイロワ、ネパールガンジ、ポカラにそれぞれ一工場ずつマッチ工場がある。ネパールガンジの工場は最近建設されたばかりで、まだ製品は市場に出していない。又ポカラの工場は休止中である。

これらの機械設備は全部日本製である。軸木は豊富なシマルという軟木を使用し、薬品類のみインドから輸入している。製品はかなりのところまでできてはいるが、インド製品には劣る。電気が普及していないので需要が大きく、まだマッチの国内需要を満たすに至っていないで、インドから多量のマッチを輸入している。まず既存工場の生産合理化・生産性の向上等による増産を指導する必要がある。

(6) 煙草製造業

ネパール人は煙草好きで、子供までがうまそうに喫っている。それ故、需要は大きいが、原料の

煙草の葉はほとんどインドに輸出し、製品の煙草を多量にインドから輸入している。

その金額は、輸入金額の中で大きな地位を占めている。ネパールには巻煙草工場一と、木の葉で作ったピジと呼ぶ煙草を作る工場が数工場ある。規模も小さく、需要の数を満たすに過ぎないようである。その上、味が悪くて、我々にはとても喫えない。それ故、ネパール人もインド製の煙草を愛用する。しかし、余り経済的に豊かでない人々は水煙草を好んで愛用し、又一本の煙草を数人が分けて喫う習慣が自ずと生まれ、ネパール独特のラツパ式喫い方が編み出され、煙草の吸い口に直接口をつけない。

この現状にかんがみて、ソ連はネパールの煙草の葉を使う近代的な工場を作り、ネパールに贈与することとなっている。これによりネパールは莫大な外貨を節約することになり、大きな恩恵に浴することになる。

(7) 砂糖製造業

タライ地区はさとうきびの栽培に適し、ピラトナガール、ブタワールに近代的な工場がそれぞれ一工場建設されている。しかし、その地方だけの需要を満たすに過ぎず、他の地区の需要は満たすことが出来ないで、農民はさとうきびから未精製の黒砂糖を原始的な方法で作っている。とりわけネ

パール人は砂糖を好んで愛用するから、絶対量が不足し、インドから多量の砂糖を輸入せざるを得ない。それ故、政府は砂糖の嚴重な輸入統制を行なっている。このため中共は、近代的な工場をタライ地区に建設すべく準備を進めている。

K 食料品工業

ソース・ケチャップ等の調味料製造業・澱粉製造業・畜産品加工業・清涼飲料製造業、缶詰・塩詰製造業はもちろん製茶業もない。大・中企業として精穀業・製粉業・搾油業²³（精穀・製粉・搾油は同一工場で行なっている）チーズ・バター工場一があるのみで、このほかには小企業又は家内工業のビスケット製造業・酒類製造業が若干あるに過ぎない。

u 穀類加工業

米は需給に若干の余裕があるが、交通が未発達で、国内輸送が困難なため、肥沃な農耕地であるタライ地区では、とれた米を蒸煮し、乾燥し、これをライス・ミルで粃がらを除去・精白してインドに輸出している。それ故タライ地区には大小のライス・ミル工場が二十数工場もある。これらの工場で粉米・糠等が相当量出来るが、この用途につき充分な研究がなされていない。

小麦粉は食料としての需要もかなりあり、ライス・ミルの工場の一部で製粉がなされているが、

山間部では小規模の水車で石臼を回し、製粉がなされている。しかし生産能力は小さく、需要を満たすことが出来ないで、相当量をインドの輸入に頼っている。小型製粉機の普及及び近代的な工場の建設も必要であろう。

b 榨油業

マスタード、リンシード、菜種、胡麻等の生産地であるタライ地区には、大小の機械榨油工場が二十数工場あるが、機械はインド製で既に老朽化し、ガタガタである。製品は交通の関係でほとんどがインドに輸出されているが、原料のままでもかなりインドに輸出されている。

それ故国内需要を満たすことが出来ず、農村では原始的な石臼を使って搾油している。小型搾油機の普及及びタライ地区榨油工場の近代化が必要であろう。又、これらの植物油を原料とする油脂製品製造業も考慮するべきであろう。

c 酪農業

ネパールは家畜を多く飼育し、乳が豊富である。

カトマンズにはスイスの援助で、バターやチーズの近代的な工場が建設され、既に良質なものが生産されている。将来輸出をねらっているが、現在まだ輸出までには至っていない。

又、山間部では家内工業で、ミルクからバターを原始的な方法で作り、更にバターからギーと称する食用油脂を作っている。主な集散地としてネパールガンジは特に有名で、インドにも多量に輸出されている。インド、ネパールではクッキングになくはならないものであるから、近代的な技術を取り入れて、生産方法の改善が必要となるう。

d ビスケット製造業

ネパールでは菓子類に乏しく、ビスケットが最も愛用されている。丸いカマを作って、原始的な方法でビスケットを焼いているが、家内工業で数も少なく、需要を満たすだけ生産することは出来ない。それ故インドから大企業製品のビスケットが多量に輸入されている。カトマンズにビスケットの近代的な工場を、日本の機械と技術の援助で建設したいと、筆者にも相談があったので、日本の関係方面にも連絡しておいた。

このような工場が一カ所設置されて、うまく行けば各地に設置の可能性があり、輸出振興にもなると思われる。

e 醸造業

大きな醸造業はない。酒は普通どこの家庭でも作っている。酒作りは女の仕事で、嫁入りの条件

の一つになっており、女は嫁入前に家庭で充分しこまれる。しかしその方法は誠に原始的である。古い文献によると、日本ばかりでなく、どの先進国も、初めは女が酒を作り、管理していたようだが、そうすると、ネパールは差当たり、その当時の状態のままにあることになる。酒は主として米で作られているが、これは日本とよく似ている。酒には清酒と濁酒とがある。清酒はネパーリー・ロキシーと呼ばれ、アルコールの含有量は八十度以上と言われ、試みに火をつけると、青白い焰をあげてもえる。しかし、味は甘口で、おいしく、飲み易いので、日本人には喜ばれるが、余り飲み過ぎると足を取られるから注意が肝要である。

濁酒は、終戦直後日本にあった「どぶろく」である。これをネパール人はネパーリー・ビアーと呼んでいる。筆者もネパールに行つて間もなく、ネパールに招待され、酒とビールとどちらにするかと聞かれ、ビールが飲みたいと言ったら、真白い「どぶろく」が出てびっくりしたが、日本の昔が思い出されてなつかしく感じた。酒は何処の国でも嗜好品として必要なものであるから、新技術を取り入れて、品質の向上・酒作りの近代化等も必要なことであろう。

(9) 機械金属工業

金属工業は、鉄・銅その他の鉱物を既になら発見しているが、製錬業は一つもない。家内工業

及び小企業として銅及び銅合金鑄物業・板金加工業・鍛冶業があるのみで、鉄・軽合金鑄物業及び工場制金属加工業はない。

機械工業は、電力設備のある小規模の簡単な機械加工業及び自動車の修理業が若干あるが、中規模としてはピラトナガールのジュート紡織工場に付属機械工場一及びカトマンズにスイスの援助による機械工場一あるのみである。

a 機械加工業

機械加工業は最も遅れている部門に属し、動力を使う機械加工工場はカトマンズ、ピラトナガール、ビルガンジに数工場あるのにすぎない。しかも一応の金属加工機械は持っているが、陳腐化した機械ばかりである。それ故、産業用その他機械が破損故障した時は大変である。修理工場がない処ではインドに依存しているので、修理に相当の時間を要し、その間は休業となる。最近カトマンズには、スイスの援助で機械の修理及び簡単な機械も製作出来る機械工場が設立された。又カトマンズインド間の舗装自動車道路が完成され、自動車は急激に増加しつつあるので、ドイツ人の自動車修理工場が設立され、又近くドイツ政府の援助による自動車修理訓練所が設立されることになっている。

b 鑄物業

鑄物業は鉄鑄物業はなく、銅及び銅合金鑄物業のみで、主として仏像及び仏具・什器類及び家具建築金物類を作っているが、その数は多い。すべて家内工場又は小企業で都市に集中している。カトマンズ、バターンは仏像及び仏具及び什器類を多く産し、他の都市では什器類の生産が主体である。このようにして鉄鑄物工場のないこの国では、機械のフレーム等は堅い木材を使い、木製の機械が多い。銅鑄物はすべて仏像等の工芸品を製作するときに使用されるインベストメント法で鋳型を作り、木型は使用しない。炉も原始的で燃料に木炭を使用している。鉄鑄物工の設置と鑄物技術の導入が必要であろう。

c 鍛造業

鍛造業は農具・刃物・什器等の生産のため、都市はもちろんのこと農村にも多数存在している。

すべて家内工業で日本で言う野鍛治の類であり、羊の皮で作った大きなファイゴを設け、木炭を燃料とし、金床とハンマーのみで作業している。材料の鉄は鉄鉱が発見されているにもかかわらず、溶鉱炉は一本もなく、すべてインドからシャーされた鉄片が輸入され、店頭で売買されている。農

民の多いネパールでは、簡単な農具の生産工場及び家庭必需品の刃物・什器等の生産工場は、考慮されてもよいのではなからうか。

c 鋳金加工業

鋳金加工については主として仏具・土産物品・什器・トランクが作られている。

仏具・土産物品・什器は銅及び銅合金鋳を使用し、トランクのみ薄鉄鋳を使用し、薄鉄鋳はミスロール品と思われるような粗悪品である。加工方法はすべて手加工で、ハンマーと金床とで、フォークやスプーンの類であろうが、鍋・釜の類であろうが、トランクであろうが、辛棒強くこつこつと時間をかけて作りあげていく。それ故、機械プレスのごときものは、まだ一台もない。鋳金技術及び簡単な鋳金加工機械器具等の導入が必要であらう。

(10) 製材及び木竹製品製造業

豊富な木竹材はまだ充分利用されず、中企業としては製材工場一、ベニヤ・合板製造工場一、建具及び家具製造工場が数工場あるに過ぎない。

a 製材業

製材工場は国境のインド側に建設され、インド人の手により、ネパールの豊富な木材が製材され

ている。従ってネパールは木材のまま輸出し、インド側で製材されたものを輸入している。それ故森林国でありながら、木材の価格は高い。このためヒタウラにアメリカの援助により製材工場が建設され、これがためカトマンズの木材価格は若干下り、木材事情は少しばかりよくなったようだが、一工場では焼石に水で、木材の産地に製材工場の建設が要望されている。

b ベニヤ・合板製造業

ベニヤ・合板に適する木材が豊富にある。それ故、ピラトナガールに中規模のベニヤ・合板製造工場が一工場建設されている。機械は全部アメリカ製であったが、現在休止中である。森林国ネパールでは将来このようなベニヤ・合板・繊維板等の木製品工業は大いに振興していかねばならない産業ではなからうか。

c 建具及び家具製造業

建具及び家具製造業者は家内工業及び小企業のもものが多数存在する。カトマンズでは、動力掛けの木工機械を持っている工場が数工場あるが、カトマンズ以外の地方では木工用器具だけを使用して生産している。それ故、製品は粗悪である。

家具に適する木材は豊富であるから、技術の指導をすれば、立派な家具・建具を作り出すことは

可能である。最近ドイツの援助で、近代的な家具工場がカトマンズに建設された。又質の良い木材も豊富だから、家具以外の木製什器・工芸品等の製作を指導したら、手先の器用さと相まって立派な輸出品を作り出すことであろう。

又竹及び籐類も豊富であるから、カゴ・腰掛け等の竹・籐製品の製造も行なわれているが、製品は極めて幼稚である。竹・籐製品の技術指導をして、輸出用に振り向ける工夫もなされなければならぬだろう。

(11) 象牙その他工芸品製造業

ネワール人(カトマンズに古くから住んでいる種族)は宗教文化の影響を受け、石・木・クレイ・象牙等の彫刻に伝統的な技術を持っている。これらの彫刻師は主としてカトマンズ盆地に居住し、最近では観光用の土産品を生産し、旅行者に好評を博している。この技術を有効に生かして、輸出品の生産を奨励すべきではなからうか。

(12) ブラシ製造業

牛・馬・豚の毛を使ってブラシが作られているが、植毛機はないのですべて手で作られている。製造業者は余り多くないが、近代的な製造技術を取入れれば、輸出産業として伸ばすことが出来よ

う。

(13) 印刷製本業

印刷製本業はカトマンズ以外には余り見かけない。カトマンズには約二十工場あるが、大体印刷機械一、二台位の所が多い。この印刷機械は日本製が約六十%を占め、次にドイツ・英国製の順となっている。開国後、教育熱が盛んになり、文化もおいおい発展してきており、印刷製本の需要は大きい。しかし、教科書のような多量注文になると、ネパールでは価格その他の点でインドにたちうち出来ない現状にあるので、インドへの注文を余儀なくされている。又活字の鋳造工場はなく、すべてをカルカッタに依存しているので、非常な不便を感じている。それ故、日本の機械・技術の援助で、モデル印刷工場・活字鋳造工場を建てたい意向で筆者に相談があり、関係方面に連絡しておいた。近く関係業者が視察に出掛けることになった模様である。

工業開発の努力と目標

以上述べたように、工業は非常に遅れた段階にあり、生産能力も極めて低い。政府は増加人口に対応して生活水準の向上を計り、国家の発展に資するためには工業の振興以外にないことを深く自

兌し、第一次五カ年計画（一九五七～一九六二）を樹立して、これを実施中である。この第一次五カ年計画では、工業の基礎固めに重点がおかれている。工業を振興する政府機構としては商工省があり、この内に工業局と商業局の二局がある。第一次五カ年計画で、工業局の下に中・小家内工業振興部（中企業は、日本の小企業の範疇に入る）と、工業開発公社が設立された。中・小家内工業振興部は既存工業のほとんどを占める小家内工業の振興に当たるもので、これらの振興計画を樹立し、実施している。このため資金の貸与斡旋、原料・副資材及び機械設備の貸与・購入斡旋、技術の訓練指導、市場の開拓等を行なっている。これらを実施するために、この下に更に技術訓練所とエンポリウムを持っている。技術訓練所は技術の訓練と生産を兼ね行ない、首都カトマンズに中央機関があり、地方に約二十カ所の支部機関を持ち、この訓練所を中心に、小家内工業振興の手掛としている。

又、エンポリウムは、資金・原材料・機械設備の貸与斡旋・市場開拓の実際面を担当している。

工業開発公社は大・中企業の振興に当るもので、大・中企業の振興計画を樹立し、実施している。このために、基礎調査・環境の整備又資金の貸与斡旋・原料副資材及び機械設備の購入斡旋技

術の指導援助等を行なっている。

ネパールで特に将来有望と認められる工業は次のようなもので、特に海外からの投資による開発を歓迎している。

- (1) 毛紡織業 (2) ジュート紡織業 (3) 製紙業 (4) 皮革業 (5) 砂糖製造業 (6) 製茶業 (7) 缶詰製造業
- (8) 煙草製造業 (9) 酪農業 (10) 榨油業 (11) セメント製造業 (12) 製材及び木竹製品製造業 (13) 時計及びその他精密工業 (14) 工芸品製造業

この内、製茶業・セメント製造業・時計及びその他精密工業以外は前述したので、説明を省略し、前記三つ業種について若干説明しておく。

(1) 製茶業

ダージリン茶として世界的に有名な茶の産地ダージリンに近接したネパール東部中央地帯は、茶をかなり栽培していたが、今は衰微している。一般的にネパール中央地帯は気候条件が茶の栽培に適するかと思われるので、製茶業は有望であろう。国内需要及び輸出産業として奨励されるべきであらう。

(2) セメント製造業

主原料としての石灰石が豊富に埋蔵されている。建築資材としてセメントの需要が増加しつつあり、又、道路・飛行場・ダム・灌漑水路等に多量の需要があり、毎年相当量をインド・中共等から輸入している。日本にも多量の引合いがあったが、不成功に終わっている。これらの大きな需要を充足するために、セメント工場の建設が要望されよう。

現在、ソ連の援助で近代的なセメント工場の建設が決定している。

(3) 時計工業等の精密工業

ネパールの中央地帯はスイスと地理的気候的条件が似ていると言われる。原材料を余り必要としないで、ネパール人の手先の器用さと辛抱強さを生かすことの出来る時計工業等の精密工業も有望であろう。

これらの工業を振興するために諸種の立地条件に検討を加えた上、次の地区が将来の工業地帯として適当ではないかと考えられ、環境の整備に努力し、特に電力交通の開発に力を注がなければならないまい。

しかし資本技術の乏しいこの国では、これらの工業を一度に建設することは非常に困難と思われるので、輸入数量が多く必要度の高いもの、原料もあり、比較的生産も容易なもの、又輸出産業と

して競争力のあるもの等、更にこれらの経済効果を勘案して優先度を決め、工業建設が行なわれなければならない。又、工業開発のための隘路となっているものは、主として次の点が指摘されようから、官民の理解と協力のもとに、これらの改善も積極的に推進しなければならぬ。

- (1) 交通施設の未発達 (2) 動力資源の未開発 (3) 技術の不足 (4) 社会制度の後進性 (5) 資本の欠乏
(6) 市場の狭隘 (7) 行政技術の貧弱 (8) インド製品との競合

この内、資本・技術については受入態勢を整備して、外国の投資・援助を積極的に呼びかけるべきであろう。特に現在困難な問題の一つはインド製品との競合問題である。それはネパール製品に比べて安くて品質の良い工場制工業のインド製品がネパールの市場に浸透し始め、逐次ネパール製品はインド製品に征服されつつあり、インドと競合するネパール工業、特に家内工業的手工業はインド製品と競争出来ず、衰微しつつあることである。それ故、新規企業の振興策と共に、多数現存する家内工業をいかに振興して行くかという既存企業の振興策を充分考究して行かなければならぬ。

これには日本の中小企業振興策の中から、取捨選択し、この国の現状にアプライ出来るものを取りあげて、実施することが最も適した策であると思われる。特に教育程度の低いこの国では、モデ

地区	地理的条件		社会的条件							
	地形	気候	原料	動力	燃料	水	労働力	交通	市場	
ピラトナガール	タライ地区 平 坦	夏 暑・温 冬 寒・乾	羊毛・植物実草毛皮等 きとらジュート 油 穀 果 煙 羊 原 木	電力利用可 (20,000 kW) (ダム建設中)	炭 石 利用可	コシ川等 豊 富	豊 富 低れん	鉄 道 自動車	国内、 下 等	
				電力利用可 (18,000 kW) (ダム建設中)						
ピルガレンジ	"	"	羊毛・植物実草毛皮等 原 羊 煙 果 木	電力利用可 (容量小)	"	利用可	"	"	"	
ネパールガンジ	"	"	羊毛・植物実草毛皮等 原 羊 煙 果 木	ダム建設 計 画 中	"	カルナリ カ川 豊 富	"	"	"	
カトマンズ	中央地帯 盆地平坦	良	羊毛・植物実草毛皮等 原 羊 煙 果 木	電力利用可 (18,000 kW) (ダム建設中)	不 使 (御高)	パクマ 4川	"	鉄 道 自動車 ローエイ	"	
				電力利用可 (容量小)						
ボカラ	"	稍 良	羊毛・植物実草毛皮等 原 羊 煙 果 木	電力利用可 (容量小)	"	ヘルター 湖 等 富	"	鉄 道 自動車 ローエイ	"	
備 考	その他ヒタクラ、ジナナール、パイロワ、カイラリ等が将来の工業地区として挙げられよう。									

ル・ブランド、モデル工業村等を作り、デモンストレーションによりこれらを振興して行くことも賢明な策であろう。

ネパールは豊富な動・植・鉱物質源と動力資源を持ち、更に勤勉で手先の器用な労働力を持っている。交通が発達し、この豊富な原料・動力資源が開発され、近代的技術が導入され、教育による労働力の質的向上がなされたなら、東洋のスイスになるであろうことは疑いを入れないところである。日本人と間違うようなネパール人は日本人に非常に親近感を持ち、信頼と尊敬を寄せており、「日本のような優れた国がアジアにあることは我々アジア人の誇りである。」と言う。親日的で、日本に大きな期待を抱いているこの国の工業開発に、事情の許す限り協力してやりたいものである。

七 貿易とその動向

昔は日本製品が市場を独占

ネパールは地理的關係で古くからインド及びチベットの兩隣接國と物々交換の形で貿易が営まれていた。一七六九年、現在のシャハ王朝によって國が統一される一方一六〇二年、インドに設立された英國の東インド会社が東洋における貿易を活発化するに及んで、近隣國以外の國との貿易も始まった。特に一八四六年、ラナ幕府が設立されて以來、ラナー一族及びこれの奉仕者達は國民の犠牲の上に、豪華な生活にふけり、ヨーロッパから多量の奢し品を輸入した。その上ラナ幕府は政權維持のために、親英政策を取って來たので、とりわけ英國との貿易にはめざましいものがあつた。ところが第一次大戦後日本が積極的に世界市場に乗り出し、世界の隅々まで日本商品を輸出し始めてから、ネパールの市場にも、日本商品が氾濫し始めるようになった。ネパールの表玄関であるインドにデンと腰を据えていた英國もヤツキとなつて、日本商品がネパール市場へ流入することを嚙いと

めようと、インドの港で重い関税を課して日本商品の流入阻止にヤツキとなった。にもかかわらず遂にこれを阻止することが出来ず、せきを切って流れる水のようにとうとうとネパール市場に流入しネパールの市場を独占した。そして第二次世界大戦前まで、英国商品を価格と品質で特に価格の点で完全にうちのめし、ネパールの市場から駆逐してしまった。そして安くて良い日本商品をネパール人は長い間大いに楽しんで来た訳である。だから今でもネパール人は日本商品に対して深い郷愁に似た愛着を持っている。どのネパール人に会っても、必ず当時の思い出話を聞かす。又ネパールの中の家庭を訪問したときでも、これは日本商品だと言って繊維製品、陶磁器、金属什器、時計等いろいろなものを見せてくれる。とても評判がよく日本人として誠に心強い限りだった。そしてもう一度日本商品をエンジョイしたいと強く希望する。それだから、今日本人がネパールに行くと、持物に随分関心を持ち、「これ売ってくれ」「あれを分けてくれ」と必要にねだられる。特にトランジスター・ラジオ、カメラ、時計等は引っぱりだこである。この点では日本の登山隊が日本商品の大きな宣伝役をつとめているといえよう。毎年日本の登山隊は少い時で二、三隊、多い時は五、六隊もやって来る。登山が終って帰国するときには不必要なもので安価なものにはネパール人によって来る。高価なトランジスター・ラジオ、カメラ、自転車、ミシン等は売って帰ることがあ

る。これがとてもいい宣伝になっているようで、日本品を再認識させ、羨望の的となっているようだ。しかし一九一七年、インド独立後、ネパールの貿易に一大転換期が訪れた。インド政府はネパールに自国製品を売るための政策を打ち出し、英国統治時代、ネパールが享受していたあらゆる貿易上の便宜をご破算にし、一九五〇年、新しくインド・ネパール通商協定を結んだからである。これによってインドを除く外国との貿易は非常に困難となった。だからネパール商人はインド商品に依存しなければならなくなり、その上最近インドへのめざましい交通路の開発が更にこれに拍車をかけているようだ。従って現在ネパールの貿易はインドに集中した観がある。

今は市場にインド製品が氾濫

インドの独立後、英国統治時代ネパールが享受していた貿易上の便宜はすべて破棄され、新しくインド・ネパール通商協定が結ばれたことは前に述べた。ネパールは四面陸の国で輸出入の港を持たない。輸出入するためには必ずインドの領土を通過しなければならない。その上インドは工業化が着々と進み、自国製品のはげ口を求めている。このような背景のもとでインド・ネパール通商協定の会談が進められたのである。自然インド製品の市場として有利な協定が結ばれる結果となった

のであろう。現在ネパールの豊富な資源はほとんどすべてがインド商人にたたかれ、安い値段でインドに輸出されインドはこれらを工業原料として商品を生産し、高価な製品として再びネパールに輸入している。だから店頭に並べられている商品はほとんどがインド製品であるといっても過言ではなからう。

インド以外の外国商品もあるにはあるが、インド商品に比べると、とても高く、一部の富裕階級、ネパールに滞在中の外国人でないと、とても手が出せない。これは直接輸入が少くインド商人を通して間接的に輸入され、インド商人に一もうけされたものが多いからであらう。

ではこの協定がどんなものか、その内容を少しばかりのぞいて見ることにしよう。

先ずインド側は

- (1) インドのどの港からでもネパールの輸出入を許すことにしよう。
- (2) ネパールの輸出入貨物に対し、インドの領土を通過することも認めることにしよう。
- (3) その際課税は一切しないことにしよう。

とネパール側を取ってはこの上もない条件が盛られている。

その代りネパール側は

(1) インドの関税よりも安くない関税を課するようにはしなければならない。
更に

(2) 両国の経済に必要なそして重要な品物は最大限に利用し合って、お互に助け合うようにしよう。

というようなものである。これだけを見ると、インド以外の国からも輸入が容易なように見えるが、実際には色々面倒な手続が定められ、仲々思う様に行かないようになっていて、即ちインド以外の国からネパールが或る商品を輸入しようとする場合、ネパールへの輸入物資がインドの港につくと、輸入業者はインボイスを作製し、これにライセンス等の必要書類を添付して、インド税関に通関手続をするが、この時インボイスに記載されている品目に相当する関税をインド税関に支払わなければならない。そしてインドの港の税関に駐在するネパールの税関吏の立会の下にインドの税関吏が現物をインボイスによってチェックし、間違いがなければこれらの物資にシールをし、インボイスにインド税関吏がサインし、ネパール税関吏がカウンター・サインしてこの手続書類の副本をインドとネパールの税関で保管し、正本は輸入業者に貨物と一緒に引渡す。一方このインボイスのコピーをインドとネパールの国境にある陸の税関にそれぞれ送る。ここで初めて輸入業者は輸入

物資をインドの税関構内から搬出し、インドの国土を通過してネパールに運搬することが出来るのである。いよいよ輸入物資がインドとネパールの国境に到着すると、輸入業者はインド側にあるインドの陸の税関で品物のチェックを受け、インボイスにインド税関吏のサインを受け、次いで再びネパール側にあるネパールの税関で、品物のチェックを受け、ネパールの税関吏のサインを受けなければならぬ。これで初めて輸入貨物をネパールの国内に搬入することが出来るが、国境の税関はサインしたインボイスを元の港の税関に送り、ここで初めてインド税関で徴収された関税がインド国立銀行に設けられたネパール政府の関税勘定に繰り入れられるのである。これはインド政府が外貨不足と国内産業保護のために、輸入制限の措置を取っており、輸入物資がインドの国内を運搬されている途中で、インドの国内に流れないようにするための措置で止むを得ないと思われるが、これらの手続はとても複雑でうるさく相当の手数がかかり大変である。

このためにネパールとインドの国境の町ラクソール、ジョグバニ、ネパールガンジ、ナウタナク、ジャナガールの五カ所にインドの陸の税関が設けられている。

これに引換え、ネパールがインド製品をインドから輸入する場合には、インド側の手続は何等必要でなく、自由に買い自由にネパールに持つて来ることが出来るようだ。その上通貨の交換も自由

に出来る。

だからネパールの商人はインドで買えるものはインドから買うようになり、インドで買えないもののみ、インド以外の国から買うように自然となっているようだ。こんな訳で現在ネパールの市場はインド製品が独占している形である。

チベット及び第三国（インド、チベット以外）との貿易と問題点

チベットとネパールの貿易は古くから行われ、ネパールはチベットから主としてカシミヤ（上等山羊毛）、羊毛、粗毛製品、毛皮製品、塩、硼砂、金粉、アンチモニー、じゃこう、薬草、馬、羊、山羊の家畜類等を輸入し、銅製什器、仏具類、木製品、象牙製品、手漉き紙、穀物類、薬味類等を輸出していた。特にネパールはインドとチベットとの中継貿易国として栄え、インドの綿製品、煙草、金属製品その他日用雑貨類等を大量に中継輸出していた。このため北の国境に沿ってティプタラ、ポピティア、バンク、フアラック・ランタン、フブリ・ジャク、ラスワ、サルプ、ラーケ、ムスタング、ナムジャ、ナルカンケル、ピアス等交易の町が多数出来て、いんしんを極めていた。しかし、インドのダージリンからシッキム地方を経てチベットに通ずる自動車道路が出来てから、ネパールは中継貿易国としての地位が薄らぎ、チベットとの貿易は減少の一途をたどるようになった。なぜ

ならネパールからチベットに通ずる道は不便で困難な路み分け道しかなく人間か動物の背を借りて少量の荷物しか運ぶことが出来ないで、運賃は割高となり、価格がペラ棒に高くなるからである。しかも非常に多くの日数を要し、冬には交通が杜絶して運搬が出来なくなる。これではネパール経由の貿易では太刀打ち出来まい。それ故国境の商人はほとんどがダーズリン、ラサ間に新設された自動車道路沿線の町に移動してしまつたが、チベットが中共に占領され、ラサ・ペキン間の自動車道路が完成されるに及んで、チベットの経済はインド・ネパールから中共の方に移りつつある。これが更にネパールとチベットとの貿易の減少に輪をかけているようだ。しかし一九六一年、マヘンドラ現国王が中共訪問の際、ネパールの首都カトマンズからチベットの首都ラサに通ずる自動車道路を建設する協定を締結し、中共の経済援助でこの道路が五年後に完成されることになった。この道路が完成した暁にはネパールとチベットの貿易は再び増加するであろうが、更に東西兩陣營の分岐点にあるネパールに対しインドと対立する中共側が貿易面で何のように政治的な手を打って来るかが、み物となるであろう。

次にインド・チベット以外の国々との貿易であるが、外貨保有高の少ないネパールでは現在、インドで間に合うものはインドから調達し、インドで調達出来ないもののみ、他の国々から輸入して

いるのが現状の姿であろう。しかしネパールは東西の分岐点にあるので、東西の援助競争は激しく、両陣営の援助資金はかなりある。又中立国、中立機関の低開発国への援助資金もある。そしてこれらの援助資金は国の予算より上廻っている状況である。政府の統計によると、外国援助資金は一九六〇年七億二、四〇〇万ルピー（三二五億八、〇〇〇万円）一九六一年六億九、五〇〇万ルピー（三一二億七、五〇〇万円）で一九六二年一二億八、四〇〇万ルピー（五六七億八、〇〇〇万円）を期待していた。

これらの資金の中には開発用機器の購入費がかなり含まれているようだが、これらはインドで調達出来ないものが多く、インド以外の国々からかなり輸入されているようだ。現在の資金援助国は自由国家群では米、英、西独、ニュージーランド等、共産圏では中共、ソ邦等、中立国又は中立機関ではインド、スイス、国連、フォード・ファンデーション等が主なるものであり、これらの援助国からの輸入は特に多い。しかしこの援助額の内半分以上米国が提供しておるが、西独あたりはこれに目をつけ、積極的に機器の受注に乗り出し、米国の援助額に喰い込んで、かなり輸出成績をあげているようである。ネパールの産業開発には日本製の機器が最も適しているように思われるものが非常に多い。日本ももっと積極的に機器の受注等にも乗り出してもよいのではないだろうか。

原料を輸出し製品を輸入

ネパールの貿易は、政府の統計によると、次頁(表1)の通りである。

原料を輸出して、製品を輸入する典型的な後進性を示している。即ち一九六〇年度の総輸出額は約五九・一億円であるが、この内穀物類が約四四・二億円、原材料が約一五・一五億円で、この二品目が輸出のほとんどを占め、総輸出額に占める割合は九七・二%と圧倒的な数字を示している。これに引換え製品輸出は一・六六億円で、総輸出額を占める割合は僅か二・八%の微々たる数字を示している。次に輸入は一二九・二〇億円と輸出の二倍以上の数字を示し、貿易収支は誠に苦しい状況にある。この内製品輸入については食糧の三分の一を穀物と推定しても、一一九・三三億円で総輸入額に占める割合は九二・四%を占め、しかも、この穀物類はネパールからインドに輸出されたものが、再輸入される場合が多いので、ほとんど一〇〇%近くが製品輸入ということになる。その状況は次頁(表2)の通りである。

輸出の主なるものを挙げて見ると、先ず第一に穀物類であるが、多量の穀物、特に米を主としてインドに輸出しており、その輸出金額は一九五八年、二一・五四億円、一九五九年、三九・五八億

輸出入実績表

(単位 億円)

品 目	輸 出			輸 入			備 考	
	原 料 品 別	1958	1959	原 料 品 別	1958	1959		1960
糧 料 品	○△	21.54	39.58	○△	17.42	19.43	29.62	△原料に類するもの ○製品に類するもの 輸入の原材料は第1次製品である。
食 草 及 飲 物 製 品	△	0.86	0.39	○	5.95	9.68	9.28	
煙 草 及 飲 物 製 品	△	0.035	0.009	○	5.03	6.95	9.40	
動 植 物 油 料	○	0.29	0.27	○	4.60	4.75	2.14	
原 材 及 化 学 製 品	△	8.22	11.65	○	4.18	3.50	5.97	
一 般 製 品	△	0.021	0.044	○	2.97	4.19	4.93	
機 械 及 交 通 信 施 設 品	○	0.51	0.72	○	20.60	41.25	48.10	
衣 服 製 品	○	0.026	—	○	2.94	2.14	3.74	
大 使 館 及 予 計 品	○	0.56	0.17	○	5.02	5.46	8.43	
等 で 使 用 さ れ る 品 物	—	—	—	○	1.64	0.72	5.16	
そ の 他	△	0.96	0.29	○	0.73	1.81	2.19	
合 計		32.87	51.05		71.35	104.40	129.20	

原料、製品別貿易状況 (単位 億円)

種 別	輸 出		輸 入		備 考
	金 額	比率%	金 額	比率%	
原 材 料 (穀物を含む)	57.35	97.2	9.87	7.6	輸入食糧の内穀物を1/3と推定
製 品	1.66	2.8	119.33	92.4	
合 計	59.01	100.0	129.20	100.0	

円、一九六〇年、四四・二〇億円で総輸出額の七〇〜八〇%を占め、逐年著しい上昇傾向を示し一九六〇年は一九五八に比べ二倍以上となつてゐる。しかし、この内一部はネパール国内の交通が未発達のため、穀物の豊富な産地から穀物の不足する地区への輸送が困難であるから、穀物の余裕のあるタライ地区からインドに輸出し、インドの鉄道を利用して、ネパールの穀物の不足している地に再輸入されてゐる。

次に原材料であるが、主なものは豊富な木材を初め、煙草の葉、油種、果物(特にオレンジ)、サバイ・グラス(製紙原料)、ジュート、羊毛、生皮、象牙及び犀の角、じゃこう薬種及薬草等での内、木材、煙草の葉、油種、果物サバイ・グラス、ジュート、生皮は主としてインドへ、又、羊毛、象牙及び犀の角、じゃこう、薬種及び薬草は世界各国に輸出される。特に羊毛はカシミヤと呼ばれ品質優良で世界各国から好評を博しており又じゃこうは品位が良く全世界

の五〇%以上を供給し品質数量共世界第一位であるといわれる。このような原材料の輸出はほとんど動植物品であるが、その輸出金額は一九五八年、一〇・一一五億円、一九五九年、一二・三四億、一九六〇年、一三・二五億で、輸出金額の二〇〜三〇%を占めているが、伸びは穀物類のように大きくない。これは国民感情として穀物の増産に重点がかつていたためであるが、土地制度の問題、その他の農業政策に起因する処が大きかろう。しかし、指導よろしきを得れば、原材料の輸出額はまだまだ伸ばすことが出来るように思われるが、原材料を増産すると共に、工業を興し、原料輸出から製品輸出に転換することが大切であろう。

製品輸出の主なるものは大中企業によるジュート製品のヘッシヤンクロスとバッグ、中小及び家内企業による植物油、手工業による動物油（ギー）、羊毛製品、キウリオ等で、何れも主としてインドに輸出され、キウリオは世界各国の観光客から土産品とし好評を博している。しかしその輸出金額は一・六六億で輸出金額に占める割合は極めて微々たるものであり、特に注目すべき点は手工業による羊毛製品、動植物油等の家内工業製品の輸出がインドの機械制工業に押されて減少し征服されつつあることであろう。

次に輸入の主なるものを挙げて見ると、ほとんどが製品で鉄、銅、銀、アルミ製家具什器、ラン

タン、携帯灯、時計、ミシン、ラジオ、自転車、織物、衣服、サリー等の衣食住関係製品が五十億円を越え圧倒的に多く総輸入額の約半分を占め、これに次いで、麦粉、砂糖、塩、ビスケット、食用油、葉味、ナット等の食糧品、約三〇億円ガソリン、灯油、セメント等の鉱物製品約一〇億円、煙草、茶等の嗜好品約一〇億円、鉄、銅、銀、綿糸、毛糸、皮革等の原材料製品、約六億円薬品、化学肥料、染料等の化学製品約五億円、紡織機械、木工機械、金属切削用機械、鍛冶用機械、印刷機械、発電機器、自動車等の機械及び交通通信施設約四億円、石炭、燐寸、ローソク、紙、文房具、ゴム履物等の日用品約二億円位の順となっている。ここで特に目につくのは一般生活必需品、嗜好品等の輸入が圧倒的に多く特に最近その伸びも大きく、建設用資材、産業開発用機器の輸入の割合が非常に低く余り伸びていないことである。これは主として外貨を必要とする国からの輸入が多いからであろうが注目に価する。ネパールの市場には世界各国の製品が見受けられるが、機械類を除いてはインド製品が圧倒的に多い。機械類は西独製品が多く、日本製品としては燐寸製造機械一式が新品として設備されているのを見た外は印刷機械、力織機の中古品が散見されたが西独製品に比し陳腐なものが多く気の引ける思いをした。この外、需要の大きいもの内ラジオは日本製品がほとんどを占め時計はスイス製品、ミシンはインドのUS社製と米国のシンガー社製品、自転車はイ

インド製品、携帯電灯及電池はインドと西独製品である。一般的に輸出入金額の政府統計は統計組織が充分確立されていないせいも、余りにも過少に過ぎるよう思われる。ネパールとしては輸入が輸出を大きく上廻っているので、輸入製品の内、生産可能なものから逐次生産に移して行く努力を積極的に推進して行かなければじり貧状態が続き、何時まで経っても貧困から脱することは出来な
いであろう。

金融制度と外貨の不足

ネパールでも、金融の業務は古くから、いろいろの形で行なわれていた。初めは金貨業であつて、今のよう銀行業の徴候は七世紀頃から初まりかけたといわれる。一四世紀の終り頃ステイティ・マアラ王は土地や家などの権利に関する法律を定める等の改革をなした。以来不動産を担保として、金貨をする者が多くなり、Tanka Dhari という金貨を業とするカーストまで出来た程で、この頃から、銀行業務は一般化して来た。又丁度この時代、インド、チベットの貿易が増加し、為替手形等の必要に迫られ、これらもこの頃からぼつぼつ一般化し初めたようだ。一八七七年、ランディブの時代に、Tijarah と呼ばれる国立の金融機関が設立され、一般大衆を相手に金や銀のオーナメン

トを担保として、5%の低い利子で金を貸した。これが非常に好評を博したので、ネパールの到る処に "Tijarah" の支店が設置されるに至った。一九三七年、ジツユダ・シャムセル・ラナのときに、銀行法が制定され、これに基づいて会社組織のネパール銀行が誕生し、通商関係の融資を行なった。現在 Branch, Subbranch 一六であるが預金高は八、〇〇〇万ルピーしかなく、工業開発には充分でない。農民の所得を増加し、貯蓄を奨励して工業開発に役立たせたい。又、政府は百姓を対象に土地を担保として必要な金を貸す Land Mortgage Bank という金融機関も設立した。

以前は一般の貧しい零細な手工業者や百姓達は冠婚、葬祭に必要な費用を街の金融業者から借り受け、高利で首が廻らなくなり、一生彼等のために奴隷のように働いても、なお、金を返すことが出来ないで、この借金が積り積って大きくなり、子供へと引き継がれた。そしてますます悲惨な生活に追いやられ、極端な貧富の差が形造られて来たようだ。これら街の金貸業の利子は普通年二割から二割五分位の高利で、中には相手の文盲につけ込んで、べら棒な契約書を作り、どん欲の限りをつくしたといわれる。一九五五年現国王マヘンドラは通貨の安定を計るために中央銀行法を公布し、この法律に基づいて資本金一、〇〇〇万ルピーの(四億五、〇〇〇万円) Rastriya Bank と呼ばれる中央銀行を設立し、この国の Reserve Bank としての機能を持つことになった。これは丁度日

本の中央銀行である日本銀行に当る役目をなしている。これで一応貧弱ながらも金融制度は整った格好である。余り堅いことばかり書いたのでここで一寸ネパールの銀行風景でも紹介してくつろいでもらうことにしよう。一般の銀行に行くと先ず美せんを貯えたいかめしいグルカ兵が着剣で玄関に立っているのには驚かされる。これは中央銀行も同じことである。

これはネパール史上初めての総選挙による革新政党内閣と保守勢力の衝突が一九六〇年一月、日本の皇太子、同妃殿下がネパールを訪問し帰国された直後に、クーデターを捲き起し、その時発せられた戒厳令がその時のままになっているからであろう。政情の安定していないネパールの現在の姿をそのままさらけ出しているように思える。しかし銀行の中には入ってみると外のいかめしさとは打って変わって、まるで昔の日本の銀行へでも迷い込んだようで、なつかしくて仕方がなかった。日本の座敷で使っているような机を並べ、しかも日本の座ぶとんと全く同じものを敷いて、その上に銀行員は日本人と同じようなひざ組をして座り、お金の出し入れをやっている。余り懐しくもあり、珍しくもあったので、懇意な支配人にお願ひし、特別の許可を得て写真を撮らしてもらった。

もう一つ、この国での変った銀行風景は今なお両替屋があることである。街角に露天の両替屋が

軒を連れ、店先に沢山のお金を並べて商売をしている。そして必要ならば、たちどころにインド・ルピーをネパール・ルピーに、又ネパール・ルピーをインド・ルピーに変えてくれる。誠に便利である。両替屋に聞くと、開業するには政府の免許がいり、銀行の時間外で困ったときでもここに来れば、何時でも容易に両替が出来て、一般から大いに喜ばれていると誇らしげにいう。よく見れば額に入れた免許証がれいれいしく店先に飾ってあった。

両替屋が出たついでに外貨との交換レートについて述べてみると一九六〇年、ネパール政府はネパール国内にネパールの貨幣とインドの貨幣が混然と使用されていたのをネパール貨幣に統一して、通貨の単一化を計った。そしてインド・ルピーとネパール・ルピーの公式交換比率を一・六とすることを宣言した。それ故、インド一〇〇ルピーはネパール一六〇ルピーで交換されることになった。これで日本円との交換レートはネパールルピーが四五円又、一ドルが八ルピーとなる勘定である。ここで面白いことをネパール中央銀行の支配人から聞いたので伝えておこう。阪大の登山隊に経済学部を出た若い隊員がいた。彼は現在三和銀行に勤めており、ネパールの金融制度を調べて帰りたいというので、彼を中央銀行に案内したとき、中央銀行の支配人は日本円をもってくればいつでもネパール・ルピーに替えてやるという。そして現在日本銀行にネパール政府の口座を設けて

あり、この日本円をこの口座に入れておき、これで日本品を輸入するときの決済に当てるのだといっていた。もしこれが事実なら、そして日本円の持出しが可能なら、日本円をネパールに持って行けば日本円でネパール内での活動が可能となる。

しかしこの問題は筆者も聞いただけで何も研究していないので、何ともいえない。

次に、ネパールの貨幣制度を瞥見すると現在の通貨は硬貨と紙幣の二種類があり、貨幣の単位はルピーとパイストがある。そしてルピーは一〇〇パイストで十進法となっている。硬貨は銀貨と銅貨に分れ、銀貨は一ルピー、五十パイスト、二五パイスト、二〇パイストの四種類、銅貨は一〇パイスト、五パイスト、二パイスト、一パイストの四種類からなり、この内、銀貨の五〇パイスト、二五パイスト、銅貨の一パイストはそれぞれ Mohar, Suki, Paisa と呼ばれ、古い歴史を持っており、有名である。紙幣は一〇〇ルピー、五〇ルピー、一〇ルピー、五ルピー、一ルピーと五種類である。硬貨は五世紀頃から既に鑄造されていたようで、一五世紀には前述の Mohar, Suki, Paisa の硬貨が鑄造され、それ以来、ずっと使用されている。又一七世紀までチベットには硬貨を鑄造する技術がなかったようで、ネパールの硬貨が使用されていたといわれている。ところが第二次大戦中、銀、銅の価格が暴騰したので、これらの硬貨をとかして、銀、銅塊として高く売る人が多くなった。これがた

め、市場から銀、銅の硬貨が姿を消してしまった。その額は驚くなかれ、七カロール・ルピーといわれる。そのため、通貨に非常な困難を感じるようになったので、一九四八年、紙幣を導入して、この解決をはかったのが紙幣の初まりである。ところが軽くて持ち運びが便利なので、都会人には、大いに喜ばれ、ポピュラーとなったが、面白いことに無智な山間の人々には何だか価値のない紙切れのように見えるのであろうか、余り歓迎されず、紙幣では仲々物も売ってくれない処が多いようだ。このため日本の登山隊もカトマンズで登山に必要なすべての費用を硬貨に変え、幾箱もの木箱に詰め、ポーターに背負わせて山に向かわなければならぬ。これは大きな量になり、しかも重くて弱り切っていた。政府の統計によると一九六一年の通貨量は、二億一三〇〇万ルピーといわれ、日本円に直して約九十五億八、二〇〇万円、日本の一兆五、四九二億九、一〇〇万円と比較すれば百五〇分の一以下で極めて小さいが、一九六二年二億三、四〇〇万ルピー（一〇五億円）と逐次増大している。次にインド・ルピー以外の外貨（ドル、ポンド等）について少し触れてみたい。ネパールは現在インド以外の国々への輸出が少ないので外貨を獲得する機会が少い。輸出による外貨の獲得は今の処、余り期待できない。だが、面白いことにネパールは貿易外の収入でどうやらかなりの外貨をかき、インド以外の国々からも、必要なものを輸入している。先ず第一に勇猛を以て世界に知られ

ているグルカ兵が英国の傭兵として多数海外で活躍しており、これらの送金である。これはかなりの額に昇るといわれる。第二は観光客、登山隊の落す金である。世界の屋根ヒマラヤ連峰と今なお残る中世紀の街、一年中真赤や真黄の熱帯特有の花が咲き乱れている常春の街、珍らしい風俗、習慣や紀元前の古い建造物が多数残っているエキゾチックな街、これらを一目見んものと世界中から多数の観光客が訪れてくる。そして観光客は街に溢れ、ホテルは何時も満員である。その上観光客は年毎に増加している。更に毎年世界各国から登山隊が多数やってくる。日本からも一九六一年は三隊、一、九六二年は五隊もやって来た。一隊の編成は大概一〇名位であるようだが、登山隊の一人当りの費用は一〇〇万円位は必要だといわれるから、日本の登山隊の落す金だけでもかなりの額に達する。ネパールに取っては日本の登山隊はいいお得意さんであろう。

しかしこれだけでは一般的にいうと外貨は充分とはいえない状態であるが、幸か不幸かこの国は東西兩陣營の分岐点に立っているので外国の援助による外貨がかなりあるように思える。たしかに外国の援助金額は国家予算を上廻っている状態だが、しかし政府の統計によると外貨保有高は一九六一年五、二〇〇万ルピー（二三億四、〇〇〇万円）、一九六二年七、六〇〇万ルピー（三四億二、〇〇〇万円）と増加し中央銀行の交換しない外貨を含めると、一九六一年一億七、一〇〇万ルピー

(七六億九、五〇〇万円)一九六二年二億一〇〇万ルピー(九〇億四、五〇〇万円)となっておりが、充分とはいえない。現在ネパールはこれを唯一の手がかりとして、産業の開発を行なっているといえよう。

この機会に日本からネパール在留邦人への送金について参考のために一言しておきたい。ドルやポンド等の外貨を日本から送金する場合、直接ネパールの銀行に送らないで、インドの銀行を経由すると、インドの銀行ですべてインド・ルピーに変えられて、ネパールの銀行に送金される。インドの銀行としては外貨の収入となるばかりでなく、交換手数料まで取れるからであろうが、誠に困ったことである。だから帰国の際、余った金を持ち帰る場合、持って帰ることが出来なくなる。何故ならネパールは外貨保有が充分でないで、その預金の中から二〇%位しか外貨に変えてくれなからである。筆者のようにネパール政府の招へいで行ったものですら、いくら頼んでも、規則だからといって、どうしても首をたてに振ってくれなかった。だから一般の人々はなお困難であろうと思われる。随分困った経験をしたので、直接ネパールの銀行に送金し、ドル又はポンド建の口座を設けて預金しておかれることをお勧めする。こうすれば必要なときには、何時でもネパール・ルピーに変えて使用することも出来るし、余った金は自由に持ち帰ることも出来ることになる。

苦しい貿易収支と産業の開発

ネパールの貿易の規模は日本の約二〇〇分の一程度でまだ極めて小さいが毎年拡大の一途をたどっている。政府の統計によると、輸出入共毎年四〇〜五〇%の伸びを示し、輸出よりも輸入の伸びがやや大きい。その状況は次頁の表の通りである。

しかしここで大きな問題は輸入が輸出の二倍以上で、著しい輸入超過を示し、貿易収支は大きな赤字で悪化の傾向をたどっていることであろう。この赤字は一九五八年三八、四八億、一九六〇年七〇、四〇億で約四〇%位の割合で増加し、苦境に追込まれている。

そこで、ネパール政府は香料、アルコール飲料、煙草、自動車、その他流行品、ぜい沢品等の不要不急のものに対し、特別に高い輸入税をかけ、砂糖のようなものは輸入統制、配給制度を導入して輸入を極力抑制し、又原料に対しては輸入税を安くし、輸出税を高くし、反対に製品に対しては輸出税を安くし、輸入税を高くする等の措置を取って、原料をなるべく製品として輸出すると共に製品輸入を少しでも減らすよう奨励してこの大きな赤字の解消に努めているが、もっと適切な手積

151 ネパールの工業事業

貿易規模拡大状況 (単位 億円)

種別 \ 年度	1958	1959	1960	備考
輸出	32.89	51.05	59.01	
拡大指数	100%	161%	179%	
輸入	71.35	104.40	129.20	
拡大指数	100%	146%	181%	

貿易収支状況 (単位 億円)

種別 \ 年次	1958	1959	1960	備考
輸入	71.35	104.40	129.20	
輸出	32.87	51.05	58.80	
貿易収支	-38.48	-53.35	-70.40	
赤字指数	100%	138%	183%	

極的にしかも強力に打たなければ、この効果はあがるまい。況んや現状はこれとは反対にインドに発達しつつある機械制工業によって作られた安くて良い製品が多量にネパール市場に流れ込み、ネパールの家内工業的手工業はこれらの製品と太刀打ち出来ず、逐次衰微し、征服されつつある。そして、ネパール人の多くはインド製品に職を奪われ、ネパールの財貨はインドに流れ、益々貧困と停滞に追いやられているような気がしてならない。このため、ネパールは産業の開発特に工業の建設に努力しようとしているが、インドはネパールの工業開発を外面はともかく、内心は好んでいないように見える。

ネパールは現在政治的に独立しているが、インドは経済的にネパールが自立出来ないことを望んでいるのではないだろうか。そして、ネパールをインドの属国としての地位になること待っているのではないだろうか。筆者はネパールに滞在中このような言動を幾度か経験したことがある。

これがネパール人のプライドを傷け、彼等がインドを嫌う原因になっているようにも思える。このようなことは両陣営の分岐点に立つ世界中の後進的な小国が何時も悩み続けている共通点であるが、もし仮にインドがこのような気持で、ネパールを真の属国にするために、植民地的産業政策を取るようなことがあるなら、ネパール人は何時まで経っても貧困と停滞から脱し切れず、又これ

らに対する国民感情のレジスタンスも伴い、インドの意に反して、ネパール国民は段々インドから離れて、中共に接近するようなこともなかりかねない。これに引き換え、中共、ソ連は積極的な経済援助に乗り出し、近代的なセメント工場、製紙工場、煙草工場、砂糖工場を建設することとなり、着々その準備が進めている。これらは何れも輸入金額の多い品目だけに、将来、ネパールの貿易収支の改善に大きく貢献することだろう。更に中共は無償でネパールの首都カトマンズからチベットの首都ラサを結ぶ自動車道路の建設に乗り出し、一九六七年頃には完成する予定で着々準備が進められており、この道路が完成した暁には中共との往来もはげしくなろう。

一九五九年のチベット動乱、国境紛争以来中共とインドは尖鋭化している。それ故、中共は更に積極的な経済援助に乗り出し、大多数の貧困者からなるネパール国民の生活水準を高めることに努めるかも知れない。しかしネパールはあくまで中立を堅持して、両陣営に巻き込まれることなく平和を維持しようと努めるであろう。これにはネパールの産業を開発し、貿易収支を改善して、ネパール国民の生活水準が少しでも高まるようお互いに暖い援助の手を差しのべてやる必要があるであろう。

ネパールの産業事情

遠山一郎
(通商産業省工業品検査所
産業機械課長)

一 気 候

生活や産業の立場からネパールの気候をみると、亞熱帯に位しながら、インドに接した南部低地帯とチベットに接した北部高地では全く異った様相を示している。その中でも最も住みよい地帯は海拔一、四〇〇百米内外の処で、ネパールの首都 Kathmandu が丁度その高さに位置している。Kathmandu の気温は摂氏で一月の平均十度、七月の平均二五度、最低零下三度、最高三七度で、日本と比べると相当にしのぎよい場所である。南部の低地帯は東西にインド国境にそって拡がっており、気温は一月の平均東部一六度西部一〇度乃至一三度、六月の平均東部二七度西部三二度で、西部は東部に比べ、寒暖の差がいちぢるしい。

降雨も場所により相当の違いがあるが、一般的傾向として六月から九月にかけて、年間降雨量の八〇%が集中して降り、その他の季節は、冬期に僅かな降雨があるが、ほとんど晴天つゞきである。降雨量は東部に多く、東南部の低地帯は年一九〇〇ミリ、首都 Kathmandu の周辺は一五〇〇ミリで、ほとんど日本と変りないが、時期的に集中しているのが異なる。西部にゆくに従って、降雨

量は減り、西南部の低地帯では年九〇〇ミリ内外である。山岳地帯は一般に Kathmandu と同程度の降雨量であるが、ヒマラヤ山岳地帯には降雨の少い地域もある。

二 植 物

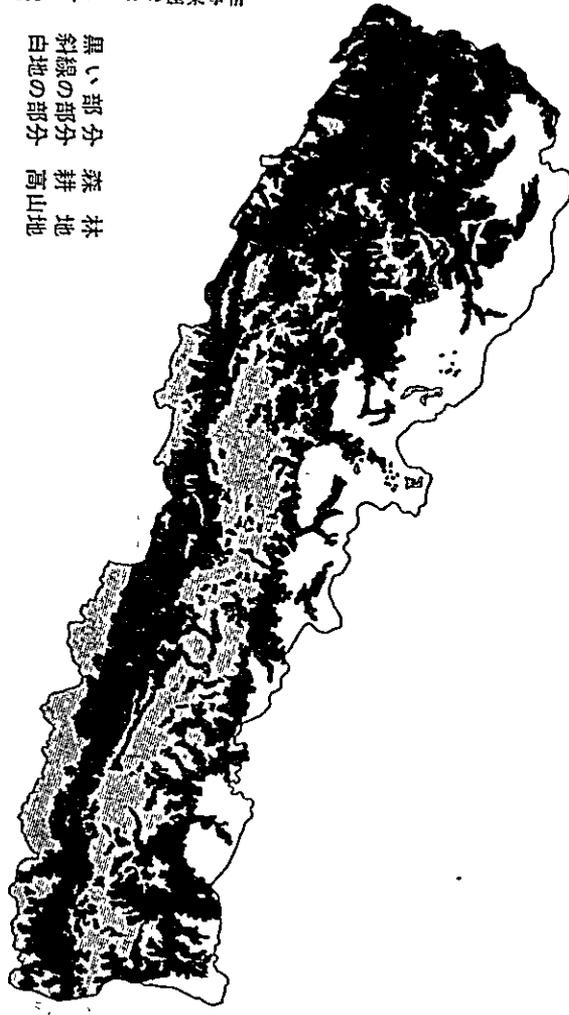
植物帯は四つの地帯は別けられる。即ち、湿潤熱帯、湿潤亞熱帯、温帯葉針樹帯、高地植物帯である。

湿潤熱帯は南部の低地の Terai 地帯と、それに続いた低い丘陵地帯で、落葉樹が多い。有用材としては Sisso が家具用、細工用、Senal が合板用、マッチ用、製紙用、Karna が家具用、化粧板用として用いられる。北部にある Si 地帯が建築用、鉄道枕木としてインドの需要が多い。この地帯で近接できる森林は過伐によって荒廃している。例年の山焼きや放牧によって幼樹の成育が抑えられている。Terai 地帯は耕地が多く、特に東部はほとんどが耕地である。

湿潤亞熱帯は三〇〇—一、二〇〇米の丘陵地帯で、森林は Si と松が混在している。この地帯は道路、鉄道から離れているので、開発されていない。有用植物として Salai 草があり、製紙、パ

159 ネパールの産業事情

黒い部分
斜線の部分
白地の部分
森林地
耕地
高山地



ルブ原料として、インドに出されている。

温帯針葉樹帯の内九〇〇―二、一〇〇米の範囲は耕作が盛んで、特に中央、東部では自然林はほとんどない。一、五〇〇―三、〇〇〇米の範囲では樅、から松、つつじ、ポプラ、くるみ、針葉樹が主であるが、東部は耕作地が多く、西部では森林の残った処が多い。二、一〇〇―三、三〇〇米の範囲では樅、竹、から松が多く、三、三〇〇―三、六〇〇米の範囲にはもみ、から松、つつじ等が多い。

高地植物帯は国の北部にあり、冬は寒く夏は短く涼しい。降雨も少い。植物は低く、ずんぐりしており、土壌のない地表にはこけ、地衣類が生えている。四、二〇〇―四、五〇〇米の雪線の下には草生地があり、夏期の放牧地となる。又、農作物の栽培限界で、じゃが芋、大麦が作付けされる。

三 森 林

森林を地区別に分けると

Tera 地帯	一、八〇〇平方軒
丘陵地帯	一七、〇〇〇 "
山岳地帯	二四、九〇〇 "
ヒマラヤ地帯	二、一〇〇 "
合計	四五、八〇〇 "

林相別に分けると、

河川に沿った森林	五、二〇〇平方軒
Sa-1 の森林	九、二〇〇 "
山麓の森林	五、二〇〇 "
樞の森林	二一、〇〇〇 "
針葉樹林	五、二〇〇 "
合計	四五、八〇〇平方軒

森林の合計面積は国の面積の約半に相当する。

Tera 地帯の森林は荒廃して、経済上有用ではない。この地帯には耕作地が多く、森林から出る燃料では不足している。住民は牛糞を燃料に用いている。丘陵地帯の森林には有用なものが残っているが、道路が不備で、まだ開発されていない。山岳地帯の森林は減少しつつあり、土壌の浸

蝕が問題となっている。ヒマラヤ地帯の森林は豊富な木材を蔵しているが、近接できず開発されな
いままである。

四 土 地 利 用

1. 地帯は沖積層で、その面積は二四、〇〇〇平方呎あり、全耕地の $\frac{2}{3}$ がこの地帯に帯状にあ
る。東部には特に耕地が密集し、七〇〜八〇%が耕地である。降雨が夏期三〜四ヵ月に集中してい
るので、冬期の栽培は制限されている。西部は半乾燥地帯で、耕地は灌漑に依存している。

丘陵地帯は砂や小石の混入が多く、マラリアがあり居住適地でないので、耕地は少く全土が森林
に覆われ、浸蝕も少い。

山岳地帯は九〇〇米より低い処には、マラリアがあり、健康地でなく、三、〇〇〇米が一般農業
者の耕作限界であるので、その間が居住適地として過度に耕作、放牧が行われる傾向がある。特に
東部では森林面積の割合が一〇%足らずで、その傾向が甚だしい。一般にこの地帯では治水工事が
不完全で、地すべり、河川の浸蝕をおこなしている。又、雑草、害虫、病菌を駆除するため土地を焼

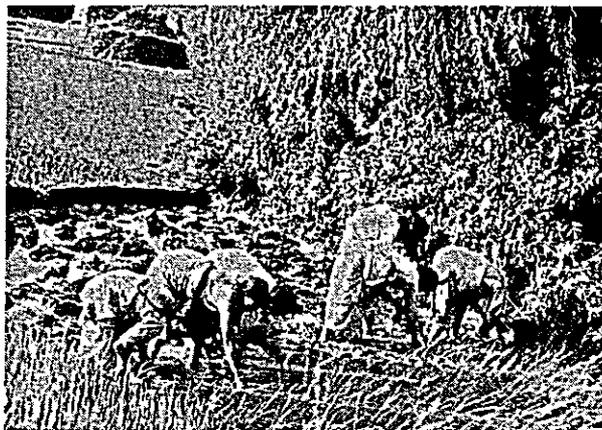
いているが、これが土地浸蝕を早めている。山地は例年焼いて軟かい草を出しているが、家畜は飼料不足から草を喰い荒らすことが多く、又、飼料不足は樹の葉も飼料とするので、樹木を弱め、森林を減じ草地を荒廃し、耕地を浸蝕する原因になっている。

森林地帯より高度にある草原の放牧は夏期のみに限られ、土地浸蝕をおこす程ではない。

五 農 業

作物別作付面積は大略次の通りである。即ち、稲二六〇万ヘクタール、とうもろこし一一〇万ヘクタール、小麦三〇万ヘクタール、黄麻四万ヘクタール、油料子実一五万ヘクタール、じやがいも二〇万ヘクタール、煙草一〇万ヘクタール等である。耕地の二〇％は灌漑されており、一般的な方法は河川に高さ一一・五米のダムを築き、水路により耕地に導くものである。

農業事情は地域的に甚だしく異っている。



ネパール女の田植

一 東 Terai 地方

亞熱帯に位し長さ三四〇籽、幅一〇—二〇籽の狭い帯状の東西に延びた地帯である。沖積層よりなり降雨は二、〇〇〇ミリ、周囲に深い森林があり、米、砂糖きび、黄麻の産地である。耕地の殆は裏作も出来、ネパールで最もめざました農業地帯である。又、この地帯はインド国境に沿っているので、インド市場に近く米、黄麻はインドに輸出される。この地帯の中心地に工業地 Biratnagar があり、砂糖きび、黄麻は同工業で消化される。

二 中部ネパール

Katmandu、Pokharaを含んだ中部山岳地帯で、

山の間の肥沃な谷に耕地がある。東西に二〇〇軒、南北に三〇―四〇軒の地域で、高度は二、〇〇〇―一、五〇〇米、気候もよいので人口密度も高い。山あいであるので耕地は小さく、山地になると段々畑になっている。主作物は米である。

三 東部丘陵地、山岳地

東西に二七〇軒、南北に三〇―五〇軒の地域で、山あいや段々畑に耕地が集中している。高地では寒く、地味も石まじりになる。じやがいも、大麥が四、二〇〇米の高地まで栽培される。夏期になると高原草地に放牧される。この地域の低い所には米、じやがいも、とうもろこしが栽培され、じやがいもはインドに輸出される。

四 中部 Terai 地方

インド国境に沿って東西一〇〇軒、南北二〇軒の地帯である。降雨量は減り一、〇〇〇ミリにすぎない。地味は良くインド市場に近いが、水分不足のため土地の有効な利用ができない。安定した農業が営めず年により兎作となる。

五 西部ネパール

降雨量七五〇ミリで水不足のため耕地は少い。この地域のうち西端 *Western* 地方と西部山岳地に農業が行われている。西端 *Western* 地方は東西二〇〇軒、南北一〇—三〇軒で肥沃な土地であるが、灌漑がないと農作は安全でない。作物は米、とうもろこし、大麦、小麦が主である。西部山岳地は土地肥沃であるが、傾斜が甚だしく、耕地は段々畑になつてゐる。主作物は小麦、粟、じゃがいも、とうもろこしである。

次に作物毎の特徴を示す。

米、モンスーンの一ヵ月前より木製犂で耕起し木製槌で碎土する。降雨又は洪水をまけて碎土機により水田を碎土平坦にする。別に苗床に栽培した苗を移植する。除草は手除草である。一般に畦に大豆を播くのは日本とよく似てゐる。脱穀は盤板に叩きつけ、収穫量は低く総額二〇〇万トン程度である。

小麦、大麦、高地では主要な作物である。脱穀はからざおで行い、水車で製粉する。その粉は品質は低く土砂の混じつてゐることもある。この作物は低地でも栽培するが、四〇%はさび病、黒穂

病で減収になる。一ヘクタール当り収量五石である。

とうもろこし、南部の Terai 地帯から四、〇〇〇米の高地まで栽培される。乾燥地、やせ地にもあり比較的貧しい人の食糧である。一ヘクタール当り収量七石である。

豆類、色々の豆類が食糧に用いられ飼料にもなる。その栽培は土壌を肥沃にし輪作にもよい。この中で大豆が主要で生産量も高く品質もよく、一、二〇〇米から耕作可能の高度まで栽培される。粟、じゃがいも、とうもろこしとの混植が多い。

油料作物、主要なものは Mustard (からしな) で東部および南部に多い。第二次大戦のすぐあとはインドから安価な油が輸入されたので、油料作物の栽培は見られなかったが最近増加して来た。しかし生産量は低く搾油方法も不能率である。Terai 地帯では南京豆、菜種も栽培されている。

じゃがいも、どんな土壌にも高度にも栽培され、広く食糧品となっている。山岳地帯では良質のいもが生産される。病虫害駆除が主要な問題になっている。

砂糖きび、用水を十分にし、熱帯性気候を要するので、Terai 東南部に集中している。Biratnagar に砂糖工場があるので集荷されている。

雑作物、主要なものは黄麻で Terai 東南部に多い。Biratnagar に黄麻工場があるので、そ



山間部の段々畑

に搬入されるが、粗原料のままインドに輸出されるものもある。この地方では自然に生育している
ので、生産増加も容易である。Terai 中南部の Rapti Valley も黄麻栽培を移入し工場を建設する
計画がある。大麻、亞麻も生育している。

果実、Teraiの東部にはマンゴー、バナナが生育する。山地には桃、みかん、りんご、すもも、梨が小規模ながら生育している。

Pokharaはみかんで有名である。果樹の植樹は傾斜地の浸蝕を防ぐにもよく、又果実の増産は容易であるが、輸送施設が改善されなければ需要の増加は望めない。

野菜、Kathmanduには各種の野菜が豊富に出廻っているが、同地以外では野菜栽培は極めて少ない。一般住民の野菜を採取することは少く、食事内容は片よっている。

農産物市場と名付け得るものはKathmanduにあるのみで、これは周囲の耕地の産物が搬入され、遠方からは輸送が困難なため搬入されない。Kathmandu以外の土地では一般に農業生産は自家消費の程度で農産物を購入するのは困難である。輸出向け農業生産はTerai地区に限られている。

六 土地保有、税金

土地の保有制度は複雑しており、又政府に土地関係の記録がない事が、農業の発達を阻げ、政府の主要な収入源である土地税の近代化を阻げている。土地税の算出には一定した方法がなく地区に

より異なる。

ネパールの法律によれば、凡ての土地は国に所属し、土地税とは政府の計算した土地賃貸料である。土地税とは政府の計算した土地賃貸料である。最近までこの賃貸料は、土地の大きさ、生産性に応じて課せられたものでなく、特権者の保有している土地には土地税免除の扱いをし、小土地保有者には土地税は課せられた。土地保有には三種の形態があり、それは *Birta* 制度、*Zamindari* 制度、*Kipat* 制度である。

Birta 制度は旧政府が特権者にあたえた土地の制度で賃貸料即ち、土地税は不要である。この制度による土地は、ラナ家や支配階級など特に旧政府に功績のあったものにあたえられ、ネパール全耕地の $\frac{1}{4}$ に相等し、大きなものは四万ヘクタール位である。政府からこの土地をあたえられた者は小作人に貸借し、高額の小作料をとっていた。土地税は一九五五年まで徴収されなかったが、それ以降政府は *Birta* 制度による土地保有者から税金をとり、保有者が小作人から生産物の五〇%以上を小作料としてとることを禁止した。しかし *Birta* 制度の土地の税金は他の制度の土地に比べ割安で、同一率の税金をとるとすれば、政府の土地税増加も一、〇〇〇万ルピー以上となり、これは政府の歳入の一〇%以上に相等する金額である。

Zamindari 制度は、Terai 地帯では一般的であり、封建的なものである。政府は税金徴収の方法として用いている。

Zamindar は地方のお役人で世襲である。その管理している土地を借地人に貸し、貸賃料を徴収する政府の代行機関である。Zamindar はこの業務の手数料として5%を得るが、これは表向きの話で、実際は封建的な地主で、自分の管理している土地のうち大規模な土地を保有し、普通の土地保有者と同じ貸賃料を支払っている。Terai 地帯の西部では、農耕はZamindar 自身の経営で大規模に行なれる。東部では土地保有は小さく、収穫物を分配する制度で小作人に貸され、小作料はZamindar が半分とるか%をとる。ラナ政府時代にはZamindar が封建的な要求をすることが多く、小作人の追い出しもしばしば行なわれた。

Kipat 制度は東部山岳地帯に普通で、土地所有者は土地を売ることでも分配することもできた。税金は地方役人により徴収され、その一部を中央政府に納入する。中央政府の影響力が弱いので政府への納入金は少い。

七 小作契約 負債

土地借用契約は文書でなく又短期間である。しかし実際は更新され小作人の一生にわたって続くこともある。小作契約の標準条件はないが、建物、構築物は小作人の提供するもので、小作料は現物払い、現金払い、又時に労働提供の条件のつくこともある。人口増加に伴い土地への需要が増し、賃貸料も高くなって来ている。

東部ネパールと Kathmandu 地方の調査によれば、小作人の殆どは借金を持っている。その原因は不作の年の費用や、結婚のようなお祝い事の費用によることが多い。金額は小作人の年間収入に相等する三〇〇ルピーまでが一般的である。利子は一〇%までと法律により制限されているが実際はなお高率の場合が多く、借金の支払は容易でない。借金は子孫にうけつがれ、田賦制度の下では借金から生じた農奴制がある。

八 耕地の規模と家族制度の変化

以上のような土地保有制度の結果として、耕地の%は大地主が保有するようになり、実際の耕作は小作人がやり、耕作規模は人口圧力により極端に細分され、高地では〇・〇四—〇・二ヘクタールの農家が多く、他の収入を講じなければならない。家族は労働者、インドへの出稼ぎで仕事を求めなくてはならない。〇・二—〇・八ヘクタールの農場は自家需要に間に合う程度になるが、市場に出す程の余裕もない。Terai 地帯には二—四ヘクタールの農場があり、市場に出荷する余裕のある生産をする。

人口問題の圧力からグルカ兵として外国軍隊に傭兵されるのは世界的に有名である。その人数はインド軍に一二、〇〇〇人、イギリス軍に八、〇〇〇人で、在外グルカ兵がネパールに年間一六億円送金している。又これ等のグルカ兵が除隊後、年金として一人平均一八、〇〇〇円総額数億を得て居り、これ等が対外勘定のうち大きな貿易外収入となっている。この除隊後の年金収入も、グルカ兵の故郷の山岳地帯の普通の農業収入の五倍に相当すると云われている。グルカ兵の除隊者は外

国での生活経験者であるから、保守的な政府にとっては警戒すべき存在であると云われている。

一般の農村生活では家族制度は変らぬが、Kathmanduの近郷では大きな変化が見られる。従来職人の製作していたものが工業製品に変わりつつあり、今まで家族内で自給していたものも外部から購入するようになり、特に菓は自家菓が菓業に変わって来た。この変化は家族の形や社会組織にも及んで、必需品を自ら生産していた大家族制の独立経済単位が小家族にわかれ、必需品は外部から購入するようになった。

九 土地改革

一九五五年に土地改革を発表し、その内容はEconomic制度の土地の課税、土地保有から生じる収入に対する課税からなり、土地保有による収入の課税は、年三、〇〇〇ルピー未満は免除、三、〇〇〇ルピー以上から税率五%、年四五、〇〇〇ルピーを越す収入には二七・五%と累進課税される。但し土地台帳の不備、税の徴収機関の非効率化のため土地改革をすすめるのはむずかしい。

土地改革には土地の再分配を行い、過小細分を防ぐ規定を設けるべきである。ネパールでは地方

により言語、習慣も異なるので、このような施策は地方別に管理し、中央政府は土地測量のような技術的援助をなすべきである。又耕作者の耕地保有を保証することが、土地の再分配よりも重要であり、政府発表の施策であるが実施されていない。

一〇 土地利用の改善

国民一人当りの耕地面積は〇・四ヘクタールであるが、土地の生産性が低いので現在のような低い消費水準でも生産は不十分である。又牧草地も不十分で家畜が喰い荒している。森林からの供給も不十分である。

耕地拡張の余地は Terai 地帯西部にある。山岳地帯には拡張の余地がなく、土地浸蝕を防ぎ洪水の害を防ぐため、耕地を増すより森林を増す方が重要である。Terai 地帯西部では灌漑の拡大、乾燥農業の改善、肥料の使用により休耕地を減らすことができる。耕地拡張と同時に既耕地の生産力増加も推進すべきで、灌漑施設、改良種子、肥料の使用、輪作、病虫害の駆除、森林牧野の管理等を合理化すべきである。

一一 外国の援助

Rapti Valley 計画、ネパール、アメリカ灌溉基金による多目的開発計画で、アメリカの Tennessee Valley 開発機関をまねたものである。Rapti Valley は Kathmandu から南方に降り平地に接する地帯で、従来はマラリアのため全く開発されていなかった。この地域のマラリアを駆除し、耕地の少ない奥地の住民を移住定植させ、あわせて開発生産物を Kathmandu に供給する計画である。マラリアも四六五村に亘って駆除され、農業改良員や専門家が駐在して、居住者や新入植者に新技術の紹介や作業訓練を行っている。小学校二二、上級学校一四、一六ヘクタールの模範農場、六四〇ヘクタールの改良種子圃、信用組合一七が開設された。この谷の中心を八六村に亘って自動車道路が完成し、一九五九年には一八〇平方分の国立自然公園が出来、野獣を保存している。周囲の森林管理も行われ、中心地にアメリカの援助による年産三五万立方呎の製材所が稼働している。日本はこの地域に隣接して水力発電の計画をたてた。

Bara 計画、Rapti Valley とインド国境の中間に位する地域の灌溉開発計画で、七〇村の水路に

よって四、六〇〇ヘクタールに灌漑する。この計画中には Simra-Jipar 深井戸灌漑計画として地下水を利用する試みがある。Bara 計画に隣接して Parsa 計画があり、九〇軒の水路で五、二〇〇ヘクタールに灌漑する。

Kosi 多目的計画、インドの援助により Terai 東部で Kosi 河下流にダムを築造し、灌漑用水、水力発電を得るものである。この計画の受益面積は主にインドで、灌漑面積一六〇万ヘクタールの内四〇万ヘクタールはネパール国内、水力発電は完成すれば一八〇万KWであるがその内ネパールには一萬KWが主として Birnagar の工業地に供給される予定である。

Pokhara 計画、インドの援助により二、〇〇〇ヘクタールの整地灌漑をする。

Kathmandu 計画、インドの援助により Kathmandu 周辺の灌漑工事で、それに付随して水車工事もある。アメリカの援助による羊毛紡績工場があり、ヤーン五、〇〇〇ポンド、編物八、〇〇〇ポンドを生産している。

スイスの援助計画、主として技術援助で、一九五〇年から開始され現在に至っている。その主なものは農業、酪農、建築、橋梁建設、金属加工、電気等の専門家派遣による技術訓練である。特に酪農は山岳地帯の乳資源をチーズに加工するもので、運搬人によるしか搬出の方法のない地域で、

地元生産の物資を高度加工する方法は、現在の環境によく合致した開発の方法であり、注目をあびている。又スイスとネパールには相似の点が多々あり、きめの細かい技術指導が行われている。

ドイツの援助計画、アメリカのフォード財団の財政的援助による技術訓練所で、技術指導を一九五七年より現在まで継続している。鍛工、機械加工、木工、皮革、電気、窯業等の技術、およびそれに関係したマネージメント、デザインの指導を行っている。

一一 鉍 物

従来外国人科学者の入国は禁止されていたので、鉍物の発見は偶然で、採掘も旧来の慣行を踏襲し、表面の資源が発掘し終れば鉍区も閉鎖される事が多い。一般に地層は重なりあい断層が多く、また鉍床が深い森林や山脈の重疊した中にあり、道路が不備で輸送費がかかるので、鉍床が経済的に開発できるか疑問である。組織的な鉍床調査はアメリカ、スイス、インドの合同により最近開始された。石炭、鉄、雲母、銅、コバルト等があるが、判明した鉍量は少く品質も良くない。

石炭は東部の Kosi 河の近傍、西部の丘陵地帯にあり、泥炭は Kathmandu 近傍にある。

鉄鉱は Kathmandu 南方にあるが、地質構造が折り重なっているので多量のもの期待できない。Rapti Valley と Kathmandu の中間にも発見されている。

雲母も Kathmandu 近傍のものはネパール雲母会社によって採掘されている。

銅鉱も各地で小規模に採掘されている。

コバルト鉱は昔は西ネパール各地で相当の規模で採掘されたが、現在は荒廃している。そのうち Samar Bhanar は有望である。

一三 動力資源

石油はほとんどないが、石炭および水力電気が動力燃料源である。しかし石炭は良質な大規模なものがないので、水力が大きなエネルギー源となる。山岳地帯を含み降雨量も相当にあり北部には氷河もあるので、水力の開発適地はたくさんあるが、動力の需要地が離れていることや莫大な開発費用を要するため、まだ大規模なものには開発されていない。

既に開発されたものは Kathmandu 近傍にある Pharping と Sundarjal の水力発電所で、二五―

五〇年前の建設であり出力は合計一、三五〇KWである。膨脹する需要に合わせるため Kathmandu に火力発電所一、七〇〇KWが開発されている。これ等の発電量は燈火用としても不充分で、工業の發達を阻んでいる原因でもある。

Trisuli 水力發電計画、Kathmandu の北西方に位し、インドの援助によって、落差四五米、出力一八、〇〇〇KWの發電工事がすすんでいる。

Biratnagar の近くには水力、火力合計で二、〇〇〇KWの發電所がある。Kosi 河の水力發電に
よりネパールに一〇、〇〇〇KWを發電所価格無料で供給される予定である。

Sati 計画、Pokhara の近くにあり、出力一、〇〇〇KWで開發される計画である。

Tinau 計画、Bhairawa 地区に供給する予定で、出力三、〇〇〇KWである。

Karnali 河は西ネパールを流れる大河で、日本工管が水力發電計画につき調査中である。この河は屈折しており二・六料のトンネルで一八〇米落差を得る地点、五・五料のトンネルで一一〇米落差を得る地点があり、渾水期で三〇〇立方米/秒の水量があるので、この二カ所でダムの築造がなくととも、少くとも百二十万KWの發電が得られると推定される。

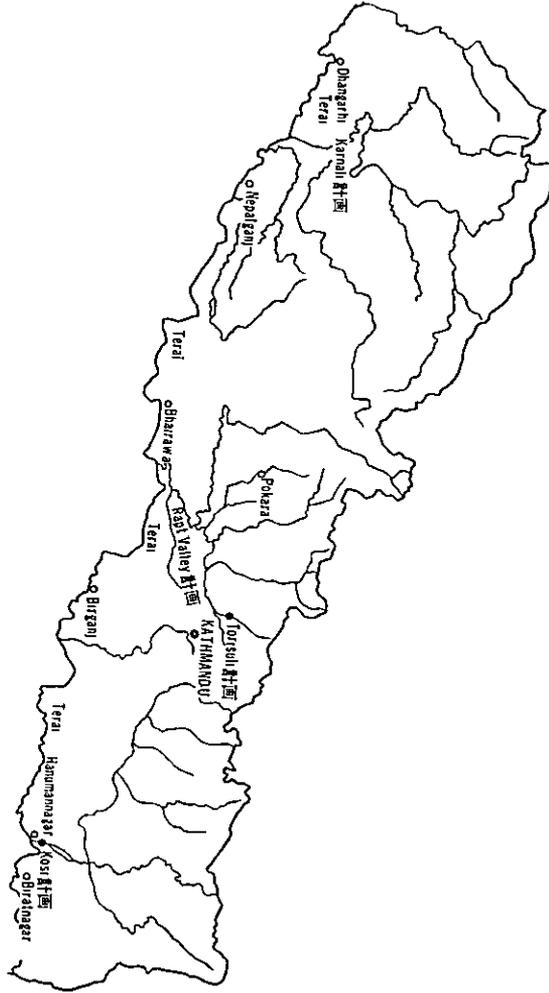
一四 通 商

通商は交通の交叉点と貨物積換点（貨物自動車から牛馬車へ、牛馬車から蓄力、人力に）に発達している。インド以外の外国との直接貿易は、ネパールに手持外貨が少いことやネパールに直接輸出する産物が少いために極めて制限されている。ネパール国内を東西に貫通する道路が完成していないので、国内通商もインド領土を経由することが多く、インド製品との競争上不利である。

ネパールよりインドへの主要輸出品は米、家畜、皮革、*ghee*（乳より製造した脂）、木材、薬味、じゃ香、硼砂、テレピン油、薬草、黄麻等である。最近では油料子実が増加して来た。インドよりネパールへの主要輸入品は綿製品、ヤーン、毛織物、織物、塩、薬味、雑貨、銅板、煙草、石油、食糧品、化学製品等である。

山岳地帯の物資は Terai 地帯の集散地に集りインドの鉄道駅に運ばれる。その主な集散地は同時に工業中心地でもあり東部から列記すると

Birahangar はインドの Jogbani 駅に隣接し、稗、粘米、黄麻、油料子実、木材が輸出され、塩



石油、油脂、雑貨が輸入される。

更に西に行くと、Hanumanagarがある。Birganjの背後地は Rapti Valley 經由 Kathmandu 更にその奥地を経てチベットをひかえている。Birganjは隣接したインドの Rakaul 駅から樞、油料子実、木材、葉草が輸出され、石油、雑貨、繊維品、塩、煙草等が輸入される。又 Birganj から狭軌鉄道が北方に丘陵の麓にあたる Amlethganj まで五〇軒を営業している。

Bhairawa の背後地に Pokhara がある。Bhairawa からインドの Naulanwa 駅に搬出され、米、thee、菜味が輸出され、塩、雑貨が輸入される。Bhairawa の西におしるかさまの生誕地 Lumbini がある。

更に西に Nepalganj、Dhaugathi があり夫々インドの Nepalganj Road 駅、Gauri Phanta 駅に隣接している。礫砂、菜味、穀物、油料子実、木材が輸出され、雑貨、煙草、金属、塩、砂糖等が輸入される。この地方は東部に比べまだ開発されていないので、今後の発達にまつ地区である。

Kathmandu は昔からの国内通商中心地で、資産者が集り住んでいる所でもあるので、大きな消費都市である。近年自動車道路、航空路の中心地となり重要性を増して来た。

ヒマラヤ地区の通商中心地はネパールとチベットの産物の通商場所であると同時に、インド、チ

第1表

(単位 ナポール万ルビ-1ナポールルビ-は邦貨約47円)

品目	輸		出		輸		入	
	1957-58年	1958-59年	1959 60年	1957-58年	1958-59年	1959-60年	1959-60年	
食品	4,779	8,791	9,801	3,877	4,302	6,586		
糧	182	89	92	1,323	2,153	2,065		
煙	1,825	2,580	2,732	931	778	1,327		
原	8	2	1	1,118	1,543	2,087		
物	66	61	37	1,021	1,050	476		
脂(動物)	6	10	54	660	931	1,195		
質	114	161	231	4,685	9,169	10,678		
品	5	—	2	654	637	833		
品	124	36	89	1,113	1,213	1,871		
製	—	—	—	299	161	1,146		
車	221	64	46	161	402	489		
類、	7,331	11,793	13,084	15,836	22,339	28,753		
機								
用								
の								
マ								
シ								
の								
計								

ベットの仲雜貿易地でもある。チベットからはシコール、塩、礬砂、じゃ香、砒素、金粉、アンチモニー、菓草が搬出され、チベットには金物、綿製品、煙草等が搬送される。その主要路は *Kanungu* を經由するが、人背による運搬が多く、一人当り三五キログラムが標準で七〇キログラム運ぶものもある。

チベットとの通商は、ネパール東部に近い *Darjeeling*, *Kalimpong* を經由した自動車路が完成し、又チベット自体中国中央との交通が良くなったので、ネパール經由の貿易は減少しつつある。貿易統計はネパール税関の資料によれば第1表の通りである。その大部分は対インド貿易である。インド・ネパールの国境は直線距離八〇〇杆に亘って陸地続きであるので、税関を通らない搬出もあるといわれている。

一五 財 政

一九六一―六二年の財政は歳入九、〇〇〇万ルピー、歳出一億九、〇〇〇万ルピーで、不足額一億ルピーは外国の援助額七、〇〇〇万ルピー、短期借入一、七〇〇万ルピー、保有金一、二〇〇万

ルピーによりまかなう。歳出額一億九、〇〇〇万ルピーは通常経費一億四〇〇万ルピー、開発経費八、六〇〇万ルピーで工業、鉱業、動力、保健、教育の経費が増加している。

一九六二―六三年の財政は歳入一億三、三八〇万ルピーに増加する予定で、前年比四、三八〇万ルピーの増加は土地税、収入税、森林収入の増加によると見込まれている。歳出は通常経費一億四八六万ルピー、開発経費一億五、七〇〇万ルピーの見込である。不足額一億六、四〇〇万ルピーのうち、外国援助額は一億二、八四〇万ルピー、その他は借入金の子定である。

ネパールの経済開発計画

新

家 義 雄
(海外技術協力専攻
開発調査部 助教授)

一 は し が き

ネパールでは現在第二次経済開発計画が進められている。この計画は一九六二年から始まる三年計画であって、将来ネパールの広範な経済開発を円滑に遂行するための基盤を作るのが目的である。

第一次経済開発計画は一九五六年から始まり、一九六一年に終わった五カ年計画であった。この計画は村落開発、郵政、保健、教育等の部門ではかなりの成果をあげたが、全体としては必ずしも満足出来るものではなかった。第二次計画は第一次計画の実績と経験をもとにしてより着実に策定されている。

周知のように、ネパールは長い領国後の停滞した経済状態にある国で、その経済開発に当って先進工業国の経済的技術的援助を最も必要としている国の一つである。その意味で、われわれ技術協力に携わっているものにとって、その計画内容には深い関心を持たれる。以下この第二次経済開発計画の概要を述べて、御参考に供することとする。

二 計画の目的と重点

ネパールは一世紀近い鎖国を解いてまだ間もない国で、その社会や経済の状態は想像以上に遅れている。従って、今にわかには広範な経済開発を行おうとしても、経済や資源に関する統計資料が乏しく、充分な開発計画を立てられない。又、仮に計画を立てられたとしても現在の組織構造はその遂行に役立たないし、その支えとなる基礎的な下部機構も整備されていない。第一次経済開発計画が予期した成果をあげられなかった原因もここにあると考えられる。

第二次計画では、右に述べた開発上の欠陥を補い、それによって近い将来より広範な開発計画を立てて、これを円滑に遂行するために欠くことの出来ない基盤を作ることがその主な目的とされている。尚、この計画では右の主目的に加えて、その事業計画には国家発展の長期計画目標に基づいて政府の経済政策を考慮している。その長期計画目標は次の通りである。

- (イ) 生産の増加
- (ロ) 経済の安全

- (ハ) 雇用の増大
- (ニ) 配分の公平

計画の重点は勿論主目的と長期計画目標の達成に置かれている。即ち、経済開発の基礎的知識を準備し、組織構造を改善し、そして将来経済開発の時期に必要な基礎的下部機構を作ることにも重点が置かれている。農産物や工業品の増産、或は現在の社会施設を強化することはその次の順位が与えられている。

国家計画委員会で計画の目的とその実施方針に基づいて決めた事業別の順位は次表の通りであって、同時に各事業に対する資金の配分も示してある。

第二次計画事業別順位と資金配分

事業別	配分額(単位一〇万ルピー)	
	予算	借款
一、組織の改善、調査統計、広報、訓練	七九二	一〇〇
二、運輸通信施設、電力の開発	三四五	一〇〇
三、農業開発	八一六	一〇〇
四、工業開発	〇二〇	五〇〇

五、社会施設の強化拡充 (計)	一、〇二七 六、〇〇〇	七〇〇
--------------------	----------------	-----

備考 一ルピーは邦貨換算約四五円である。

細目は附表(一)参照のこと。

三 開発資金と財源

第二次計画の実施に必要な資金は総額六億七千万ルピーであって、財源は次の様になっている。

財源	金額(単位一〇万ルピー)
一、外国援助	五、〇〇〇
二、政府支出	一、〇〇〇
計	六、〇〇〇
三、借款	
外国債	六〇〇

右の表でも判る通り必要資金の大部分は外国の援助に依存している。計画の三カ年間に期待の出来る国別の援助額は次の通りとされている。

国別	金額(単位一〇万ルピー)
米 国	二、一〇〇
イ ン ド	一、四〇〇
ソ 連	八〇〇
中 国	四〇〇
英 国	一五〇
国 連	一〇〇
そ の 他	五〇
計	五、〇〇〇

右の援助額の中には技術専門家派遣の形での援助や海外におけるネパール人専門家の訓練費用は

内 国 債

計 七〇〇

一〇〇

含まれない。

外国からの援助額を減らし、国内財源を動員するという見地から、少くとも一億ルピーを政府で調達する必要があるが、この金額は現行の財源から調達することは困難である。そこで一部現行税率の引上げや新税の賦課が考えられ、又国内の貯金を動員したり、公営企業の利潤を上げる努力もすることになっている。

四 事業計画

第二次経済開発計画の主要な事業の概要は次の通りである。

(1) 組織の改善、調査統計、広報、訓練

経済開発を成功裡に遂行する為の準備として、先づ社会および経済の分野に強固な組織構造を作ることが必要である。そのため組織と管理方法の改善に最も重点が置かれている。

(4) 土地制度の改正

現行の土地制度では収穫の大部分が農民の所有にならない。そのため増産をもたらす新しい方法の採用に対し農民が消極的である。従って、増産のためばかりでなく、田舎に特有の経済的な欠陥を排除するためにも土地制度の改正が必要である。政府が今日までにとった措置の中に二〇一四年（ネパールの紀元年数）の土地法と二〇一六年のビルタ廃止法がある。土地法は小作料の最高を五〇％に決め、強制労働を廃止し、使用料の支払を不法とした。その上に一年間小作をした土地の小作権を保護した。ビルタ廃止法は土地制度の改善にはよい条件を作ったが、土地行政を能率よく行なわないと意味がない。即ち、小作権の登記、地籍図の明細、地方の信用準備などがないとこの土地制度の改正は成功しない。

地籍測量は、小作権の確立に科学的な基礎を与え、そして所有権の明細から収入を決定するため土地の性質、大きさ、所有の型を確立するものである。第一次計画では一三地方で一、〇八六、〇〇〇エーカーの土地について地籍測量が行なわれ、三三六、五〇〇エーカーが登記された。第二次計画ではテライの残りの地区と、丘陵地の一部及び内部テライの四、六〇〇、〇〇〇エーカーについてこれを完成するものである。測量事業の円滑な実施に必要な行政措置がとられる。

土地制度の改正に成功するには十分な地方の信用制度の準備が必要である。そのため計画期間中

に農業信用銀行の設立が計画されている。これまでは農業に対する信用は協同組合を通じて行なわれて来た。右の農業信用銀行に加えて更に二、三〇〇の新らしい協同組合と一四の販売信用組合が作られる。そのため一千二百万ルビトが計画期間に支出される。

(四) 行政組織の改善

能率のよい行政組織が開発計画の遂行に必要であるとの見地から、その改善に力を入れている。計画策定の見地から、行政事務は単に、開発事業の遂行に限定されない。行政組織は自ら進んで、広範な計画を準備し、発生し又は発生すると思われる便益を評価する。この様な広範な計画の準備のため、計画班を各省各局及び大企業の中に作る。事業計画を正当に評価するため、一定時期毎に中間報告を要求し、それから直ちに評価がされる。又、計画の遂行上必要があれば、時々行政組織を変えるようにする。このことは長期計画を考慮して、現在の行政の各部の責任、苦情、及び相互関係の正当な調査を要求するものである。この種の調査は計画期間中に行なうこととする。行政機構の中で、時宜に適した変更を行なうため、既に二、三の措置がとられて、行政の分散や開発規則の修正、新しい支払手続きの実施などが行なわれた。それに加えて、各都局レベルの官吏の仕事は村でも地方でも地域でも適当に調整される。

開発事業推進の見地から三、四七四の村のパンチャート（土民村会）の形成は非常に重要であって、これによって地方行政組織の改善をもたらすものとしている。

訓練された人材が行政組織の改善に当って緊急に必要である。この目的のため中級レベルで訓練する行政官吏訓練所を開設する。又、移動訓練センターも地方で訓練のために開かれる。

(ハ) 公営企業

現在政府事業である電気、ロープウエー、航空、かんがい等を能率的に運営するため独立の公営企業とする。

(ニ) 広報活動

開発計画の実施に当って広報活動の重要性を認め、ラジオ放送局等の施設の拡充を行なう。

(ホ) 調査統計

充実した開発計画を作成し、これを迅速に遂行するため、現在の経済構造のほか潜在的な経済力についても十分な資料を集める。そのため調査事業に重点をおく。調査事業としては一般調査及び投資前調査を行なう。

一般調査は資源開発の順位を決めるのに必要で、森林資源、鉱物埋蔵量、土壌、工業用原料およ

び水資源等について行なう。

投資前調査は特定の開発計画の費用と便益を知るために必要で、スンコシ河その他の大水力、かんがい計画について行なう。又国際空港や近代都市の建設についても行なう。

広範な開発計画の作成には国民所得や国民総生産等の統計が必要である。そこで第二次計画期間中に農業調査を完了し、工業、貿易の統計資料を集める。人口調査の結果も判る。その他物価指数、家計調査の準備も行なわれる。又交通、電気、かんがい、教育、保健等の統計資料も集められる。

② 訓練事業

計画遂行の成否は訓練された人材の能力に負う所が非常に大きい。第一次五カ年計画では上級者の訓練のため、海外派遣が行なわれた。中、下級者の訓練は国内で行なうのが望ましかったが施設が不備のため或る業種については中、下級者でも海外に送らなければならなかった。第二次計画では中、下級の技能者の訓練は出来るだけ国内で行なうこととする。

現在国内に中級技能者の訓練所が二、三ある。第一次計画では六、三五一人がこれらの訓練所で各種の訓練を受けた。今度の三カ年計画では家内工業以外の各種の業種で七、〇〇〇人の技能者を

必要とし、二二九人の各種技術者、三六〇人の監督、五八〇人の農業専門家、四六三人の林業専門家、一九〇人の保健所従業員、二、九〇〇人の小、中学校教師を必要としている。これらの需要に必ずすため下級技能者は国内で訓練される。その内訳は下記の表の通りである。

海外派遣は訓練に数年間を必要とするので計画期間中に帰国しないものもあるし、又この計画実施前に派遣されたもので計画期間中に帰国するものもある。これらを差引した数は次の通りである。

(2) 運輸通信事業

(1) 運輸

ネパールの様に陸地で囲まれ、高い山脈や大きな河で分割された国では、輸送問題は重大である。

訓練画計

業種	人数
農業	四七〇
林業	二〇〇
監督	二九〇
保健所従業員	二五八
小学校教師	三、〇〇〇
家内工業	二、〇〇〇

派遣計画

業種	人数
技術者	一〇九
監督	七〇
農業	八一
林業	六
保健	八三

地形や一般的経済状態にも拘わらず、国家資源の開発、市場の拡大、更に国民の団結や治安の見地から道路と航空による輸送は最も重要である。

現在道路の延長は七九二哩でその内訳は自動車の走れるものが一六二哩、全市の道路が三〇八哩、舗装道路が三二二哩である。

第二次計画では七八哩の道路が舗装され、雨季には使用出来ない乾季道路一六五哩が全季道路に変わり、新らしく全季道路が七二四哩建設される。又、パンチャート計画で普通道路が作られる。

橋梁はモーラン地区のシンハイ河に一橋とカトマンズ盆地に一三橋が架けられる。又、歩行者用の橋が三十カ所に架けられる。

航空については、一二空港の改良と三空港の建設が行なわれる。又、丘陵地にある地方庁所在地約二〇に小型機の着陸出来る滑走路を作る。

カトマンズ、ヒタウラ間のロープウェイは長さ二八哩で一時間二五屯の輸送能力があり、ほぼ完成して、計画期間中に運転開始の運びとなる。

鉄道は機関車三台と若干の客車が追加される外、線路の改良が行なわれる。

(四) 通 信

三カ年計画で二八の郵便支局の増設が行なわれる。郵便為替、保険、小包郵便が取扱れるようになる。

首都カトマンズでは六〇〇回線の自動電話が追加される。国際無線通信はカトマンズからカルカッタ、デリーに二回線設けられ、又ラジオテレプリンターも作られる。

(3) 農業かんがいおよび林業

第二次計画では農業開発として、かんがいと農業の振興に力が入られる。かんがい部門では工事中の事業は完了し、特定の大規模かんがい事業を実施する責任をもった特別の組織が作られる。農業部門では改良種子の使用、果樹の栽培、土地保全、および特定の生産事業に重点がおかれる。

林業部門では、植林、林道の建設、林界の画定、牧草の開発が大規模に行なわれる。これは森林開発の長期計画に必要な条件を作るためである。

(4) 農業

国民の九〇%が土地に依存して生活して居るので、生活水準を上げるには農業開発が極めて重

要である。しかし、その開発は容易でない。それは土地改革や協同作業の拡張と密接に結びついて
いるからである。又農器具・化学肥料・消費販売の管理も同じで、これらは工業、輸送、電力など
の問題と密接な関係にある。これらの相互関係はあるにしても、根本的な基盤はかんがい、改良種
子、新しい農器具および、より生産的な耕作方法を必要とする農業生産そのものである。

現在八〇〇万人のネパール人が六〇〇万エーカーの土地から生活の糧を得ている。しかし土地の
生産性が非常に低く、若し生活水準を上げようとするならば適切な方法が採られなければならない。
改良された耕作方法や種子、家畜、農器具のよい型を見出す実験や研究などを如何にして農民
に知らせるかが、農業振興の重要な課題である。その他収穫物の貯蔵や肥料、かんがい水の使用に
より起る結果とその利益等の評価についても注意が払われねばならない。

第一次計画で開設されたセンターに加えて、新しいものが作られる。それらの数は次の表の通
りである。

右のセンターの他に次の様な新しい業種のセンターが開設される。

センターの名称	箇所数		備考
	既設	第二次計画 画新設	
一、耕種センター	一〇	八	
二、家畜病院	一	二	
三、漁業センター	一	三	
四、果樹改良センター	一	一五	
五、牛乳集荷センター	六	一六	
六、チーズ工場	一	一三	
七、牛乳加工センター	一	二	
八、畜産センター	四	七	
九、種畜場	一	四	
一〇、穀物貯蔵センター	一	六	
一一、農業振興センター	五	九	
一二、家禽農場	二	六	

センターの名称	箇所数	備考
みかん選別センター 食品研究所 牧草地 家事科学研究所 ミルク冷却センター	二 - 五 - 二	

センターの成果が農家の間に判って、その方法が普及すれば、

穀物 農具 魚獲 豚 卵	数量
穀物	一六〇、〇〇〇マウンド
農具	一、六〇〇個
魚獲	一、八七五、〇〇〇尾
豚	三、二五〇匹
卵	七、二〇〇、〇〇〇個

が生産される見込みである。

尚、再入植が農業振興事業として考えられている。これは増加する人口に生活の方法を与えるという見地と、土地の肥沃度に与える被害を防ぐため一定地域の人口密度を減らす目的で行なわれ

る。第二次計画では約五〇、〇〇〇エーカーの土地に組織された形の六、〇〇〇家族の再入植を行なうもので、必要な資金は政府から与えられる。

(四) かんがい

かんがいは農業生産を増加する第一の要素であるとともに、生産物の多様化を可能にする。ネパールでは水は沢山あるがかんがい施設がないため、肥沃な耕地が放置されている。即ち現在約六、〇〇〇、〇〇〇エーカーが耕されているが尚約六、二〇〇、〇〇〇エーカーの未耕地がある。

第一次計画で六五、二〇〇エーカーが新しく加えられて現在一二七、二〇〇エーカーがかんがいされている。第二次計画では大規模かんがい事業で一〇五、〇〇〇エーカー、小規模かんがい事業で一、〇〇〇エーカー計一一六、〇〇〇エーカーにかんがい施設が作られる。こうして追加された耕地で九二八、〇〇〇マウンドの穀物の生産増加が予定されている。

(イ) 林業

ネパールでは国土の三分の一が森林であって、原材料の供給に重要な役割を果している。長期開発計画のため第二次計画では、植林、林界の設定、防火帯の設置、林道の建設が行なわれる。その事業量は次の通りである。

植	林	一〇、〇〇〇エーカー
林	界	四、九二五哩
防	災	三九二哩
林	道	二四五哩

右の他、土留、苗木作り、国立公園の建設などが行なわれる。又カトマンズに中央研究所が建てられ薬品の用意、固有の牧草の実験および分析が行なわれる。

(4) 工業と電力

三カ年計画で現在の工業の条件を改善し、又建設中の政府管理工業の完成を早める。電力の開発には特別に重点が置かれている。それは電力の準備が工業開発の基礎条件であるからである。

(1) 電力

三カ年計画の主目的は将来計画の成功を確実にするため必要な基盤を作ることであつて、先づ電力の準備が経済開発の根底であることが認められ、国内の電力施設の拡充に最重点が置かれている。既に着工されている次の水力開発計画が完成し、更に新しい計画が着工される。

発電所名	出力 (キロワット)
トリスリー	九、〇〇〇
バナウチ	二、四〇〇
タロウコウラ	三五〇
ボカラ	五〇〇
計	一二、二五〇

水力発電は運転開始までに長い時間がかかるので、現在及び工事中の工業需要に対してはディーゼル発電所が作られる。
 第二次計画の期間に二二、〇〇〇のキロワット電力の発生と二〇〇哩の送電線の建設が行なわれる。

(四) 工業

工業開発の分野では交通施設の欠如、銀行組織の不備、統計や技能者の不足が問題である。
 第二次計画では第一次計画で着手された事業の完成に努める。一方新しい民間企業に対し、助成が行なわれる。これはネパール産業開発公団からの貸付で開始されるものである。この場合輸入

を減らし、輸出を増すものに優先順位が与えられる。

政府事業で砂糖、タバコ工場が完成し、生産を開始する外、製紙、セメント工場も大部分完成する。又工業地帯の造成拡張が行なわれる。右の工場が運転に入ると、次の様な年間生産が期待される。

タバコ	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇本
砂糖	二二、〇〇〇屯
セメント	五〇、〇〇〇屯
紙	六、〇〇〇屯

(ハ) 家内工業

家内工業についてはこれまで訓練に重点が置かれたが、これからは仕事場を作ることに対して助成策がとられ、貸付又は施設の供与が行なわれる。その他就職のあっせんも行なわれ、計画期間に二、六〇〇人が雇入れられる。

家内工業センターの製品はカトマンズ等の特別販売店で売られる外、海外のネパール大使館に展示室を設けて宣伝される。

(ニ) 観 光

ネパールは観光面で魅力のある国と見られている。インド国籍者を除いて毎年平均五千人の旅行者が訪ねる。しかし施設が欠けているためその数は余り増さないし、予想した程の外国為替の利益も受けられない。第二次計画ではホテルのベッド数を一一〇増やす計画で、産業開発公団がホテル施設の増加を目的とする個人企業に四、八〇〇、〇〇〇ルピーの貸付を行なう。その他国営旅行案内所が作られ、国内の著名観光地の旅行施設が拡充される。

(5) 社会福祉

第二次計画では社会福祉については現在施設の拡充は行なわないで、その強化と改良が行なわれる。

(1) 保健

三カ年計画では、現在の保健施設の改良に重点が置かれる。現在病院は三九、ヘルスセンターは九三ある。これらに加えて、計画期間中に、一五ベッドの病院が三つ、五〇ベッドの病院が二つ作られ、ヘルスセンターは一〇カ所開設される。その他、長期計画目標が考慮されて、各種の施策が行なわれ、その結果、病院のベッド数は九〇三に二九〇が加えられる。又地方のヘルスセンターに女医が任命される。

ビル病院の改良計画は完了する。今日まで二万人がマラリヤ撲滅計画で恩恵を受けたが、第二次計画の期間にこの予防は四五〇万人に拡げられる。レブラと天然痘の撲滅作業も始められる。又衛生研究所が一つ作られて、保健従業員の訓練が行なわれる。

(四) 上水道

三カ年計画で現在工事中の沢山の水道計画を完成し、一日の給水量九〇五万ガロンを増加する。又カトマンズの上水道不足を解決するため、新しい水道計画が行なわれて毎日三二〇万ガロンが加えられる。水道計画には配水管の拡充計画も含まれている。

(五) 教育

この分野では組織の効率的な管理と改良が求められている。又職業と技能教育の導入が計画されている。そして初級の教育施設の数が特に増加される。現在の学校数及び新設予定数は次の通りである。

種 別	現在数	新設予定数
小 学 校	四、一六五	一、二〇〇
中 学 校	五〇〇	五〇〇
各 種 学 校	五	一〇
成人教育センター	一、八七八	四、〇五〇

計画期間中にこれらの施設で教育される生徒数は次の通りである。

初 級 六〇、〇〇〇人
 中 級 一六、五〇〇人
 成 人 一〇〇、〇〇〇人

高等教育の分野では新設よりも組織の改善に重点が置かれる。

国内の各所にホステルが開かれ、図書館が作られる。又教育用品の生産と配給を目的としてセンターが一つ作られる。

(三) スポーツ

スポーツ活動の改善計画が取入れられている。目的は国民の健康と娯楽の増進の外、ネパールの国威を海外に宣揚することである。この目的達成のため国民保健運動委員会が設けられ、中央スポ

ーツ局が一般にスポーツの訓練を行う責任をもつ。

施設としては運動場の改良、スポーツ会館の建設、テニスコート、水泳場の設置があげられる。又コーチを外国から招いて、国際競技に参加出来るまでネパールのスポーツマンの水準の上昇を計ることとしている。

五　む　す　び

以上はネパールの第二次経済開発計画の概要である。第一次計画と対比してみるとかなり着実に計画されたあとがうかがえる。

筆者は外務省から派遣されて、水力開発計画の調査とその技術指導で兩三度この国を訪れ、若干ともその実態に触れる機会をもった。第一回は一九六〇年で第一次計画の終り頃であった。当時第一次計画を見せられて感じたことは経済や社会の現状に則していない理想計画ではないかと云うことであった。卒直に云ってネパールの社会、経済の現状は明治維新直後の日本のそれに似ている。即ち、長い閉鎖国政策をとってきた幕府が倒れて、王政復古、開国となり、諸政一新、新政府は鋭意国力の充実発展を計ろうとしている。しかし、新政策の実施は因襲的な社会組織の壁や前時代的な経済構造の土台にぶつかって、なかなか思うように行われない。第一次計画はかかる状態で計画

され又実施された。従って、その結果が全体として満足出来るものでなかったのも無理はない。

一九六一年の秋、再度ネパールを訪れた筆者は一年経った社会経済状況の変化に興味をもった。しかしその変化は予期した程ではなかった。市街地の舗装が進み、道を走る自動車の数が増加したが目に留った程度であった。更に、それから半年経った一九六二年の始めに訪れた時、街の舗装は更に進み自動車の数も増し店に並べられた品物の数が多くなっていた。又、それまで出なかったホテルのバスが出るようになって、ネパール経済にも温みが出てきたと思った。

当時ネパールの知人から第二次計画はその年の七月から実施されることになっていると云って草案の概要を見せられた。その草案の冒頭には第一次計画の経験と反省の上に策定されることが書いてあった。今ここに第二次計画の概要を入手しこれを通読して、この計画が第一次計画の実績と経験を充分考慮しかなり慎重に策定されているのを知って嬉しく思った。それは筆者が関係した水力開発の部門でも実際にその事を痛感したからである。殊に計画の策定に当って、地味な基礎資料の調査収集や、組織の改善、下部機構の整備に重点がおかれている事に敬意を表したい。それでこそ第二次計画策定の意義があり成功が約束される。そしてより広範な将来の経済開発計画を円滑に進める基盤が出来るのである。

附表(一) 第二次計画の資金配分

事業別	配分額(単位一〇万ルビ)		借款
	計	内訳	
一、組織の改善、調査統計、広報、訓練	七九二	二五	一〇〇
a 土地制度改正(行政)		一〇〇	
地籍測量		三〇	
農業信用		五〇	
b 行政組織の改善		二〇〇	
パンチャート		二〇〇	
d 調査統計	二二五		
e 訓練	一一五		
f 広報	三三		
二、運輸、通信、電力	二、三四五	一一二五	
a 道路		二五〇	
b 航空		二五〇	
c 郵便電信		六〇	
d 電力	九一〇		

合 計	三、農業、林業、かんがい a かんがい	八二六	四〇〇	
	b 農業		二八二	
四、工業、観光	c 再入植		一三四	一〇〇
	d 林業			五〇〇
五、社会施設	a 工業	一、〇二〇	九〇〇	
	b 家内工業		一〇〇	
五、社会施設	c 観光	一、〇二七	二〇〇	
	a 教育		四〇〇	
六、〇〇〇	b 保健		三七〇	
	c 上水道		二四〇	
七〇〇	d 運動娯楽		一七	
	計			

附表(二) 第二次計画目標

項目	単位	第二項計画以前	第二次計画目標
農業	マウンド/年	六七二、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
食用穀類	ポンド	四七五、〇〇〇	三、四三〇、〇〇〇
改良種子	個	九一、八〇〇	六〇〇、〇〇〇
卵	羽	二二、〇〇〇	一一〇、〇〇〇
鶏	尾	二四三、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇
小魚	尾	一一、〇〇〇	一七〇、五〇〇
魚	ポンド	二、〇三五、二〇〇	九、六二五、八〇〇
牛乳及牛乳製品 (キール・バター・チーズ)	四	四三二	二、八〇〇
畜産改良	箇	二一	二、八〇〇
耕種及園芸センター	箇	二二	二、八〇〇
家畜病院及畜産センター	箇	二二	二、八〇〇
酪農開発センター	箇	一三	三三三
農業振興センター	箇	五	三三三
工業	ト/年	二、二三七	三〇、〇〇〇
砂糖	ト/年		三〇、〇〇〇

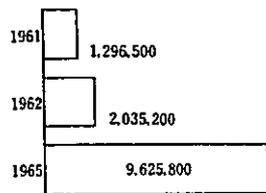
郵便線擴張 郵便支局 電話	航空 飛行場 滑走路 空港改良	懸橋 フエリ 橋梁	非鋪裝 鋪裝 道路	植林 牧草地 牧草取引センター
箇所 線	箇所 "	箇所 箇所 箇所	哩	エーカー 箇所
一、二二〇 一八二 二	六 二	一七五 三五	四三八 三四五	九七二 二四
九〇〇 二八 一五	二〇三 二〇	三〇三 一三	七二四 二〇〇	一〇、〇〇〇 二二

地籍測量	エーカー	一、一七七、〇〇〇	四、六〇〇、〇〇〇
協同開発 協同信用組合 協同市場連合 組合員数 貸付	箇所 人 ルビー	五八一 一五、八八二 二、五二五、〇〇〇	二、二〇〇 一四 六六、〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
広報 共同聴取センター 記録映画ニュース	箇所	一〇	六六、〇〇〇 一二五
訓練 技術学校 監督者数 農業学校 農業免許状所有者 農業助手及農夫 畜産業者及監督 林業試験所 森林監守	校 人 人 人 人 人 箇所	一八〇 二四一 七六 五八 七〇	二九〇 二六五 九〇 一六〇 五〇

林業従業員	人	一三五	一五〇
看護婦養成所	所	一	一
看護婦及助産婦	人	三三	六〇
保健助手学校	校	一	一
保健助手	人	八一	九八
師範学校	校	一五	三九
小学校教師	人	三、五五一	三、〇〇〇
教育大学	校	一	一
中学校教師	人	二六〇	七〇〇
初級調査員	人	五二八	二〇〇
協同組合職員	人	一	一八〇
家内工業訓練者	人	二、一二五	二、〇〇〇
村落従業員	人	一、二四八	一、五〇〇

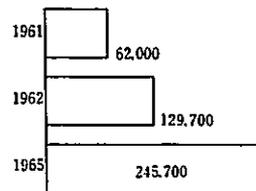
(註) 附表(ロ)の数字で本文記載の数字と若干差異のあるものが見られる。現在入手した資料では何れを正とするか判らないのでそのまま記載してある。

(ニ)牛乳及び牛乳製品(単位サンド)

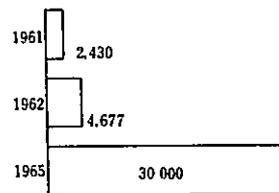


農林

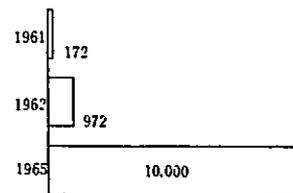
(イ)養蚕面積(単位エーカー)



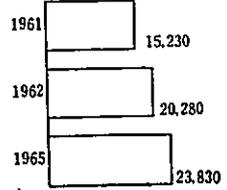
工業
I 砂糖(単位トン)



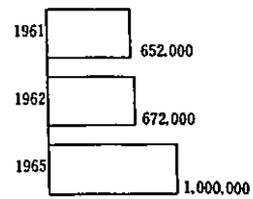
(ロ)植材(単位エーカー)



II フェルト (単位トン)

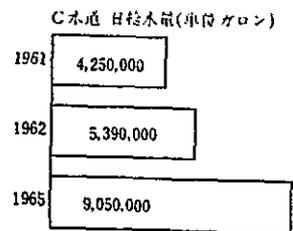
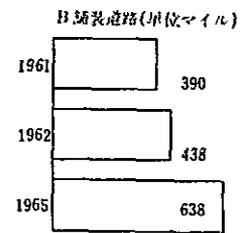
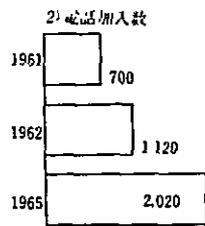
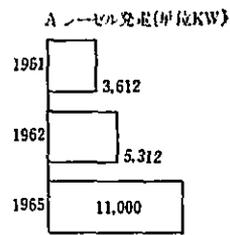
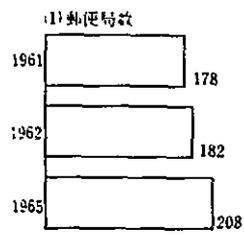


(ハ)食用穀物(単位マウント)



223 ネパールの経済開発計画

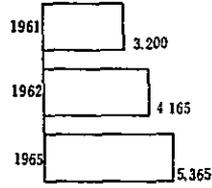
通信



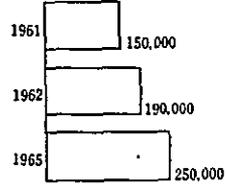
教育

小学校

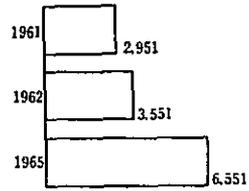
a 学校数 (单位: 校)



b 生徒数 (单位: 人)

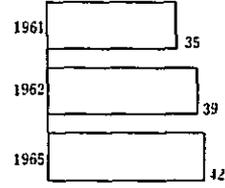


c 教師数 (单位: 人)

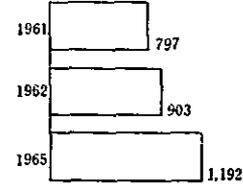


医療

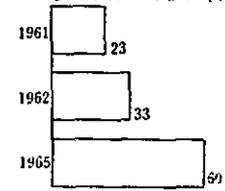
① 病院数



② 病床数



③ 看護婦及び助産婦 (单位: 人)



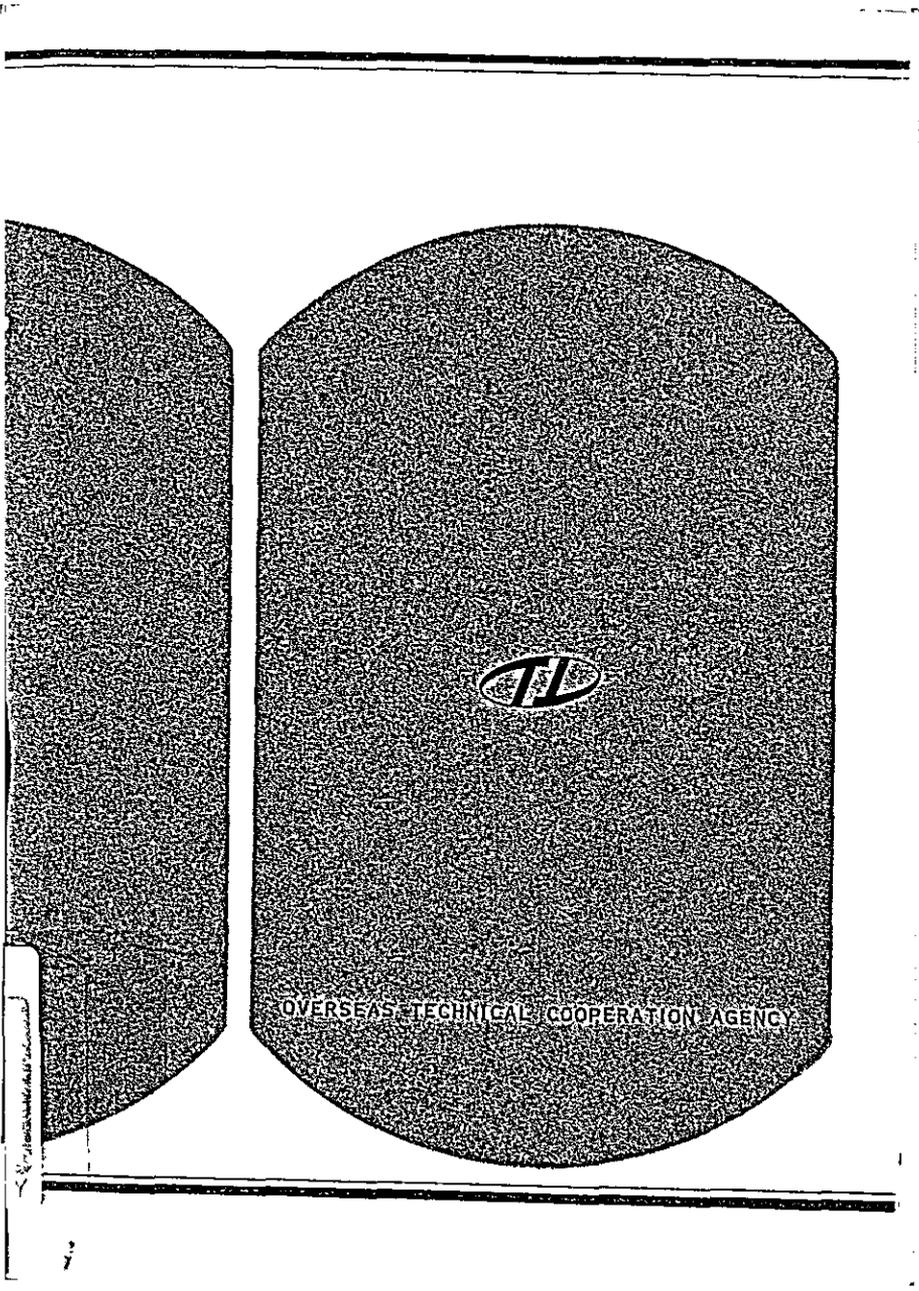
新 家 義 雄	遠 山 一 郎	恵 下 湧	筆 者 紹 介
海外技術協力事業団 開発調査部実施課長	産業機械課長	通商産業省工業品検査所 機械金属部長	

——海外技術協力叢書 II——

ネパール篇

昭和 38 年 12 月 10 日	発行
編集兼発行者	海外技術協力事業団
発行所	海外技術協力事業団 新宿区市ケ谷本村町42番地 経済協力センタービル 電話 (362) 4271 代表
印刷所	株式会社 文 唱 堂 千代田区神田佐久間町3-37 電話 (851) 0111 ~ 5

非 売 品



OVERSEAS TECHNICAL COOPERATION AGENCY